
緋弾のエリア ～飛天の継承者～

ファルクラム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア ～飛天の継承者～

【Nコード】

N7348Z

【作者名】

ファルクラム

【あらすじ】

東京武偵校に通う緋村友哉は、かつて最強の維新志士と呼ばれた剣客の子孫。そんな彼が武偵活動中に奇妙な事件に巻き込まれる。初投稿になります。少々、リアルで忙しいので投稿に関しては不定期になりと思いますが、どうかご容赦ください。ストーリーは基本的に原作沿いとして、あまり大きくは外れないようにしたいです。尚、クロスさせるに当たって「るる剣」側のキャラに関しては原作キャラをそのまま登場させるのではなく、彼等の子孫と言う事にしていきます。その方が「アリア」っぽいと思ったので。それでは、

宜しくお願いします

人物設定

・緋村友哉 ひむら ゆうや

16歳 男

所属：東京武偵校強襲学部強襲科2年

武器：日本刀（逆刃刀）×1

備考

幕末の維新志士の中で最強と呼ばれた「人斬り抜刀齋」の子孫。性格は穏やかで人当たりが良い。外見は中性的で少女のような顔立ちをしている。剣術の腕は相当な物だが、基本的に銃は使わない。飛天御剣流の技は伝承にある物を再現しただけなので全てを使う事はできない。

・四乃森瑠香 しのもり るか

15歳 女

所属：東京武偵校諜報学部諜報科1年

武器：イングラムM10×1 サバイバルナイフ×1

備考

友哉の幼馴染であり戦妹の少女。明るい性格で、どちらかと言えば天然系の友哉に対する突っ込み役でもある。江戸時代、將軍家に仕えた御庭番衆の末裔であり、高い身体能力と情報収集能力を持つ。

・相良陣さからじん

16歳 男

所属：無所属 東京武偵校強襲科強襲科2年

武器：素手

備考

お台場を中心に活動する不良グループの顔役的存在。細かい事は気にしない豪放な性格で人情にも厚く、不良グループの中では彼を慕う者も多い。喧嘩代行業で生計を立てており、その縁で友哉と戦い破れた後、司法取引と言う形で東京武偵校に転校する。

第1話「かくて黎明に幕は上がり」

1

まだ車も人も少ない朝の街を、1台のバイクが爆音を響かせて駆け抜ける。

型は通常のレーザータイプ物だが、貸してくれた車輛料の友人がエンジン回りを入念に改造してくれた為、最高時速は200キロ近く出せる。最早、羽を付ければ空を飛べるレベルだ。並みの複葉機よりも速い。

もつとも、日本の公道でそんな化け物じみたスピードを出せば、事故る以前に警察がすっ飛んで来る事になる。いかに大義名分があるとはいえ、そこまで冒険する気にはなれない。

とは言え、急ぐ必要がある事に変わりはない。

緋村友哉はフルフェイスヘルメットの中で目を細め、ハンドルを握る手に力を込める

通報を受けたのは10分前。ここ数日追い掛けていた案件が、ようやく、こちらの放った網に掛かってくれた。

《急いで友哉君、もう取引が始まっちゃう》

フルフェイスヘルメットの内側に仕込んだ通信機から聞こえて来たのは、後輩であり戦妹でもある少女の声。諜報能力に長けた彼女が先行して情報を集め、自分は寮で待機。即応状態を作っておく。と言うのが作戦の骨子だが、やや出遅れた感は否めない。

連中の動きをなかなか掴む事ができず、結局昨夜は一睡もできなかった。

だが、それで疲れているかと言われれば、そんな事はない。むしろ、一晩中気を張り詰めていたおかげで、精神が研いだ剃刀のように鋭利になっているのが自分でも判る。

「判ってる。こっちはあと3分で現着予定。その間に大きな動きがあつたら教えて」

《了解だよ!!》

叩きつけるような声が耳に響く。

あんな大きな声を出して、敵に見つかつたりしないだろうか。と少し心配になる。まあ、彼女は身軽だし、仮に見つかつたとしても捕まる可能性は低いだろう。

そつ心の中で呟きながら、速度を僅かに上げる。

スツと、心の中が落ち着く気がした。

気が付けば、周囲に流れる光景も、バイクの音も気にならなくなる。

戦場に赴く時はいつもこうだ。普通なら緊張するか、気持ちが高ぶるかのどちらかだと思っただが、自分の場合、なぜか気持ちが落ち着いてしまう。

良い事が悪い事かと言われれば、間違いなく良い事であるのだろう。それでも、我ながら不思議な感覚である。もしかしたら、これもまた自分の持つ「血」のなせる技なのかもしれない。

そうしている内に、目的の場所が見えて来た。

場所は東京港大井コンテナ埠頭。この場所で取引が行われる事を調べるには随分と労力を払った。

立ち並ぶコンテナを縫うようにバイクを走らせ、一気に目標となる場所まで走り抜けた。

そして、

「あれかつー!!」

7、8人の男達が岸壁に立って、手に持ったケースの中身を確認している。遠目にも、それが何か白い物を入れたビニールの袋である事が判る。

と、そこで向こうも走って来るバイクの存在に気付いたのだろう。

ぎよつとした様子で振り向くのが見えた。

ブレーキを掛け、後輪を横に傾けながらバイクを停止すると同時に、ヘルメットを取る。

一本にまとめた長い赤茶髪の下から、思わず見とれそうになるほど端正で中性的な顔立ちをした少年が姿を現した。体付きも細く、外見だけ見れば少女と言っても通りそうである。

友哉は左手で制服の内ポケットに入っている手帳を抜き取って開く。

「武偵だ。麻薬及び向精神薬取締法違反の容疑で全員逮捕します！」

全員が慌てたように銃を引き抜く。予想はした事だ。これで罪状は追加。銃砲刀剣類所持等取締法違反だ。

日本の銃規制も一時代前に比べてだいぶ緩くなった。こうして事件現場に出るたびに銃装備した連中に出会ってしまう。

友哉はバイクから飛び降り、同時に膝を撓めて跳躍の姿勢に入る。

真横に飛び退くのと、敵が引き金を引くのはほぼ同時だった。

しかし、弾丸は全て、残像を掠めるかのごとく命中しない。

全員の目が、驚愕に見開かれるのが見えた。

着地。同時に、友哉の右手は背中にまわされ、そこに背負ってい

る物を掴んで一気に抜き放つ。

昇りかけの朝日に、銀の刃が鋭く反射して輝く。

浅く反った細身の刃に、鉄拵えの柄。その優美な外観は、それが殺傷を目的に作られた代物である事を一瞬忘れさせるほどに心をひきつける。

手にしたのは一振りの日本刀。ただし、通常の物と比べると、峰と刃が逆になっている。

逆刃刀と呼ばれるこの刀は、通常通りに振っても相手を殺す事はない。まあ、当たれば骨の2〜3本は折れるだろうが。

次の瞬間、友哉は地を蹴って距離を詰める。

機先を制するのは、この流派の剣術にとって必須である。故に求めるは、究極の先の先。常に相手より速く、相手より先に動くのだ。

銃口が慌てたように友哉を向く、が、遅い。

その時には既に、友哉は間合いの内側に踏み込んでいた。

着地すると同時に、剣閃を下から斬り上げる。

ゴッ

鈍い音と共に、相手の顎を切つ先が捉えた。

強烈なアッパーカットを食らったに等しいその男は、手にした銃

を取り落としてあおむけに倒れた。

まずは1人。

倒れる敵を確認しながら、次の目標に視線を向ける。

トランクケースを持っている男が背中を向けて逃走するのが見えた。

その様子に、友哉は口の中で舌打ちした。

追おうにも、残りの敵が友哉の動きに気付き一斉に銃口を向けて来る。そちらに背を向けて追う事はできない。

友哉は視線も鋭く、敵を睨み据える。

元が一对多数戦闘を目的とした流派の剣術だ。この程度の敵の数など問題にならない。

踏み込むと同時に、刃を水平に倒して一閃する。

振るった刀が、2人の男の胴を一撃で薙ぎ払った。

「グアッ!？」

「ギャッ」

一閃で2人同時に薙ぎ払う。しかも、1人目と2人目でぶつけた威力は殆ど変わらない。

倒れる男達。

「よし、次っ」

更に斬り込むべく、刀を構え直す友哉。

対して残った男達も、銃を放ってくるが、こちらのあまりのスピードに殆ど照準を付けられない様子だ。放たれた弾丸は全て明後日の方向に飛んでいく。

その間に、悠然と距離を詰めて刀を振りかぶった。

「このっ、相手は1人だぞ。もっと落ち着いて狙え!!!」

リーダー格と思われる男がはっぱを掛けながら銃で応戦して来る。

敵は既に、当初の半分近くにまで減っている。このまま押し切る事は十分に可能だろう。

残った敵が盛んに銃を撃ってくるが、それが命中する事はない。全ての弾丸は友哉が駆け抜けた後を空しく通り抜けるだけだ。

反対に、友哉の剣は確実に敵を無力化していく。

「くっ、クソッ!!!」

残りはリーダー格と思しき、ケースを持った男1人だけ。その男も、もはや破れかぶれとばかりに銃を向けて来るだけだ。

トランクを持った男がコンテナの間を縫うようにして走って行く。

大事に抱えたトランクの中には、末端価格で数億円にもなる量のコカインが入っている。今回の取引が成立すれば大金が入る事は間違いないのだ。

それなのに、

「何で武偵がかぎつけやがるんだよ!?!」

とにかく走る。このトランクさえ無事なら再取り引きは充分に可能だ。何しろこれだけの量だ。裏でほしいと言う連中はいくらでもいる。

そう思った時だった。

「逃がさないよ!?!」

鋭い声と共に、上空から飛びかかって来る影が目に入った。

髪を短く切り揃えた小柄な少女は、短いスカートをはためかせて急降下して来る。

男が一瞬振り仰ぐ。

しかし、遅い。

コンテナの上から跳躍した少女が、手にしたマシンガンを一連射。

放たれた弾丸は、男の膝に命中する。

「グアツ!？」

足を押さえて倒れる男。同時にその手からトランクケースが放り出され、中に入っていたビニールに包まれた白い粉が地面に散乱した。

「クツ、くそっ!！」

痛む膝を押さえ、それでも散らばったコカインの袋を集めようと手を伸ばす。

しかし、その腕を踏みつけられ、同時に鼻先に銃口を突きつけられた。

「無駄だよ。いい加減諦めなっ」

東京武偵校の臙脂色の制服を着た少女は、そう言って不敵に笑った。

うなる銃撃音が少なくなっている。

敵は既にリーダー格と思しき男が一人だけという状態になっていた。他の者は全員、友哉の剣によって叩き伏せられ、地面に転がっ

ている。

その残る1人を仕留めるべく、友哉は更に刀を構えて斬り込む。

だが、流石はリーダーと言っべきか、盛んに拳銃を撃ち、接近の隙を与えてくれない。

今日日、防弾服の軽量、高性能化に伴い、拳銃は一撃必殺の遠隔武器ではなくなった。それ故に、その高初速、大威力を利用した打撃武器としての使用、近接拳銃戦、通称「アル」カタ」が発展を遂げている。

友哉が着ている武偵校制服もまた防弾線維で編まれた物である。が、銃弾の打撃力は拳などとは当然比べるべくも無く、一撃食らえば昏倒してしまう事もあり得る。

友哉と対峙している男もまた、そのアル」カタの使い手であるらしい。ある程度型にはまった動きと洗練された動作は、軍か警察の経験者、あるいは元武偵である事が窺える。

その銃口が、真っ直ぐに友哉に向けられた。使っている銃は旧ソビエト製軍用自動拳銃トカレフTT33。安全装置が無く、そのハイパワー振りから暴発事故が多い事で有名な銃だが、低コストが相まって、今でも多くの組織の末端構成員に愛用されている。

「死ねエー!!!」

対して友哉は、その銃口を冷静に見据えて駆ける。

距離にして約8〜9メートル。今から距離を詰めて斬りかかるに

は、僅かに時間が足りない。

だが、慌てる必要はない。

銃口と目線の向き、反動で腕が跳ね上がる瞬間のタイミング。それさえ見逃さなければ、弾丸の軌道を読む事はそう難しくない。

そして、

轟音と共に発射される弾丸。

次の瞬間、

残像すら残る勢いで、友哉の体は更に加速した。

神速とも言える身ごなしが可能であるならば、銃は決して恐るべき兵器とは言えない。

「なっ!?!」

一瞬目を剥くリーダー。対峙している彼には、正に友哉の体は消えたようにも見えた事だろう。

次の瞬間、友哉の姿がリーダーのすぐ真横に現われた。

リーダーはまだ、友哉の動きに気付いていない。

友哉の体が半回転する。その勢いのまま、逆刃刀を一閃。回転の威力を刃に乗せて叩きつけた。

「グアアアツ!？」

背中に剣撃を受け、リーダーは一瞬背をのけぞらせるように硬直した後、前のめりに倒れ込んだ。

これで終了。

友哉は背中の鞘を取り外すと、逆刃刀を収めた。

「お疲れ様、友哉君」

振り返れば、トランクケースを片手に持った少女が歩いて来るのが見えた。

短く切ったベリーショートの髪に、俊敏さを思わせる小柄な体。少女と言うより腕白盛りの少年と言った風情がある。

四乃森瑠香は友哉の傍らに立つと、ニコツと人懐っこい笑みを見せた。

「はい、これ。中身は全部確認しといたから」

そう言ってコカイン入りのトランクケースを差し出す。

「逃げた1人は？」

「縛ってあつちに転がしといた。車輛科の車が来てくれたら回収に行かないとね」

諜報科に所属する瑠香は、直接的な戦闘よりも情報収集、先行偵察に向いている。その為友哉は、今回の作戦に際して、瑠香に取引

情報を探ってもらったのだ。

その時だった。

「いやあく、実に素晴らしい。これほどの剣の使い手が武偵にいるとは驚きですよ」

突然の声に、友哉は刀の柄に手を掛け、瑠香はマシンガンを抜いて銃口を向けた。

振り返った先。

そこには、スーツ姿に無機質な仮面を付けた瘦身の男が立っていた。背格好からして20代から30代と言ったところではないだろうか。あまりにも自然と現われた為、気配を感じる暇すら無かった。友哉は刀をいつでも抜けるように、腰を落として抜刀の構えを取る。

『この男……』

友哉は先程まで感じなかった緊張感を感じる。

男はあまりにも自然に現われた。否、あまりにも自然すぎた。つい最後まで剣撃と銃撃が飛び交う戦場であったこの場所に、である。

瑠香も男の異様な雰囲気を感じているのか、銃口を一瞬も逸らす事ができず硬直している。

だが男は、刀や銃が見えていないかのように悠然と振舞っている。

そこで、先程友哉が倒したリーダー格の男が、痛む体を引きずるようにして顔を上げた。

「テメエ、『仕立屋』ッ！！ よくも裏切りやがったな！！」

激昂するリーダーに対し、仕立屋と呼ばれた男は差も心外だといわんばかりに振り返ってみせた。

「おや、『裏切った』とは？」

「とぼけるなッ 何で助けられなかつたんだよッ!？」

「ですから、私は何度も御忠告を申し上げた筈ですよ。計画があまりにもずさんすぎるから、見直した方がいいと。それを強行したのはあなた達の方じゃないですか」

その言葉に、リーダーは黙りこんだ。

そんな2人のやり取りを、友哉と瑠香は黙って聞いている。

仕立屋。聞いた事のない名前である。しかし、こうして容疑者と話している以上、今回の件に何らかの形で携わっているのは間違いないだろう。

それに……………

刀を握りながら、友哉は男を注意深く観察する。

一見すると、武術の心得の無い、ただ怪しい仮面を付けただけの男に見える。しかし、そのあまりにも無防備な立ち居振る舞いが、逆に友哉に警戒を解く事を留まらせていた。

そうしている内に、男はリーダーから興味を失ったかのように友哉の方を見た。

「まったく、仕立て甲斐の無い人達ばかりで困ったものですね。それに比べて、」

仮面越しの視線が、真つ直ぐに友哉に向けられた。

「あなたは、実に素晴らしい。そして可憐だ。武偵のお嬢さん」

その言葉に、友哉は状況も忘れて思わずため息をついた。

まあ、いつもの事と言えばいつもの事なので、今更嘆きもしないが。

「あの、僕、男なんですけど」

その言葉に、男も驚いたように肩をすくめた。

「これは失礼しました。あまりにもお美しいので、つい」

「まあ、良いですけどね。馴れてるから」

敵味方、場所と状況を忘れて随分とのんきな会話を交わしてしま
う。

「では、改めて。私は由比彰彦と申します。知人からは『仕立屋』
などと呼ばれております。以後お見知りおきを。それで、君の名前
は？」

「………緋村友哉です」

「なるほど、緋村君ですか。憶えておきましょう。機会があれば、ぜひ、私の仕立てにお付き合いたい物です」

そう言うと、身を翻す彰彦。

「ま、待てー！」

追い掛けようとする瑠香。

だが、駆けだそうとする少女を、友哉は片手を上げて制した。

背中を向けた彰彦を、友哉は追う気にはとてもなれなかった。

倒した犯人達を放置する訳に行かない。と言うのは勿論あるが、それよりも、追い掛けて確実に勝てるという確証が持てなかったのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

刀から手を放す。とにかく今は、取引を未然に防げただけで良しとしておく事にした。

傍らでは瑠香が、いかにも不満だとばかりに頬を膨らませている。

そんな彼女に笑い掛けながら、頭をなでてやる。

ちょうどその時、埠頭の反対側から1台の護送車が見えた。どうやら、容疑者護送用の車輛料が来てくれたようだ。

これにて事件解決。しかし、どうにも後味の悪い終わり方になっ

てしまった。

「由比彰彦……仕立屋、か」

あの男はいつたい、何者なのか。結局判らず仕舞いであった。

何とも、喉の奥に棘が刺さるような感覚が抜けない。仕事は終わったと言うのに、緊張が解けない。まるで、これから更に大きな事が起こる前兆であるかのように、友哉は漠然と、しかし大きな不安を拭えずにはいらなかった。

第1弾「かくて黎明に幕は上がり」

終わり

第2話「何やら騒がしくなっていました」

1

武偵。

その本来の語源は、読んで字の如く「武装した探偵」に由来する。

日々、凶悪化の一途をたどる犯罪者の群れに対抗する為、各国政府は司法、軍、双方に属さない独自の行動性と機動力、戦闘力を兼ね備えたライセンスを新設した。それが武偵である。

武偵は刀剣、銃火器による武装を公式に許可されていると同時に、凶悪犯罪者に対する捜査、逮捕権を有すると言う、警察に準じた権限が与えられている。警察との違いは、ある程度組織に捕らわれず独自の行動が推奨されている事、上からの指示や命令に従う必要はなく、依頼によって行動する「便利屋」の側面がある事である。

そして武偵を育成する為、世界には数多くの武偵養成校が存在している。

レインボーブリッジの南に浮かぶ南北2キロ、東西500メートルに及ぶ巨大な人工島。通称「学園島」。この人工島にある東京武偵校もまた、そうした武偵育成機関の一つである。

存在する専門学科は、強襲科、狙撃科、探偵科、鑑識科、諜報科、尋問科、車輛科、装備科、通信科、情報科、救護科、衛生科、超能力捜査研究科、特殊捜査研究科の14。それぞれに在籍する学生は一般科目の他に、これらの専門科目の受講も行う事になる。また、学生によっては既に犯罪捜査の一線に立って戦っている者も多い。

それら、特殊技能の習得を目指す半面、武偵校の偏差値は一般校に比べて低い事で有名である。勿論、中には例外的に全国でもトップクラスの成績を誇っている学生も存在するが、それは例外中の例外であると言える。彼等武偵に必要なのは、あくまで戦闘力や捜査能力、それらを補助する能力であって、一般教養など社会に出て恥ずかしくない程度に身に付けていければ良い、と言う訳である。

その武偵校も今日が四月の始業式となる。臙脂色の防弾制服に身を包んだ学生達。1年生は新しい学び舎に期待と緊張感を募らせ、2、3年生は新たな気持ち、新たな学友と共にこれからの一年に思いを馳せる。そんな光景は武偵校も一般校も変わりがない。

緋村友哉は強襲学部強襲科2年に所属している。

強襲科は武器を使用した戦闘術を主に学ぶ学科であり、将来的にもそうした荒事を本職とする職業につく事になる。斬った撃つたは日常茶飯事であり、その為、卒業までの生存率が100パーセントに満たない。「明日無き学科」とはよく言ったものである。気の合う友哉の友人などは昔のアニメに倣ってか「死ぬ死ぬ団」等と言っている。

始業式を終えた友哉は、流石に眠気に勝てなくなり、机に突っ伏した。

昨夜は一睡もせず、更に今朝の大立ち回りである。緊張を保っている内は良かったが、緊張の糸が途切れた瞬間、眠気はどっと襲って来た。

その後、車輛科に容疑者達を引き渡して護送を依頼してから、瑠香をバイクに乗せて学園島まで戻ってきた。

寮に戻るとシャワーを浴びて着替えを終え、寝不足で悲鳴を上げる胃袋に、何とか軽めの食事を入れてから登校した。その時点で学校へは行かず、そのままベッドに倒れ込みたい衝動にかられたが、始業式の日からそんな事をする訳にもいかず、眠気を訴える体を引きずって何とか登校したのだ。

辛うじて始業式の間は眠る事無く過ごせたが、ここらが限界だった。

ホームルームが始まるまで少し眠ろう。そう思って意識を手放しかけた時、

ドゴオッ

「起つきろオ、ユツチー！！」
「おろオッ！？」

突然、背中に激的な衝撃を受け、眠りの園の扉は一瞬にして閉じてしまった。

顔を上げると、前席の女子がにこにここと笑いながら友哉の背中に
全体重を掛けた肘鉄を入れている所だった。

長い金髪をツーサイドアップにした、小柄な少女である。着てい
る制服は彼女独自の改造が施され、ロリータ風のフリルがふんだん
にあしらわれ、原形を見失っている。

友哉が恨みがましい目でにらでも、相手はどこ吹く風とばかりに
顔に笑顔を張り付けている。

「……………理子」

「クフフ、おはようユツチー。始業式の朝から居眠りなんて随分と
大胆だねエ」

そうやって峰理子は、楽しそうに笑う。探偵科に所属している女
子で、友哉とは1年生の時から同じクラスであった。

底抜けに明るい性格からクラスのムードメーカー的な立ち位置に
ある理子だが、時々、こうして少し過激なはずらを仕掛けて来る。

「あのね、少しは眠らせてよ。こっちは朝から大変だったんだから」
「聞いているよ、大活躍だったんだってね。理子、ユツチーの武勇伝、
詳しく聞かせてほしいなあ」

「いや、だから、僕、眠いんだけど……………」
「いやー、拳銃振り回す奴ら相手に、ポン刀一本で立ち向かうユツ
チー。かっこいいねー!!」

ダメだ。会話が成立しない。理子の、この底抜けに明るい性格は
嫌いではないが、こうした時かなり困る。

ちなみにユツチーと言うのは、理子が友哉に付けたあだ名である。溜息をつきながら教室内を見回す。

今日から新しいクラスメイト達であるが、中には見知っている人間も何人かいる。

だが、クラス表が発表になった時、名前があつたはずの人物がいない事に気付いた。

「あれ、そう言えばキンジは？」

何度探しても、顔なじみの男子生徒の姿は無い。

遠山キンジは昨年まで友哉と同じ強襲科の学生だったのだが、今は探偵科に転科してる男子である。発表では同じA組であるとの事だったのだが。

「キーくん？ そう言えば来てないね」

理子も今日はまだ会っていないらしい。始業式からボイコットとは、なかなか度胸がある。こっちはわざわざ間にあわせる為に急いで依頼を片づけたと言うのに。

などとその場にいない友人に、心の中で恨み事を呟いていると、急速に意識が沈降していく。

もうダメだ。

目が回るような眠気と共に、頭が枕を求めて机に落下する。

理子が何度か呼びかけて来たのは意識できたが、最早起き上がるだけの力は残されていなかった。

そして、意識は実に呆気なく、友哉の手元から離れた。

.....

.....

.....

.....

ズキーン！！　ズキーン！！

「お、おろツ！？」

突然の轟音に、眠りの深海にいた意識が一気に覚醒した。

あれだけ苛んでいた眠気は綺麗サツパリ消えうせている。

周りを見回せば、クラスの全員が着席し、壇上には担任の高天原ゆとりが立っている。どうやらホームルーム中だったらしい。と言う事は、眠っていた時間はせいぜい15分くらいだろうか。

だが、どうした事か、先生もクラスメイト達も、一言もしゃべらずに硬直している。

そう言えば、覚醒直前に聞いた音、あれは銃声だったような気がする。

と、前の席の理子が、両手を上に掲げた「ホールドアップ」状態を保ったまま、ずるずると自分の椅子に腰を下ろした。

と、

「恋愛なんて、くっだらなない!!」

突然、甲高い叫びが聞こえ振り返ると、教室の真ん中にピンク色の長い髪をツインテールに縛った少女が、両手に2丁のコルト・ガバメントを握って立っていた。

かなり小柄な少女だ。目の前で震えている理子も小柄だが、少女はその理子と比較しても小さい。黒板には「神崎・H・アリア」と書かれている。これが名前なのだろう。と、言う事は転校生なのだろう。

どうやら発砲したのは彼女らしい。常時帯銃帯剣を義務付けられている武偵校の生徒にとって、校内での発砲は「できれば禁止」されているだけで、別に発砲したからと言って処罰の対象となる訳ではない。

一方、

友哉は少女と対峙している男子生徒に目を向けた。

何処か影のある少年。背は友哉よりも高く、目つきもやや鋭い感じがする。

こちらは、先程、理子との会話に出て来た遠山キンジだ。去年まで同じ強襲科にいて、友哉は結構気が合う仲だった。昨年2学期のテストをボイコットしたため、現在でこそ探偵科のEランクであるキンジだが、強襲科を受験した際には実技で教官を倒した事で、半ば伝説化していた。

で、

一体何がどうなって、少女とキンジが対峙し、朝っぱらから発砲事件にまで発展したのか、今の今まで居眠りしていた友哉には事態が全く掴めなかった。

「全員憶えておきなさい。そんな馬鹿な事言う奴は……………」

そしてアリアは、顔を真っ赤に染めて宣言した。

「風穴開けるわよ!!」

2

一通りのカリキュラムを終えると学生達はそれぞれ帰宅の途につ

く。

武偵校には自宅が都内にあり、そこから通っている者もいるが、遠方から通っている者も多くいる為、そう言った者達が寝起きする為にいくつかの寮が設けられている。

友哉が暮らす第3男子寮も、そうした寮の一つだ。

「はあ、そんな事があつた訳」

「まったく、初日からヒデエ目にあつたよ」

友哉の隣を並んで歩きながら、キンジはガリガリと頭を掻く。

寮の部屋の隣同志である友哉とキンジは、こうして登下校が一緒になる事がある。

「その、セグウェイとUZIを使った犯行の手口は、確か『武偵殺し』だっけ？」

「模倣犯だろうな。おかげであんな事に……」

キンジは苦々しそうに呟いた。

今朝、キンジが始業式に出席しなかったのは、ある事件に巻き込まれていた為だった。

キンジが登校しようとして自転車を走らせていたところ、イスラエル製サブマシンガンUZIを搭載したセグウェイに襲われた。しかもサドルの下には爆弾が仕掛けてあり、速度を落とすと爆発すると言

う。

絶体絶命かと思われたキンジ。そのキンジを救ったのがアリアであつたらしい。

その後で何があつたのかはキンジは頑として話してくれないが、どうやら彼の活躍により残る敵も倒す事ができたらしい。

それで今朝の騒ぎである。

話を省略されすぎたため、何がどうなつてあんなつたのか、イマイチ理解が追いつかないが、傍から見ればアリアがキンジの事を気に入つたという風を取れなくもない。

「武偵殺し、か。確かあれつて、捕まつたんだよね」

「ああ。全く、誰があんな事を」

今回のように、乗り物に爆弾を仕掛けてラジコン無線操縦のマシガンで追いまわし、最終的には海に突き落とす連続殺人犯。それが一時期、武偵の間で恐怖の代名詞ともなつた「武偵殺し」である。しかし、その武偵殺しも今は逮捕、収監されている。つまり、今朝のキンジの事件は誰かがその手口を真似した模倣犯と言つて訳である。

だが模倣犯とはいえ、キンジはこうして無傷で生き残っているあたり、流石と言つべきだった。

「ねえ、キンジ。強襲科に戻る気は本当に無いの？」

「無いって言つてるだろ。何度も言わせるな。それに俺は、来年には一般校に転校するんだから」

そう言つて、キンジは不機嫌そうに視線を逸らした。

勿体ない。と、友哉は素直に思う。

キンジは本当に強い。入試時の実技試験で教官を倒したと言う事が伝説化しているのは先述したとおりである。その試験と言うのは14階建ての廃ビルに教官5人と多数の受験生を配し、互いを無力化し合うという内容だが。キンジはその教官も含めて全員を倒してしまっている。

まだ中学生の少年が、武偵校の教官、すなわちプロの武偵を倒すなど考えにくい事である。

因みに友哉は、別時間帯の試験に参加し、教官こそ倒さなかったが、他の全員を無力化して合格している。

向き不向きで考えるなら、キンジは間違いなく武偵向きの性格である。その彼が去った今でも、強襲科にはキンジを慕う者が大勢いる。

とは言え、キンジはそう言った空気も苦手らしく、それが彼を孤立させる原因にもなっている。

そんなキンジが武偵校をやめて、一般校に転校する。その理由に関して、彼は一切話してはくれなかった。

キンジと別れ、寮の自室に戻ると、友哉は鞆を机の上に置いて制服のジャケットを脱いだ。

キンジではないが、今日一日で、随分と色々な事があったと思う。
それにしても気になるのは、

「由比彰彦………仕立屋、か」

今朝の現場に現われた、仮面を付けた男。

表情の無い仮面の顔を思い出すだけで、不気味な感じがしてしま
う。

友哉は竹刀袋に収めている愛刀を取りだすと、鯉口を切って抜き
放った。

逆刃刀。

峰と刃が通常とは逆になり、普通に振るっても相手を殺す事無く
戦う事ができる。代々、緋村の家に伝わってきた刀である。

友哉は刀を正眼に構えると、目を閉じる。

あの時、対峙した由比に戦いを挑んでいたら、勝つ事はできただ
ろうか？

確証はできない。

あまりにも無防備な動作。まるで殺気と言う物を捨て去ったかの
ようにふるまっていた彰彦。しかし、そこにこそ、友哉は恐怖心を
覚えずにはいられなかった。

一流の狩人ほど、自らの発する殺気を消す事に長けている。彰彦は恐らくそうしたタイプの人間だ。

強敵。

一度対峙しただけで、まだ剣すら交えていないと言つのに、友哉はそう感じずにはいられなかった。

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「おろ？」

友哉は刀を鞘に収めると、ソファアの上に置いて玄関の方に向かった。

扉を開くと、そこには幼馴染の短髪少女が立っていた。

「こんにちは、友哉君」

四乃森瑠香は、元気に手を上げて挨拶してくる。

一つ年下の瑠香は昔からの癖で、先輩後輩の間柄になった今でも友哉の事を君付けで呼ぶが、友哉の方もそれを別に咎める気はない。

今年から友哉と同じ東京武偵校に通い始めた瑠香だが、中学3年の時から友哉と戦徒契約を結んでいた。戦徒である戦姉妹、もしくは戦兄妹とは、武偵校の先輩後輩で結ぶ契約の事で、上級生が下級生をマンツーマンで指導する契約であると同時に、何らかの事件の際には共に出勤して事件解決に当たる事もある。

元は將軍家に仕えた隠密お庭番衆の末裔である瑠香は、特に諜報活動に長けており、武偵校でも諜報科に所属している。その高い諜報能力を活かし、今朝のように戦場では友哉の目や耳になってくれる事が多い。

「ご飯作りに来たよ。一緒に食べよ」

「いや、あのね、瑠香」

そう言っただけでビニール袋を掲げる瑠香。中身はどつやら食材のようだ。

ここは男子寮なんだから、ホイホイと来ちゃダメだよ。と、言おうとしたのだが、瑠香はそんな友哉を置いて、さつさと上がり込んでしまった。

「友哉君、あたしが来なかつたら、どうせコンビニ弁当とか、そんなのばかり食べるんですよ。ダメだよ、それじゃあ」
「い、いや、そんな事はないよ」

と、言いつつ視線を逸らす。

一応、友哉も料理くらいできる。しかし、作るもの全て、栄養が偏ってしまう傾向にある為、瑠香の言っている事はあながち間違っているのではないのだ。

いそいそとエプロンを着け、食事の準備を始める瑠香。第三男子寮は基本的に4人部屋であるが、この部屋の住人は友哉1人である為、他にキッチンを使う者もない。ちなみに隣のキングジの部屋も彼1人が使っている。ならばいつそ一緒に部屋にすればいいとも言

われたが、キンジも友哉も1人部屋が良いと申請した為、どうせ部屋が余っているなら、と言う事で学校側から受理された。

「今日は少し和風にしてみようと思うの。友哉君、大丈夫だよね」
「うん、お願い」

偏食する傾向がある友哉だが、基本的に好き嫌いはない。加えて実家が京都にある旅館である為、溜香の料理の腕は良い。彼女が作ってくれた料理を不味いと感じた事はなかった。

座って待ってて。と言って料理の支度に入る溜香。

言われるままにソファに腰掛けようとした。

その時、

何やら隣の部屋から、壁越しにギャーギャーと騒ぐ音が聞こえて来た。

「おろ？」
「何？」

互いに顔を見合わせる友哉と溜香。

壁越しに音が聞こえるくらい、どつと言つ事も無いが、何しろ隣はキンジの部屋だ。彼が1人で騒いでいるとは考えにくい。

2人は恐る恐る廊下に出ると、そつと隣の部屋を覗いてみた。

次の瞬間、

「キンジ、あなた、あたしの奴隷になりなさい!!」

今日転校してきたピンク髪ツインテールの少女が、友人に対してとんでもない事を言い放っていた。

「はい？」

「おろ？」

2人そろって目が点になる。

角度的に見えないが、多分キンジも同じ状態なのではなからうか。

ただ1人、神崎・H・アリアだけが、夕日に染まる部屋の中で勝ち誇ったように仁王立ちしていた。

「き、キンジ、何してんの？」

「お、おう、緋村、それに四乃森も」

ぎこちなく振り返るキンジ。

状況がまるで飲み込めない中、遠くでカラスの無く音が空しく聞こえていた。

「何があったの？ ッて言うか、あの子、可愛い」

アリアを見て目をキラキラさせる瑠香。彼女の眼には、アリアが年下の女の子に見えているのだろう。

「ねえねえ、あなた、お名前は？ どこから来たの？ 歳はいくつ

「？」

「え、な、何よ、アンタ？」

矢継ぎ早に尋ねる瑠香に、アリアは少し顔を赤くして引き気味になっっている。

『い、命知らずな………』

友哉とキンジはほぼ同時にそう思った。今朝の教室での発砲騒ぎを体験しているから尚更である。

「それでね、それでね、むぐう!？」

「よし、瑠香、君はちよっと黙ろう」

瑠香の口を押さえて友哉は下がらせる。

「そ、それで、一体、何がどうなって奴隷な訳？」

とにかく、現状をこれ以上混乱させないためにも、速やかな収集が必要だった。

話を総合するに、アリアはキンジに強襲科に戻って、一緒に武偵活動をする事が望みらしい。

ソファに座って漫画を読みながら、友哉はキンジの部屋でのやり取りを思い出していた。

その後、アリアとキンジが買い物に出かけたので、友哉達も部屋に戻った。

瑠香はキッチンで夕食の支度を再開している。

それにしてもアリア。目の付けどころが良いのか悪いのか。

物件としてのキンジは、確かに優良と言える。それは去年、何度か一緒に仕事をした事がある友哉には判っている。

圧倒的な戦闘力と状況判断力、それらに裏打ちされたカリスマ性と言ふべき存在感は、高校生離れした物を感じずにはいられなかった。

だが、

言いたくはない事だが、今のキンジは去年ほどには武偵に関する情熱を失っているように思われる。

何があったかはキンジは言わないし、友哉の方も聞くとは思っていない。だが、そこにこそ、キンジが一般校への転校を決めている原因がある事は間違いなかった。

そうしている内に、キッチンの方から良い匂いが漂って来た。

出汁が効いているこの匂いは、煮物が何かを作っているようだった。

「あ、そう言えば、すっかり忘れてたんだけどさ」

「おろ？」

瑠香が手を止めて、友哉の方に向き直った。

その顔が、どこか困惑めいた色に染まっているのが判る。と言うより、少しおびえている様な気がした。

「ど、どうしたの？」

「アリア先輩と、遠山先輩の事、もし『あの人』が知ったら、やばいんじゃないかな」

「ッ！？」

その一言で、友哉も思い出した。

ある人物の事を。

その人はキンジの古くからの友人、所謂幼馴染と言う奴で、東京武偵校の生徒会長も務めている。偏差値低めの武偵校にあって、偏差値75オーバーの才女であり、茶道部、手芸部、バレエ部を掛け持ちし、その全ての部長も務めている。そして、傍から見ると判るほど一途にキンジに好意を寄せている。

好意を寄せている。と言えは聞こえは良いかもしれない。だが、彼女のそれは、そんな生易しい物ではない。ハッキリ、自分の全てを捧げていると言っても良いだろう。もし万が一、キンジが彼女に「俺の為に死んでくれ」と言えば、その場で頸動脈に刃を押しあてかねない。そんな存在だ。

思い込みもまた激しい。いつだったか、友哉、キンジ、瑠香の3人でキンジの部屋で食事をしようとした事があったのだが、その際、

友哉が所用で席を外した。つまり、瑠香とキンジが2人つきりになった時に、「彼女」が来てしまった。

その時の光景は、ハッキリ言っただけ思い出したくない。

用事を済ませて戻った友哉が見たのは、破壊し尽くされた部屋の隅っこの膝を抱えておびえている瑠香と、何とか必死に説得を試みているキンジ。そして、般若が一匹だった。

その時の事は瑠香にとってもトラウマになっているらしく、思い出すと今でもガタガタと震えている。

その時だった。

ピンポーン

インターホンが憤ましく鳴る。

このタイミングでこの音。

まさかっ

顔を蒼白にしながら、友哉と瑠香は顔を見合わせた。

そっと、ドアを開ける。

そこには、予想通りの人物が立っていた。

「あ、緋村君、こんばんは」

清楚な黒髪、精巧な日本人形を思わせる端正な顔立ち。その細い体は今、白い上衣と緋袴と言う巫女装束に包まれていた。

彼女が、先程の話題に上っていた渦中の人物。東京武偵校生徒会長にして、超能力捜査研究科の切り札。そしてキンジの幼馴染、星伽白雪である。

「ほ、星伽さん、どうしたの？」

「あ、キンちゃ、遠山君に筍ご飯作ったんだけど、少し作りすぎちゃって、あんまり量は無いんだけど、緋村君にもおすそ分けしようと思って」

そう言うと、手ごろサイズの弁当箱を差し出して来る。もう片方の手には風呂敷包みに包まれた、恐らくはそちらはキンジにだろう。

「あ、そ、そう。ありがとう……」

そう言いつつ、弁当箱を受け取る友哉。その後ろでは引きつった表情の瑠香がお玉片手に立ち尽くしている。

「その、これからキンジの所に？」

「うん。私、明日から恐山で強化合宿だから。今日の内にキンちゃんのお世話、しておこうと思って」

キンちゃん、と言うのは白雪がキンジを呼ぶ時の綽名、と言うよりは癖みたいなもので、キンジからは何度かやめると言われていたが、白雪としては改めるつもりはないらしい。

「あ、あの、星伽先輩」

「え、何？」

勇気を出して声をかけた瑠香だが、悪意の無い白雪の顔に、言葉が詰まる。

そう、白雪に悪意はないのだ。ただ、キンジに対する思いが少々過剰であるだけで。それは、彼女が生徒会長として多くの武偵校生徒から信頼されている事からもうかがえる。

ただそれだけに、キンジ絡みの事になった時の白雪の暴走を止める事は難しかった。

「い、いえ、何でも、無いです」

「そう。じゃあ、私、行くね」

「あ、ああ、気を付けて、ね」

閉じる扉の向こうに消える白雪を見送りながら、友哉と瑠香はこう思った。

何事も起こりませんように。せめて、こっちに飛び火しませんように、と。

対岸に学園島を臨みながら、由比彰彦は無表情の仮面を闇世の中に浮かび上がらせる。

あの場所は武偵を育成する場所であると同時に、凶悪犯に対する人類最後の希望であると言っても過言ではない。

実際、組織や慣例と言った柵に捕らわれることの多い公的機関に比べて、民間依頼と言う形で行動できる武偵の方が、機動力と言う点で遙かに勝っている。

そんな学園島を眺める彰彦。

その傍らには、小柄な少女が刀を片手に佇んでいた。

「クライアントから連絡がありました。計画を次の段階に移す、と」

彰彦の言葉に、少女は言葉を返さず、ただじっと、手にした刀を抱きかかえている。

その様子に、彰彦は肩をすくめた。

今回の仕事に必要なと思って連れて来たが、どうにもよくわからない娘である。

とは言え、彼女の實力の高さは彰彦自身、何度か訓練で手合わせした為知っている。今回は依頼主の支援をするうえで有益である事は間違いないだろう。

彰彦は、更にもう一方に目を向けた。

こちらに立っているのは長身の男だ。短めの髪をボサボサにし、その下にある瞳は、まるでトラを彷彿とさせるようなギラギラとした輝きを見せている。痩せ形の体型をしているが、それが逆に引き締まった印象を与える少年だ。

「あなたも、宜しく願いますよ」

「おうよ。大船に乗ったつもりでいろよ」

そう言って少年は不敵に笑う。その荒々しさが、獰猛さを持って存在している。

「さて、こちらの布陣は整いました。頑張ってくださいよ。遠山キンジ君。そして、緋村友哉君」

そう言つと、仮面の奥で不気味な笑みを浮かべた。

第2話「何やら騒がしくなっちゃった日常」

終わり

第3話「お合場にて」

1

基本的に友哉の朝は早い。子供の頃から実家の道場で朝稽古をしていたせいか、毎朝5時には目を覚ましてしまう。

おかげで今のところ、任務以外で遅刻した事は皆無である。何もなければ8時前にはもう学校に来ている。

逆刃刀を収めた竹刀袋を手に教室へと向かっていると、意外な事に自分よりも早く来ていた人物を見付けた。

緑掛かったシヨートヘアの頭に大きなヘッドホンを付けた少女。体付きは細く、背もアリアとそう変わらない程度だ。その肩には旧ソビエト製セミオート狙撃銃ドラグノフがかけられている。

「おろ、おはようレキ」

片手を上げて挨拶する友哉に、レキはコクリと頷きを返した。

「珍しいね、今日は早いんだ」

「私はいつも、これくらいに来ます」

無表情に淡々と答えるレキに、「そうなんだ」と返す。

レキとは、これまで何度か一緒に任務に就いた事がある。この儂げな雰囲気のある少女は、その外見とは裏腹に校内随一の実力を持つスナイパーである。

通常、狙撃とはプロであってもせいぜい必中距離は1キロ前後とされている。更に腕の立つ人間でも、せいぜい1・2キロが関の山更に1・5キロ級ともなればもはや怪物と呼んでも差支えない。

その狙撃を、このレキは2キロ以上可能であると言う。まさに神域にいる狙撃兵だ。それ故に「狙撃科の麒麟児」などと呼ばれている。

「前から気になっているんだけど、」

レキと並んで歩きながら、友哉は思い出したように尋ねる。

「いつもどんな音楽聴いてるの？」

レキはいつもヘッドホンを手放さず、何かを聞いている事が多い。耳に音楽を入れる事で、逆に外界の音をシャットアウトし狙撃に必要な集中力を養っているのだろう。と、友哉は解釈している。

だが、

「これは音楽じゃありません」

「じゃあ、何？」

「風です」

レキの返答に、友哉は怪訝な表情で彼女を見る。

対してレキは振り返らずに口を開く。

「気を付けてください友哉さん。良くない風が吹き始めています」「良くない風？」

一体どういう事なのか。抽象的過ぎてイマイチ要領を得ない。

だが、レキはそれ以上何も語らず、友哉を置いて歩き去ってしまった。

少女はポケットから携帯電話を取り出すと、ボタンをプッシュする。

セミロングの黒髪をショートポニーに結った小柄な少女だ。だが、その少女の手には、彼女の体には不釣り合いな、一振りの日本刀が握られている。

電話を耳に当てると、すぐに相手が出た。

《どうしました?》

「こちらの準備は完了。いつでも行ける」

淡々とした口調で、用件だけを伝える。それだけで相手も了解したのだろう。多くの事は聞いて来ない。

《上出来です。クライアントの方からも準備完了のメールが届きました。彼女の行動開始に従い、私達も動きまますよ》

そこで相手は、ふと思い出したように話を切り替えた。

《そう言えば、彼はどうしました？》

彼、という単語が差す2人の共通の人物は1人しかない。

「出てった。退屈だ、とか言って」

《おや》

多少は予想していたらしく、大して驚いた様子もなく返事が返ってきた。

《ま、良いでしょう。大事の前です。彼にはやりすぎるな、とだけ伝えておいてください》

「ん」

それだけ言うと、電話は切れる。

少女はポケットに携帯電話を戻して歩きだす。

そのまま、人込みの中に紛れるようにして、その小さな体はすぐに見えなくなってしまうた。

妙な事もある物である。

午後の訓練を終えた友哉は、体育館脇に腰をおろして手にしたスポーツドリンクを煽る。

友哉は深く息を吐きながら、先程見た出来事を思い出していた。

何と、キンジが強襲科に戻ってきたのだ。

あれだけ頑なに強襲科復帰を拒んでいたキンジが戻ってきた事は、喜び以上に戸惑いの方が大きい。

どういふ心境の変化なのかじっくりと問いただきたい所だったが、久しぶりに戻ってきたキンジに、彼の潜在的なシンパが群がりもみくちゃにしてしまった為、完全にそれどころではなかった。

その後キンジは、必要な事務手続きを終えて帰ってしまった為、話を聞く事ができなかったのだが、帰り際にピンクのツインテールをした少女と並んで歩いているのが見えた。

そのような特異な髪形をしている人間は、少なくとも東京武偵校

には1人しかいない。そこで、大筋の流れは読めた。

「神崎さんもやるなあ。どんな手を使ったんだろう」

つまり、単純に考えてアリアがキンジの説得に成功したと考えるのが妥当だろう。あれだけ強襲科へ戻る事を頑なに拒んでいたキンジの説得に成功したのだから大した物である。

友哉はスポーツドリンクの入った容器を傍らに置くと、肩の筋肉を回しながらほぐす。

武偵校では午前中は共通の一般教養を学び、午後は自由の時間、つまり、それぞれに依頼を受けて行動したり、戦闘訓練等の専門科目をこなす時間となる。

友哉の武器は傍らに鞘に収めた状態で立て懸けてある逆刃刀一本のみである。

飛び道具全盛の時代に武器が日本刀一本と言うのは、あまりにも無防備すぎる。とは周りから良く言われている事である。事実、武偵校に入学してからも教員から何度も銃火器装備を勧められていた。

だが、今まで剣術一筋で戦って来た友哉は、今更銃を持つ気にはなれない。加えて言えば、身のこなしに自身のある友哉にとって、拳銃は恐るべき武器とは言えない。

先日の大井での戦闘を見た通り、友哉は飛んで来る銃弾の軌道を読む事ができる。

読みの鋭さ、速さは友哉の使う剣術の骨子の一つであり、先の剣

を実現する上で重要な要素と言える。

その先読みの早さがある限り、例えマシンガンやアサルトライフルが相手であったとしても切り抜けられる自信が友哉にはあった。

と、その時、体育館の影から走って来る人物に気付いた。

「あ、いたいた、友哉君!!」

四乃森瑠香は、走りながら友哉に手を振って来た。

「ここにいたんだ。探したよ」

「どうしたの？」

荒い息をしながら汗を拭う瑠香に友哉が尋ねると、少し怒ったような視線を返される。

「もっつ、』どうしたの?』じゃないでしょ。昨夜あたしが言った事忘れたの?」

「おろ?」

「今日はお買い物に付き合ってくれてるって約束したじゃない!!」

言われて思い出す。

確かに昨夜、夕食を食べている時にそんな約束をした気がする。

「ごめんごめん、すっかり忘れていたよ」

「まったく……」

「すぐ着替えて来るから、待ってて」

そう告げると、友哉は刀を取り、急いで更衣室へと向かった。

学園島はお台場からほど近い場所に浮いている。バスに乗れば20分と掛からず街に出られる為、武偵校の生徒は特に娯楽に関しては困っていない。

お台場まで出れば、遊ぶ場所も買い物をする場所も、そして食事をすることも事欠かない。

買い物に来た友哉と溜香もまた、一通りの買い物を終えると通りに面したカフェに入り一息ついた。

「はあ、これで終わりだね」

椅子の背を預け、友哉はぐったりした調子で尋ねた。

学園島を出てから3時間近く、友哉は溜香の買い物に付き合ってしまった。

「うーん、できればもう少し回りたかったんだけど、もう時間も時間だしなあ」

時計を確認しながらそう告げる溜香に、友哉は溜息を返す。

これだけの時間を回ったと言うのに、成果はと言えば殆ど無かった。

服一つ買うにしても、何十分もかけて何着もの服をとつかえひつかえした上げく、結局何も買わずに店を出ると言う事が多々あった。

「まあ、また今度来る事にするよ」

不吉な未来予想図をしながら、瑠香は出されたキャラメルフラペチーノに口を付ける。

そんな瑠香を横目に見ながら、友哉も運ばれてきたコーヒーに口を付ける。

もうすぐ夕食なので、2人とも飲み物以外は頼んでいない。今日も、寮に帰ったら瑠香が何か作ってくれるだろう。

不思議な娘だ、と友哉は思う。

緋村の家と四乃森の家は親戚同士であり古くから交流がある。友哉も幼い頃から瑠香と共に過ごし、彼女を妹のように可愛がってきた

友哉の実家は東京にある。それ故に武偵を志した段階から、両親からは東京武偵校付属中学への入学を勧められ、自分もそれが妥当だと思った。だが、その一年後、瑠香が同じ中学校に入学して来たのには驚いた。

彼女の実家は京都。関西方面にも武偵校はある為、そちらの学校に入るとばかり思っていたのだが、わざわざ寮に入ってから東京の学校に入って来た理由が、友哉にはイマイチ良く判らなかつた。

とは言え、瑠香の存在には大いに助かっている。料理は上手だし、

何より昔馴染みで気兼ねなく付き合える異性と言っただけで貴重だった。

友哉はチラッと腕時計を確認する。

そろそろ帰るバスの時間だ。そう瑠香に告げようとした時だった。

「だから、ちょっと付き合ってくれただけで良いって言ってんだろ
うが!!」

突然、店内から大きな声上がり、友哉と瑠香は恐る恐ると言った感じにそちらへと振り返った。

見れば大柄な男が3人、2人の女の子を取り囲むようにして立っている。

一般高校の制服を着た女の子たちは、男達の迫力に吞まれて震えている事しかできない。その周囲にいる客達も、巻き込まれまいとして視線を合わせない様子だ。

「なに？」

「さあ」

首をかしげる2人の前で、尚も男達が激こつするのが見える。

「おい、テメエ、聞いてんのかよ!!」

「こつち向け。シカト扱いてんじゃねえよ!!」

口々にののしるような事を言う男達に、瑠香は露骨に嫌な顔を浮かべた。

「うわあ、連中、あれでナンパのつもりなのかな。ダサイにもほどがあるよ」

「こらこら」

苦笑しつつたしなめる友哉。とは言え、彼も同意見なので、強くは言わない。

だが、その一言を男達の内の1人が聞き咎めて振り返った。

「んだと、こらっ、今言った奴出て来やがれ!!」

怒りの矛先が変えられ、他の客達は巻き込まれまいとして黙りこむ。

友哉はフツと一度目をつぶると、腰を浮かしに掛る。あの程度の相手なら刀を使わなくてもノしてしまう事は難しくない。

そう思った時、騒ぎが大きくなると判断したのだろう。店のウエイトレスが立ちはだかろうとした。

「あの、お客様。他のお客様の御迷惑にもなりますので、騒ぎの方はご遠慮ください」

勇敢な行動と言える。今日日、騒ぐ相手にこうまで敢然と立ち向かえる一般人などそうはいないだろう。

だが、同時に無謀でもある。彼女の行動は言うならば野犬に聖書を言い聞かせるような物だった。

「うつせい、邪魔すんな!!」
「キヤアツ!？」

殴られよるけるウェイトレスの少女。

あまりの事態に、流石に客達がざわめいた。

友哉と瑠香も、腰を浮かせる。

だが、それよりも早く、倒れるウェイトレスを支える影が合った。

「おいおい、こんなトコで暴れる前に周りをよく見ろって。あんたら、自分が随分格好悪いって気付いてないのかい？」

低い張りのある声が発せられる。

支えられたウェイトレスが見上げるくらいの背丈のある少年が立っている。ボサボサの髪に、ギラギラした雰囲気を持った少年だ。まるで肉食系の猛獣を思わせる。

「んだと、この木偶の坊が!!」
「粹がつてんじゃねえぞコラッ」

口々にのしる男達を余所に、少年はウェイトレスを気遣うとつとつしげに向き直った。

「やれやれ、騒ぐ事くらいしかできねえのかよ、あんた等は」
「んだと!？」

尚も激昂しようとする男達を冷ややかに見据え、少年は顎をしゃ

くった。

「ここじゃ何だ。表に出な。そこで相手してやるよ」

どうやら少年は、一人で3人叩きのめすつもりでいるらしい。見たところ武偵ではないようだが。

だが、少年が店の外に出ようと踵を返した瞬間、

男の内の1人が、ニヤリと笑みを浮かべたのが見えた。

その光景を、友哉は見逃さない。

腰だめに拳を構えている。その手に一瞬、銀色の光が奔った。間違いない刃物の類である。

次の瞬間、

友哉は袋に入ったままの刀を鋭く下から上に振るった。

「なっ!?!」

手元を駆け抜けた衝撃に、男は思わず動きを止める。

一拍置いて、天井付近までは跳ね上げられたナイフが回転しながら床に転がる。

動きを止めた男を、友哉は刀を下ろしながら鋭く睨みつけた。

「それはいただけないな。それ以上やるって言うなら、僕達も黙っ

ている訳にはいかないよ」

「テメエ、このやる……ゲッ」

友哉の、そして瑠香の着ている制服を見て相手が誰なのか判ったのだろう。男は言い掛けた言葉を引つ込めて震えだす。

武偵の戦闘能力は、世間一般にも知られている。今だ学生の身分であるとは言え、強襲科の武偵1人で街のごろつきぐらいなら最低でも10人くらいなら普通に相手取れるほどだ。

「で、どうするの?」

「クソツ、おい、行くぞ」

武偵相手に喧嘩をする事の不利を感じたらしく、男達はさすがにと店から出ていった。

それを見て、少年は友哉達に向き直る。

「やるねえ、あんた。流石武偵だよ」

「余計な手出しだったかな?」

そう言っつて互いに苦笑する。

友哉の見立てでは、目の前の少年ならあの程度の相手は物の数ではなかっただろう。多分、3人同時に相手にしても負ける事は無かったのではないだろうか。そう言う雰囲気を持つ少年だった。

「ま、売られたケンカは買うクチだが、余計な手間が省けるなら、それに越した事はねえさ」

そう言つと、先程殴られたウエイトレスに向き直つた。

「大丈夫かい？」

「あ、はい。ありがとうございます」

そう言つて頭を下げるウエイトレスに笑い掛けると、少年は無遠慮に友哉達の座っているテーブルに相席してきた。

「全く、ああ言つ奴等が最近増えて来て困るな。なあ、あんたら武偵なんだろ。ああ言つ奴等、取り締まらねえのか？」

「武偵は警察じゃないからね」

そう言つて友哉は苦笑する。

そもそも武偵が活動するにあたっては、普通の探偵と同じく依頼を受ける必要がある。つまり、依頼が無い介入は武偵の意に反すると言つ事である。勿論、今回のように目の前で起こっている事を座視するのは単なる阿呆の所業であるが。

警察よりもフットワークが軽い半面、このようにスティックな錠に縛られているのもまた武偵である。

「武偵つてのも厄介な存在なんだな。もつと気楽にできねえもんかね」

「そんな事言つたつて仕方ないじゃん。それが決まりなんだし」

瑠香が少し口を尖らせて言う。何やら、断りも無く座つて来た少年が面白くない様子だった。「折角2人つきりだったのに、デートだったのに」などとぶつぶつ言っているようだが、友哉達には聞かえていない。

だが、そんな事には構わず、少年は口を開く。

「おっと、そう言や、自己紹介がまだだったな。俺は相良陣。また顔合わせる機会があったらよろしくな」

「僕は緋村友哉。こっちは四乃森瑠香」

「…….…….よろしく」

瑠香は相変わらずそっぽを向いたまま挨拶する。

「緋村に、四乃森ね。よっしゃ憶えたぜ。何か困った事があったら、この界限で相良って言えば誰でも判るから。いつでも尋ねて来てくれや」

そう言つと陣は席を立って店を出ていった。

「何だか面白い人だね」

「そうかな、ただ単にむさくるしいだけのような気もするけど」

ブウ垂れたまま答える瑠香に、友哉は苦笑しながら頬をツンツンと指でつつく。

「やめてよ」

そう言いながらも手を払おうとしない瑠香を、友哉はニコニコしながら頬をつつく手を止めない。

その時、先程のウェイトレスが歩いて来た。

「あ…….…….」

「ああ、そろそろ、僕達もお暇するから会計の方をお願いします」
「その、会計の事なんですけど、先程の方と含めて7400円になります」

「おろ?」「はい?」

2人の目が点になる。

「ちょ、ちょっと待って。何であいつの分まであたし達が払わなきゃいけないの!？」

「はい、あのう、お知り合い、なのでは?」

「完全無欠で初対面よ!！」

とは言え、払わないと店の方でも困る訳で、

友哉はそつと溜息をつく。

どうやら、帰りは徒歩になりそうだった。

陣は裏路地を歩きながら、笑みを浮かべていた。

なかなかどうして、武偵にも面白い奴等がいるようだ。しかも、年齢的には陣とそう大差ないように見えた。

実際に戦ってみたらどちらが強いだろうか。そう考えると、陣の心は躍った。

勿論、陣に負けるつもりはない。だが、とても楽しい喧嘩になりそうだった。

と、その時、上着の内ポケットに入れていた携帯電話が振動する感触があった。

「……………おう、俺だ」

《私です。今、どちらに？》

相手は、今回の仕事の雇い主だった。何でも何処かの組織の構成員で、他の人間の計画を援助するのが役割であると言う。

胡散臭い男だが、楽しい戦いができそうだと思ったので乗って見る事にした。

《明日です》

その一言が、全てを物語っていた。ついに、動く時が来たのだ。

「やっとか。随分待たせてくれたな」

携帯電話を片手にしゃべる陣を、背後から見据える3対の目があった。

「おい、本当にやるのかよ？」

「つたりめーだろ。このまま舐められたままで良いのかよ」

「大丈夫だつて。相手は1人だ。3人で背後から掛かればちよるいつて。それに、これだつてるだろうがよ」

そう言つてちらつかせたのは、先程友哉に弾かれたのとは別のナイフだ。刃渡りは10センチ長。刺されば確実に内臓を傷付け、相手を死に至らしめる武器である。武偵のように防弾服を常時着用しているならともかく、相手はただの一般人。これで先程の憂さを晴らすのだ。

「行くぞっ」

声をかけると同時に、3人は物陰から飛び出し、陣の背後から襲いかかった。

《どうしました?》

陣の声が途切れた事に不審に思ったのか、相手が気遣うように尋ねた。

ややあつて、陣も答える。

「……………いや、何でもねえよ。それより、俺は予定通りの行動で良いんだな?」

《はい。実際に戦うのは「彼女」ですから。私達が依頼されているのは「余計な連中の排除」だけです》

「判つた。じゃあな」

そう言つと、陣は携帯電話切つて路地裏を後にする。

後には、襪襪切れのように成り下がった男達が、冷たい地面に転がっているだけだった。

3

翌朝、友哉は瑠香と並んで歩きながら、昨日の事を思い出していた。

結局、あの後、3人分の食事代を払った友哉と瑠香の財布には、殆ど金は残らなかった。

それでもどうにか、瑠香だけはバスで帰らせる事ができた。瑠香は一緒に歩いて帰ると言ったが、武偵とは言え女の子をお台場から学園島まで歩かせる訳にはいかなかった。

そして友哉はと言つと、実に男らしく歩いて学園島まで戻った。

断わっておくが、友哉は運動神経には優れている方だが、決して体格的には恵まれている訳ではなく、ハッキリ言つて線の細い体型

だ。お台場から歩いて帰って来るのは骨であった。

「そう言えば、友哉君。今日の午後暇？ 久しぶりに稽古付けてほしいんだけど」

「ああ、そうだね」

戦徒として契約した学生は下級生に対し、上級生が指導すると言う義務がある。戦兄である友哉は、当然、戦妹の留香を指導しなければならぬ。諜報科の留香だが、戦闘力の強化維持も行いたいと言う理由で、中学の頃からよく友哉に稽古を付けて貰っていたのだ。

そうしている内に、2人は捜査に使う乗り物が格納されている車輛科倉庫の前を通りかかった。

その時、友哉の携帯電話が鳴った。

「もしもし？」

《あ、友哉、アンタ今どこ！？》

「おろ、アリア？」

意外な相手だった。確かに、アリアとは先日携帯番号を交換したが、まさか掛けてくるとは思っていなかった。

「今は・・・車輛科の倉庫前だけど」

《なら、ちょうどよかった。そこで何か乗り物見繕って、今すぐ強襲科まで来てくれる。アンタの特性なら、そうね・・・バイクとかが良いわ》

「ど、どどういう事？」

いきなりまくしたてられて、友哉も困惑したまま聞き返す。

そんな友哉に、アリアは一方的に告げた。

《手伝って。事件よ》

第3話「お台場にて」

終わり

第4話「立ちはだかる者」

1

車輛科でいつも借りているバイクを持ちだし、後部に瑠香を乗せて、指定された強襲科の屋上に行くと、そこには既に2人の人間がいた。

しかも、どちらにも見覚えがある。

「キンジ・・・レキ・・・」

膝を抱えて体育座りをしているレキは、入って来た友哉と瑠香にチラツと視線を向けるだけで、そのまま視線を前方に戻してしまふ。相変わらず、感情の読めない少女である。

一方、キンジの方は入って来た友哉達を見付けると、片手を上げて挨拶して来た。

「よう、お前等もアリアに引っ張り出されたクチか」

「2人も？」

「まあな」

キンジはため息交じりに肯定し、レキはこちらを見ないまま、相変わらず無表情でコクリと頷いた。

「何があつたんですか？」

「さあな。俺達もいきなりアリアに呼び出されたから、事情も何も聞いてないんだよ」

そう言つて、キンジは苛立たしげに頭をガリガリと搔く。

その呼び出したアリアは、まだ姿を見せていない。この場にいる誰にも事情を説明していないのは余程のは、余程の緊急事態なのか、それとも説明しづらい複雑な事情があるのか。

そんな事を考えていると、友哉達の背後で扉が開く音がして、ピンの長い髪をツインテールに縛ったアリアが入ってきた。

「みんな揃つてるわね。これ以上は時間切れ。まあ、急造のメンバーとしては良い感じね」

キンジ、友哉、レキ、瑠香の順で見回してから言った。

「この5人で追跡するわよ。良いわね」

何の説明も無しにいきなりそう言われ、4人は顔を見合わせる。

「さ、行くわよ」

「待て待てアリア。ブリーフィングくらいしつかりとやれ!」

1人でズンズン行こうとするアリアを、キンジが慌てて引き戻す。これには友哉も全く同意見だった。少なくとも何が起きていて、現状はどうで、どのような作戦をどういう編成で行うのか。チーム戦であるなら、最低限これくらいは決めなくてはならない。

「バスジャックよ」

振り返りながらアリアが答えた。

武偵校行きのバスが何者かに爆弾を仕掛けられて乗っ取られたと言う。内部には運転手1名の他に武偵校生徒数10名が乗り合わせており、閉じ込められている状態だ。

「キンジ、これはアンタの自転車の時と同じ。犯人は《武偵殺し》よ」

「武偵殺しって、あれって、逮捕された筈じゃ……………」

瑠香が疑うような眼でアリアを見る。

武偵を狙った連続殺人犯《武偵殺し》の逮捕は有名な話である。確かに手口は似通っているが、キンジのチャリジャックも、今回のバスジャックも模倣犯の仕業と考えるのが妥当なのではないか。

だが、アリアは断言するように言った。

「それは真犯人じゃないわ」

「何だって？」

「根拠でもあるの？」

尋ねる友哉とキンジを無視するように、アリアは再び歩き出す。

「その件に関しては説明している時間は無いし、アンタ達は知る必要も無い。このパーティのリーダーはあたしよ」

指示に従え。アリアはそう言っているのだ。

「リーダーだって言うなら、きちんとみんなに説明しろッ 武偵はどんな事件にも命がけで臨むんだぞ!!」

苛立つて食ってかかるキンジにアリアは鋭く振り返って言い放った。

「武偵憲章1条、『仲間を信じ、仲間を助けよ』。その仲間が危機に瀕している。説明はそれだけで充分よッ」

その言葉に、キンジも、友哉も、瑠香もそれ以上何も言おうとはしなかった。

ただ1人、黙ってやり取りを見守っていたレキだけは、静かに準備を進めていた。

目標となるバスは学園島を一周した後、お台場へと入ったと言う。無線傍受していた事で、通報前に行動を開始したアリアチームは、それぞれ役割分担を決めて対処に当たっている。

まず、最も重要な突入班。ジャックされたバスにヘリを使って屋根から乗り込み、事態の収拾と爆弾の解除を行う危険な役割は、キンジとアリアが担当。

友哉は遊撃任務。バイクに乗って地上からバスを追撃。作業中のアリア達を外から援護する。相手が武偵殺しであるなら、キンジを襲った時のようにUZIサブマシンガンの妨害がある可能性は高い。その排除を行うのが友哉の役割だ。

レキはキンジ達を下ろした後、ヘリで待機。後方支援と狙撃による火力支援を行う。

そして瑠香は4人とは別行動する。諜報科としての行動力と機動力を活かし、アリアが傍受、逆探知した電波の発信場所へ急行、犯人を取り押さえるのだ。

4人と別れ、友哉は1人バイクを走らせる。

走行する車の間を駆け抜けながら、フルフェイスヘルメットの奥でアリアが言っていた事を思い出す。

武偵殺しはまだ捕まっていない。真犯人は別にいる。

それが真実であるならば、大変な事だ。噂では捕まっている武偵

殺しは100年以上の懲役が一審によって可決されたとか。それが冤罪だとするならばただ事ではない。下手をすれば刑をかした日本の司法業界は世界中から袋叩きに逢いかねない。

それに、謎がもう一つ。なぜ、アリアがその事を知っていたか、である。特別に武偵殺しを追っていたのか、あるいは、

『武偵殺し、本物か、偽物、どちらかと縁があるのか……』

そこまで考えると、友哉は僅かに首を振って邪魔な思考を追いだした。

考えても仕方が無い。現実にはバスジャケットは起きている。今はそちらに集中すべきだ。

更にアクセルを掛け、バイクを加速させる。

計算ではあと1分でバスに追いつく。まず友哉がUZIの排除を行い、安全確保の後、上空のヘリで待機中のキンジとアリアがバスに突入する手はずだ。

その時だった。

前方の歩道橋の上。そこに、こちらを見下ろす男の姿がある事に気付いた

その男が、

走行する友哉に向けてアサルトライフルの銃口を向けている。

「ッ!？」

とっさにバイクのアクセルを叩きつけるように全開まで吹かす。

男の銃口が火を噴くのは、ほぼ同時だった。

斜め上から降り注ぐ火線。

間一髪、加速が早かったおかげで銃弾はかすらずに済んだ。

しかし、

横滑りしたバイクが、道路にスリップ痕を描きながら停止する。

まさかの妨害者の出現。いや、妨害自体を予測していなかった訳ではない。だが、それはてっきりバスを視認してからの話だと思っていた。こんな手前で現われるのは予想の範囲外だ。

「アリア、ごめん。妨害者だ。そっちには行けない。プランの変更を」

《え、ちょっと、友哉ッ・・・・・・・・・・・・・・・・》

耳に装着したインカムでアリアに通信を入れ、向こうの返事を待たずにスイッチを切る。こうなった場合の代替プランもある。地上からの援護は無いが、アリアとキンジなら何とかするだろう。

それより、問題はこっちだ。

振り返り、フルフェイスヘルメットを外す友哉。

「へえ、まさかアンタが来るとはね。こりゃ期待以上だ」

聞き覚えのある声が、頭上から聞こえて来る。と、同時に相手が歩道橋の上から飛び降りて来るのを感じた。

振り仰ぐまでも無く、相手の姿は視界に入った。

ボサボサの髪に見上げるような長身痩躯。その髪の下から覗く、ギラつく野獣のような瞳。

「相良陣……」

それは間違いなく、先日お台場で出会った少年だった。その手に、今は物騒なアサルトルाइフル、レキが持つドラグノフ狙撃銃の原型となったAK74カラシニコフが握られている。

友哉はバイクから降りて、陣と対峙する。

「何で、君が？」

「こいつも仕事でね。ま、悪く思っなよ」

そう言うと、手にしたAKを投げ捨てる。

その行動に、友哉は眼を見開く。飛び道具の優位を、なぜあっさりと捨てたのか。

「別に驚く事じゃねえだろ」

そんな友哉の様子に、陣は苦笑しながら両の拳を掲げて構える。どうやら、素手で戦うつもりらしい。相手の武器を見て対アサルト

ライフル用の戦闘を想定していた友哉は、頭の中で戦闘計画を切り替える。

「ケンカってのは、面白くやるもんだ。飛び道具なんか無粋なだけさ」

そう言って、僅かに体重移動しながら距離を詰める陣。

対して友哉も、警戒するように腰を落とし、腰の刀に手を掛けた。

「そいつがあんたの武器か。良いぜ、抜きなよ。そんな代わり、俺も全力で行くからな」

むき出しの闘争心を隠そうともせず、陣は更に距離を詰める。

次の瞬間、両者は同時に動いた。

「オオオオオオオオオオオオオオ！！」

引き絞るように右の拳を掲げる陣。

対するように、友哉も高速で刀を鞘走らせた。

本隊から離れ、1人潜行する瑠香は、愛用スマートフォンのGPSを頼りに、目的の場所へと急ぐ。

アリアが逆探知したと言う電波の発信場所は、学園島のある一点を差している。

そこに本当に武偵殺しがいるのかは判らない。だが、アリアは必ずしも交戦しろとは言っていない。アジトと思われる場所を襲撃し、犯人特定に至る物証が見つければそれで上出来だった。

元が忍びの家系であるせい、瑠香は身が軽い。子供の頃から足の速さだけは並みの大人にも負けた事が無かった。数少ない例外が友哉と、今はプロの武偵として活躍している5つ年上の兄だけだが、あのレベルになると、もう化け物だろうと瑠香は思っていた。

おまけに戦闘においても2人は卓越しており、瑠香は子供の頃から一度も2人に勝てた事が無かった。昔はよく、2人に稽古を挑んではボコボコにやられ、泣いていたのを覚えている。

そんな時、厳しい性格の兄は瑠香には何も声を掛けずにいたが、友哉は違った。優しく気遣い、グズる瑠香が泣きやむまであやし続けてくれた。

そんな事があったのだ。少女が年上の少年に恋をするのは、何の不思議も無い事であった。

自分が関西の武偵校ではなく、わざわざ東京武偵校に転校した理由に、恐らく友哉は気付いていないだろう。鈍感だから。だが、幼い恋心を、今も育み続けている少女にとって、その選択肢は必然以外の何物でもなかった。

瑠香は足を止める。

「ここ、か」

そこは普段は使われていない倉庫群。主に機材等の保管庫として使われている。GPSの反応はここから来ていた。

愛用のサブマシンガンである Ingram M10 を抜いて構える。

その時だった。

突然、横合いから飛んで来た物が、瑠香を薙ぎ払った。

「ッ!？」

それが刃である事には、すぐに気付いた。掠めたのは二の腕だが、防弾制服を着ていなかったら、腕が肩から数センチ残して斬り飛ばされていた所である。

瑠香は顔を上げて相手を見る。

小柄な人物。恐らくは、女の子だろう。長袖フードのトレーナーに、短パン姿。顔は深くフードを被っているせいで判らなかった。その手には抜き身の日本刀が握られていた。

「あんだ、一体誰!？」

とっさに Ingram を向けようとする瑠香。

その銃口が相手の少女に向き、引き金が引かれた。

次の瞬間、

「え!？」

少女の姿は一瞬にして書き消えた。

速い。まるで本気を出した時の友哉や兄のようだ。

次の瞬間、少女は瑠香の目の前、僅かに宙に浮いたような形で出現する。

振るわれる刃。

その一閃が、イングラム本体を切り裂いた。

着地する少女。

そのまま返す一撃が、瑠香の胸を直撃する。

鋭い刃によって、胸の縫製が解れ、ネクタイが斬り飛ばされた。

「クツ!？」

どうにか後方宙返りしながら距離を取り、予備武装のサバイバルナイフを抜いて構える。

だが、相手は友哉にすら匹敵するかもしれない敵。こんなナイフ一本で勝てるかどうか。

「あんた、何者ッ、あんたが武偵殺しなの!？」

声も高く尋ねる瑠香に対し、相手は答えない。ただ黙って、手にした刀を右八双に構え直す。

瑠香もまた、覚悟を決めて腰を落とし、戦う構えを見せる。どうやら退くにしても進むにしても、目の前の状況を打破する必要があるらしかった。

踏み込むと同時に抜刀、友哉の剣は陣へと迫る。

対する陣も、友哉に向け手拳を繰り出す。

体重の乗った一撃だ。かなり場馴れしている事が、その拳撃を見ただけでも判る。

だが、

友哉は突撃状態から更に加速、白銀の剣閃が陣の胸を薙いだ。

スピードにおいて、友哉は誰にも負けない自信がある。陣の攻撃は食らえば確かに痛手にはなるだろう。だが、当たらなければ螻蛄の斧と言う物だ。

打撃を食らって後退する陣。

今の一撃で内臓器官に相当なダメージが入った筈。これで決着が着くか。

そう思った時、

陣は何でもないと言う風に顔を上げた。

「やるじゃねえか。だが、まだまだだぜ!!」

まるで何事も無かったかのように、陣は再び向かって来る。

距離はすでに至近。拳の届く範囲だ。

陣の腕が唸りを帯びて迫る。

対して友哉は、上空に舞い踊るように駆けながら陣の攻撃を回避。その背後に着地する。

「相良、君はなぜ、こんな事に加担する？」

陣の背後に立ちながら、友哉は鋭い口調で多ずなる。

「今こうしている間にも、多くの学生が命の危機に晒されている。みんな武偵を目指しているとはいえ、僕達と年齢は変わらないか、あるいはもっと下の子ばかりだ。それを、」

「言ったる、仕事だつてよ」

友哉の言葉を遮るように陣は振り返りながら言う。

「あんたが誰かの依頼でここに立ってるように、俺も俺で、依頼を受けてここにいる。それ以上でも以下でもねえよ」

「相良……」

「ウダウダ言っただけで掛かって来いよ。その大事なお仲間さんとやらが大変なんだろ。アンタも武偵らしく、言葉じゃなく剣で語りな」

最早問答の余地なしとばかりに、再び構えを取る陣。

再び長身の男が友哉へと迫る。

対して友哉は、今度は自分から仕掛けずに回避に専念する。

刃と峰を逆に行っているとは言え、鋼の刀を胸に受けて、倒れるどころかダメージが殆ど入らないとは思わなかった。初めは防弾服の類を着ているのかとも思ったが、それも違う。防弾服は斬撃や銃撃の貫通を防ぐだけの物であり、衝撃を殺す事はできない。つまり、打撃は普通に伝わるのだ。勿論、衝撃吸収材入りの衣服を着用すれば打撃も防げるが、先程の一撃を命中させた時そのような手応えは無かった。

考えられる答えは一つ。この男は、打撃に対して撃たれ強いのだ。

『それも、異様に』

恐らく徒手格闘だけでなく、アルカカタをやっても、その防御力だけで押し切れるのではないだろうか。

攻め手を変える必要がある。一撃で倒せないのなら、どう攻めるべきか。

「どうした、逃げてばっかじゃ何も変わらないぜ!」

思案する友哉に対し、吹き上げるような蹴りを放つ陣。

一撃で巨木をも倒しそうな蹴りだが、やはり当たりはしない。

友哉はのけぞるようにして大きく距離を置きながら刀を正眼に構え直す。

先程、陣は本気で戦えと言った。

成程、確かに出し惜しみをして勝てる相手じゃなさそうだ。

本気を見せる必要がある。

そう思った時だった。

突然、彼方で地鳴りのような大音響が鳴り響いた。

思わず交戦をやめ、振り返る友哉と陣。

その視界の彼方では、天を突くかと思われる程、巨大な水柱がそそり立っていた。

あれは確かレインボーブリッジの方角だった筈。

「……………チッ」

その様子を見て、陣は軽く舌打ちした。

同時に友哉も悟った。あれは恐らく、バスに仕掛けられていた爆弾だ。それが爆発して爆炎ではなく水柱が上がったと言う事は、間

違いない。キンジ達がやってくれたのだ。

「…………折角面白くなる所だったつてのによ」

そう言つと拳を下ろす。どうやら、これ以上交戦の意思はないようだ。

「残念だが、アンタとの決着はまた今度だ。次は、余計な瑣事は抜きでやり合おうぜ」

「随分勝手な言い分だけど、僕がそれを見逃すと思う？」

言い放つと同時に、友哉は地面を蹴る。

この男は武偵殺しと何らかの繋がりがある。捕えて情報を引き出せば何かが掴める。

だが陣は、何を思ったのか、その場にしゃがみ込む。

次の瞬間、アスファルトの地面が、まるで爆弾でも炸裂したかのように碎け散った。

「クッ!？」

とつさに後退する事で衝撃の半径から逃れる友哉。

粉塵が舞い、視界も効かなくなっている。

やがて、それも晴れた時、その場に陣の姿は無かった。友哉が一瞬ひるんだすきに退却したのだ。

「侮れないな」

逆刃刀を鞘に収めながら友哉は呟いた。

一見すると粗野な喧嘩屋に見えるが、その実、引き際を心得た冷静な判断力もある。

一介のチンピラとは訳が違う、もっと戦いなれた存在に思えた。

「とは言え」

友哉は、先程水柱が上がった方角を見た。既に水は退いているようだ、作戦は間違いなく成功したと見て良いだろう。

友哉は落ちていたヘルメットをかぶり直すと、再びバイクにまたがる。

アリア達と合流し、状況を確認する必要がある。負傷者がいるなら救護の手も必要だろう。

友哉は遅ればせながらバスに追いつくべく、バイクをスタートさせた。

夕日が落ちる寮の自室で、友哉はデータベースにつないだデスクトップ型パソコンに向かいあい、検索を掛けていた。

検索内容は「武偵殺し」について。

アリアがなぜ、あれほどまでに武偵殺しにこだわったのか。否、武偵殺しの真相を断言できたのか。それが知りたかった。

戦いは、結果的に言えばアリアチームの勝利と言えた。バスの乗客は負傷者はいるものの、全員が軽傷で済んだ。唯一の重症者は防弾装備をしていなかった運転士だが、こちらも命に別条はない。バス自体は、乗り合わせていた車輛料の男子で、友哉やキンジの友人でもある武藤剛気が運転して事なきを得た。

だが、その勝利は苦い物であった。

結局、友哉は陣の妨害により援護任務を全うできず、事件には関わる事ができなかった。任務を全うできなかったと言えば瑠香も同じで、彼女もまた敵の妨害に逢い、武偵殺しのアジト潜入は叶わなかった。瑠香を襲った敵はある程度の時間稼ぎをした後、唐突に後退したそうだが、その後でGPS表示のある場所に行ってみても何もなかったそうだ。

そして、アリアはリモコン操作されたUZIの銃撃を受け、額に軽傷を負った。不用意に屋根の上に出たキンジを護った時、弾丸が掠めたのだ。傷はそれほど深くはないとはいえ、女の子の、それも額に受けた傷だ。痛み以上に心理的にきついものがあるだろう。

これに関してはキングジを責める事はできない。何しろ、UZIの処理は本来友哉の仕事だったのだから。

結局、爆弾を処理したのはヘリで予備戦力として待機していたレキだった。

バスがレインボーブリッジに出た所で、ヘリで並走しつつ狙撃を敢行。正に神技と言うべき狙撃技術により爆弾を海に吹き飛ばしたのだ。

急造チーム内で自分の義務を果たせたのは、レキだけだったと言える。

一通りの事後処理を終えるのに、結局一日を費やしてしまったが、事件の大きさを考えれば仕方のない事である。

陣との決着は、着かないままに終わったが、あの男の事だ、近いうちに必ず再び友哉の前に現われるだろう。

気になる事は、陣が最後に使ったコンクリートの地面を粉砕した技だ。戦闘現場の事後処理に当たった鑑識科の生徒によれば「どうすればこんな事になるのか判らない」そうだ。

友哉も現場に立ち合ったが、砕かれたコンクリートが殆ど粉々の欠片になり、大きな物でも指先程度にまで砕かれていた。

地面を粉砕する技なら友哉も一つだけ使えるが、それとも違うようだ。何より、友哉の技はあそこまで粉々にならない。せいぜい大きな塊がいくつかできる程度である上、コンクリート等の硬い地面

では効果も薄い為、滅多に使わない。

いずれ戦う時には、警戒する必要があるだろう。

そう思った時、ちょうど検索が完了した。

検索を掛けたのは司法関係の裏情報を扱うサイト。通常のサイトでは個人情報保護の為、犯罪者の実名などは伏せられている。だが、こつした裏サイトなら実名も扱っている可能性が高い。

果たして友哉の思惑通り、狙った情報が画面に現われた。

『《武偵殺し：神崎かなえ》、一審判決にて懲役122年（他742年）。担当弁護士は即日控訴を表明』

「これ、か」

それにしても、懲役864年とは。事実上の終身刑である。

それに、

「神崎……………」

言うまでも無く、アリアと同じ名字。

「親戚……………いや、まさか母親、なのか？」

記載されている年齢を見ると、ちょうど辻褄も合う。そう考えるのが妥当だった。

これで大まかな事が見えて来た。

アリアが武偵殺しの真相を頑なに主張した理由も、こだわった理由もハッキリした。

「アリアは、今も戦っているんだ。たった1人で・・・お母さんの冤罪を晴らす為に」

そう考えると、あの小さな武偵が、本当に見た目通り、幼い女の子のように思えて来るのだった。

第4弾「立ちはだかる者」

終わり

第5話「剣閃拳撃」

1

学園島を大騒ぎさせたバスジャックから数日が経過し、武偵校にも「ただの喧騒」と言う名の平穏が戻ろうとしていた。

巻き込まれた生徒達も、軽傷だった者も含めて数日後には全員が学校に復帰を終え、唯一重症だった運転士にも、学校側から見舞金が贈られたとの事だった。

ここ数日、友哉は授業に出たり、瑠香に稽古を付けたりしながら、アリアの事を考えていた。

アリアは、当然の事だが、母親の無実を信じて戦い続けている。武偵殺しに異様にこだわっているのもその為だろう。

だが、難しいだろう。と友哉は考える。

下級裁隔意制度の施行によって、裁判の迅速化が進んでいる。アリアは最高裁までに全ての真犯人を揃え有罪判決をひっくり返そう

としているようだが、それが間にあうとは到底思えなかった。

まるで、荒野の迷子だ。

寄る辺も無く。差し伸べる手も無く。先の見えない野を1人彷徨う。それが今のアリアに思えた。

「友哉君、どうしたの？」

横に並んで弁当を食べている瑠香が尋ねて来た。

今は昼休み時間。自由履修までの合間を縫って尋ねて来た彼女を伴い、一般科棟の屋上で瑠香が作ってくれた弁当を食べていた。

瑠香は先日 of 戦いで主武装のイングラムを破壊されてしまった為、新しい銃を発注している最中だった。その銃が来るまでの間は諜報科の履修と同時に友哉との稽古で時間を潰していた。

気になると言えば、瑠香が武偵殺しのアジトと思われる倉庫に潜入するのを阻んだと言う少女の事も懸念材料だった。瑠香の話では、相当な剣の腕であったとか。

陣と同時に現われた妨害者の存在。それが、どうにも引つ掛かっていて。

「妨害者……直接的に事件に関わるんじゃない、まるで外堀を固めるようにして、こちらの分断を図ってきた……」
「友哉君？」

ミートボールを口に頬張りながら、瑠香は怪訝そうに見詰めて来

る。

だが、友哉はそれに構わずに考え事を続ける。

何かが引つ掛かる。情報量が少なすぎるから何かと特定する事は難しいが、自分は何か大きな物を見落としていている気がしてならなかった。

その時、こちらに向かって歩み寄って来る人影に気づき、友哉は顔を上げた。

「やつほー、ユツチー!!!」

金色の髪を靡かせて手を振っているのは理子だった。予め昼はここにいとメールしておいたので、探して来てくれたのだろう。

「悪いね理子、わざわざ来てもらったりして」

「なんのなんの、あ、美味しそう。いただきまーす」

駆けつけ三杯とばかりに、友哉の弁当箱から卵焼きを一切れ摘んで口に入れる。

「ん〜、うつま〜いッ　ルカルカ、まだ腕上げたんじゃない?」

「そ、そうですか?」

素直に褒められて、瑠香は嬉しそうに頬を染めた。

「もうね、これならいつでもお嫁に行けるよ。って言うか、理子がお嫁にもらっちゃおうかな。ねえ、ユツチー、この娘、理子に頂戴」
「いや、頂戴って、ペットじゃないんだからさ」

「その、困ります、理子先輩」

苦笑する友哉と、困ったように恐縮する瑠香を面白がるように、理子は友哉の隣に腰掛けた。

友哉も真顔に戻り、理子に向き直る。

「それで理子、頼んでおいた物は？」

「うん、バッチリだよ」

そう言つと理子は、制服の胸に手を突っ込む。

僅かに見えた理子の下着に少し顔を赤くする友哉に構わず、理子は胸元から書類の束を出して友哉に差し出してきた。

「はい、ユツチー、どうぞ」

「う、うん、ありがとう」

少しどもる友哉。半眼で睨んで来る瑠香を見ないようにしながら書類を開く。

理子は探偵科に所属しており、普段の馬鹿騒ぎ振りからは想像できない程、高い調査能力を持っている。追跡調査が必要な局面では、こつして重宝される場合が多い。

「何調べて貰ったの？」

横から瑠香が覗き込む。

そこにはある人物の写真と共に、その身边を調査した報告書だっ

た。

「あ、これ」

その写真には瑠香も見覚えがあった。

「相良陣、16歳。お台場を中心に活動する不良グループの顔役的存在。ただし本人は一匹狼である事を望んでおり、取り巻きが勝手にそう呼んでいるだけ。《喧嘩屋》を自称し、お台場周辺で起こる揉め事の解決や、依頼を受けての喧嘩代行業を行っている。喧嘩代行業においては敗れた事は無く、百戦百勝を誇っている。素手で鉄をも砕く拳を持ち、その撃たれ強さと合わせてヤクザの事務所を壊滅に追いやった事もある。その戦闘力は武偵ランク換算ではBからAに相当すると思われる」

その後、陣が関わったとされる事件、揉め事が羅列して記載されている。

乗りかかった船、と言う訳ではない。ただ、友哉は先日のバスジャックに関わり、尚且つアリアの事情を知った事から、自分なりの方法で武偵殺しに迫ってみようと考えたのだ。

武偵が護るべき規範として10条からなる「武偵憲章」と言う条文がある。その8条にこうある。「依頼は、その裏の裏まで完遂せよ」。アリアから武偵殺し関係の依頼を受けた以上、それを最後まで支援するのは友哉の義務であり、そして望みでもあった。

陣がどの程度、武偵殺しについて知っているのか、それは判らない。しかし例え細い糸であったとしても、手繰れば必ず何かが出て来る筈だ。

「相良陣……」

あのコンクリートを粉碎した技の正体は判らないが、しかし攻略法はある。次に戦った時には仕留める自信があった。

「あ、そう言えばユッチー知ってる？」

「何が？」

話題を変える理子に、友哉は資料を読む手を止めて理子に向き直った。

「実はね、アリア、イギリスに帰る事になったんだよ。確か、今夜の便じゃなかったかな」

「アリア先輩が!？」

話を聞いていた瑠香が素っ頓狂な声を上げた。

「な、何ですかッ!？」

「さあ、そこまではちよつと。ただ、アリア、ここるところずっと塞いでる感じだったからねえ」

それは友哉も感じていた事だ。バスジャックの後、アリアは目に見えて気落ちしていた。殆ど無気力に見えるほどに。

だが、神崎かなえ。アリアの母親と思われる女性は日本に収監されている。武偵殺しも、恐らく現在は日本に潜伏している。アリアにとって、今、日本を離れる事にメリットはない筈だ。

『方針を、変更したのか……』

かなえが着ている罪は武偵殺しの物だけではない。恐らく、他の容疑者を追う方向に切り替えるのかもしれない。もう時間も無いと言っのに。

「残念だな、折角仲良くなれたのに」

そう言っつて瑠香は俯く。確かに、瑠香は最近アリアと仲良く話したりする場面が見られた。そのアリアが遠くに行っつてしまふ事が寂しいのだろつ。

「理子、アリアが乗る便はいつ出るの？」

「んつと、確か、羽田発ヒースロー行き、19時発のチャーター機でANA600便だつたかな」

それを聞いて、友哉は立ち上がる。

「瑠香、行くよ」

「え、う、うん。それじゃあ、理子先輩。また今度」

「おー、行っつてらっつしゃーい!!」

能天気 hands を振る理子に背を向ける友哉を、瑠香は慌てて追いかける。

友哉は手にした逆刃刀を強く握る。

これまでは武偵殺しに対し完全に防戦一方だつたが、ここからは攻勢に出る番だつた。

お台場ライナー埠頭。

総延長1800メートルの岸壁を有し、船荷の積み下ろしを行う場所に友哉は立っていた。

夕日が照らす岸壁の南側に立ち、友哉は静かに目を閉じている。

戦いの前の、あの奇妙な落ち着きが今来ている。これから戦う相手は決して侮れる物ではない。油断は即、死にも繋がるだろう。

だが、今の友哉に気負いはない。自分でも異様に思っくらしい冷静に、これからの戦いに集中している。

瑠香も雰囲気で察しているのだろう。友哉の後ろに控えたまま、声を掛けようとはしなかった。

その時、ザツとアスファルトを踏む音が聞こえ、誰かが立ち止まる気配があった。

「よう、アンタの方からお呼びがかかるとは思わなかったぜ」

目を開くと、ポケットに手を入れたまま不敵な笑みを見せている相良陣が立っていた。

陣との決着を付ける戦場として友哉が選んだのが、ここ、ライナ―埠頭だった。

「まさか、こんなに早くアンタと決着を付ける事になるなんてな」「そうかな、少し遅いくらいだと思うけど」

そう言っつて苦笑を返す。

武偵殺しの件で情報をまとめるのに手間取った上、大した成果が上がらなかった事が原因ではある。そして、友哉はこれ以上後には引けないと言う状況で、今、ここに立っていた。

「相良、単刀直入に聞くけど、君は武偵殺しと直接関係があるの？」

「ああん？　なんだそりゃ。そんなもん、聞いた事もねえよ」

友哉の問いに間髪入れずに答える。

友哉は真っ直ぐに陣を見据える。理子が調べてくれた陣の調査書類には、性格は「直情馬鹿」とあった。理子なりの表現方法に苦笑したが、同時に真っ直ぐで嘘をつかない性格である事が推測できた。ならば、今の答えもはぐらかす事が目的とは考えにくい。

「じゃあ、質問を変える。君に今回の件を依頼してきたのは誰？」

「……成程。そいつを聞きたかった訳か」

陣は不敵な笑みのまま、両手をポケットから出して拳を作る。

「良いぜ、教えてやるよ。ただし、アンタが俺に勝つたらな」

相手が構えるのを見て、友哉も刀の柄に手を掛けた。元より、ここに来た時点で対決は不可避な物と考えていた。

「友哉君……」

心配そうにつぶやく瑠香に片手を上げて答え、友哉の瞳は真っ直ぐに陣を見据えた。

次の瞬間、

「行くぜ!」

陣は拳を掲げ、友哉めがけて突っ込んで来る。

陣は瘦身とは言え190センチ以上の長身。154センチの身長しかない友哉からすれば見上げるような大男だ。しかも体は筋肉質であり、非常にしなやかな動きができる。

「喰らえ!」

その全身のバネを遺憾なく発揮した一撃が、大気を砕いて友哉に迫る。

だが、友哉は冷静に拳の軌道を見据えながら、半身引く事で陣の攻撃を紙一重で回避する。

「甘エ!」

回避されるのは陣にも判っていたのだろう。

叫びながら、今度は左の拳を繰り出して来る。

切り返しの速い拳撃は、友哉の鼻先を掠めていく。

風圧が鼻を抉るようになり、直撃してもいないのに友哉は顔面に痛みを感じているようだった。

陣は尚も攻撃の手を緩めない。

素早い切り返しと連続攻撃。それはまるで、拳の散弾だ。紙一重で避け続けるにしても限界がある。

だが、

友哉はその一撃一撃全てを見極め、常に陣の腕が描く軌道の範囲外に逃れる。

「どうした、逃げるだけじゃ、この間と変わらないぜ!」

勿論、逃げるだけで終わるつもりはない。

陣が大きく右腕を振り上げる。

その瞬間を、友哉は見逃さない。

鋭い眼光が、容赦無く陣を射抜く。

次の瞬間、友哉は逆刃刀を鞘走らせた。

抜刀術による一閃。その一撃は陣の繰り出す拳をはるかに上回る速度でもって、カウンターを叩きつける。

横薙ぎに刃が払われる。

一閃は陣の脇腹を直撃した。

手応えはあった。普通の人間なら骨折すら免れない一撃である。

だが、

「効くかよ、そんなもん!!」

陣は何事も無かったかのように、友哉に対して鋭い回し蹴りを繰り出す。

蹴り技は拳よりも遅い分、遠心力が入るので威力が高く、更に間合いも拳より長い。

友哉は大きく後退する事を余儀なくされた。

陣の爪先が、容赦無く後退する友哉を掠めるが直撃には至らない。

「チツ!?!」

陣は舌打ちしつつ、後退しながら着地する友哉を見送る。

速度ではかなわないと踏んだのだろう。無理に追撃は掛けず、懐に入って来た時をねらってカウンターを仕掛けるつもりのようなのだ。

一方の友哉はと言うと、並みの一撃では陣を倒せない事くらいは先の戦闘で予想済みだったので、別段驚きはしない。

並みの一撃が効かないのなら、並みで無い攻撃を繰り出せばいいのだ。

逆刃刀を片手で持ち上げるようにして構える。切っ先は真っ直ぐに陣へと向けたまま。

それが決着への合図と受け取ったのだろう。陣もまた、ニヤリと笑いながら、右の拳に力を入れて全指の関節をゴキリと鳴らす。

どちらも決め技の構えだ。

固唾を飲んで見守る瑠香の喉が、緊張で僅かに鳴った。

次の瞬間、

動いたのは陣だった。

速度で敵わないのでカウンター狙いであると踏んでいた陣の方が攻め込む。この一見焦れて仕掛けただけにも見える状況だが、陣には勝算があつての事だった。

如何に速度に優れようと、それは視界が効いた状態での話だ。ならば、それを封じてしまえば良い。相手の情報を遮断するのは、どのような戦闘に置いてでも必勝のパターンである事に変わりはない。

間合いまであと一足と言う段階に入った瞬間、陣は上半身を撓め、

拳をアスファルトの地面に叩きつけた。

「二重の極み」。それが、陣が先日 of 戦いで使った技の名前である。

本来、物質にはすべからず抵抗力が存在する。その為、いかに強力な打撃であつても、その威力を完全に物質に伝える事はできない。ならば、まず第一撃を物質に加え、その刹那の後、第二撃を加えれば、威力は完全に物質に伝える事ができる。

そうして振るわれた拳は、いかな巨岩すら砕く事ができる最強の一撃となる。

この技は陣の先祖が、修行中に降臨した不動明王から教わつたとされている。まあ、それは眉唾だろうと陣本人は思っているが。この二重の極みを、陣は左右両方の拳で放つ事ができる。もつとも、あまりに危なすぎて人間に直接放つ事はないが、それ以外の如何なる物をも、これまで破壊し尽くしてきた。

陣の拳が友哉のすぐ足もとにある地面に叩きつけられ、アスファルトを粉々に粉碎した。

巻き起こつた粉塵が、友哉の小柄な体を包み込み視界を遮る。

これが陣の狙いであつた。

「友哉君!!」

瑠香の悲鳴じみた声。粉塵の中に姿が見えなくなつた事で、彼女の眼には友哉が倒されたと映つたのかもしれない。

「貰ったぜ!!」

勝利を確信し、再び拳を振り翳す陣。

彼の脳裏には、粉塵の中に立ちつくし、なす術も無く殴り飛ばされる友哉の姿が確かに映っていた。

だが、次の瞬間、

「こつちだッ」

上空から降り注ぐ、鋭い声。

振り仰いだ陣の双眸に、

赤茶色の髪を靡かせ、殆ど直角に近い形で急降下して来る友哉の姿が映った。

幕末の京都

剣戟と血風が吹き荒ぶ動乱の時代に、「最強の維新志士」と呼ばれた一人の剣客がいた。

彼の名は、緋村抜刀斎。

あまりに多くの人を斬り、あまりに多くの人を殺めた事から「人斬り抜刀齋」と呼ばれ、敵味方を問わず多くの人間から恐れられた。

やがて、時代は明治に移り、抜刀齋の消息は誰も知る事無く、時代のうねりの中へとその姿は消えていった。

その抜刀齋が、最も得意としたとされる技。

天空を飛翔する龍が打ち降ろす雷霆の如く、上空から一気に急降下、その勢いでもって刃を斬り下げる。受けた相手は例外なく脳天から真っ二つにされると言いつけるべき必殺技。

その名も、

「飛天御剣流………龍槌閃!!」

急降下と同時に、真一文字に一閃。

友哉の放った一撃が、陣の頭頂部を直撃した。

やがて、粉塵が晴れた瞬間、

友哉は刀を振り下ろした状態で地面に着地し、

陣はその友哉の目の前で、両腕をだらりと下げたまま立ち尽くしている。

まだ戦うのか。

傍で見ていた瑠香が、そう思った瞬間、

グラリと陣の体は揺れ、そのまま仰向けに倒れ込んだ。

いかに撃たれ強かろうと、人間である以上頭部だけは例外である。友哉の龍槌閃を脳天にまともに受け、強烈な脳震盪を引き起こしたのだ。恐らく、暫くは立つ事も出来ないだろう。

だが、

「ク・・・ククク・・・ダッハッハッハッハッハッ！」

その状態で、陣は思いつきり高らかに笑って見せた。

「負けだ負け。大した奴だよ、アンタ」

力を振り絞るようにして首だけ持ち上げる陣だが、すぐに力尽きて後頭部を地面に打ち付けていた。

「いや、君もすごかったよ」

言いながら、友哉は自分の傍らに空いた大穴を見やる。これもまた、陣の二重の極みによるものだが、もしこれが友哉の体を直撃していたなら、多分きゃしゃな体つきの友哉等、ひとたまりも無く粉砕されていた事だろう。

だが、それをあえて直撃ではなく、地面に叩きつけて目晦ましに

使ったあたりに、陣のある種のけじめのような物が見て取れた。

「それで、何が聞きてえんだ？ つつても、俺が知ってる事なんて大したことじゃねえがよ」

その言葉を受け、友哉は刀を鞘に収めると陣の傍らに膝を突いた。

「まず、君に今回の件を依頼した人物は誰なの？」

「名前は知らねえよ」

間髪いれずに答える陣に、友哉も溜香も呆れ顔になった。名前も知らない相手の依頼を受けたと言うのか。

そんな空気を察したのか、陣は何でもないと言つ風に言葉を続ける。

「別に、俺の中じゃ珍しい事じゃないぜ。払いも良かったしな」

「他には、何か特徴とかないの？」

「ああ、喋り方は丁寧なんだがよ、何か薄気味悪い仮面を四六時中付けてる奴でな。自分の事は『仕立屋』って名乗ってたぜ」

やはり。

友哉の中で、かみ合わなかったパズルがようやく一枚の絵になりだした。

《仕立屋》 由比彰彦。あの男が今回の事件に絡んでいたのだ。

「ああ、そうだ、あとそのオッサンが電話で話してるのを偶然聞いたんだが、奴等、ハイジャックがどう、とか言ってたぜ」

「ハイジャック？」

物騒な単語に、友哉は息を呑む。

ついこの間、同じような事件「バスジャック」が起きたばかりである。もし本当に依頼主が武偵殺しであるなら、今度の標的は飛行機と言う事になる。

『待てよ……』

悪い予感は連鎖する。

細い糸に過ぎなかった一連の事件が、強固な鎖となって繋がる。

武偵殺しは武偵を狙った連続殺人犯。そして、今夜飛行機を使用する武偵に、友哉は心当たりがある。

腕時計に目をやる。時間は間もなく18時になろうとしている。

理子の話では、アリアは19時羽田発のチャーター機でイギリスに帰ると言う話だ。

もし友哉の予想が正しければ、次に武偵殺しの標的になるのはアリアと言う事になる。それだけでなく、アリアは武偵殺しを追う立場の人間である事を考えれば、武偵殺し本人からすると目障り以外の何物でもないだろう。

「クッ」

友哉は踵を返すと、駐車しておいたバイクへと走る。

事は一刻を争う。最悪の事態だけは何としても避けなければ。

「瑠香、君は車輛科と救護科に連絡して相良の護送を依頼して!!」
「良いけど、友哉君、どうしたの急に?」

瑠香が戸惑った声で尋ねて来るが、今は説明している時間も惜しい。

「頼んだよ」

静かに一言だけ言うと、友哉はバイクをスタートさせる。

爆音を轟かせて走るバイク。

それを操る友哉は、焦りに突き動かされるように羽田への道を急いだ。

第6話「武偵殺し、その仮面の下」

1

キンジがANA600便に飛び乗るように駆けこんだのは、離陸直前だった。

「武偵だ。離陸を中止しろ!!」

「あ、あの、あなたは一体!?!」

叩きつけるように言ったキンジに、ハッチをロックしたキャビン・アテンダントがうるたえながら尋ねる。が、今のキンジに説明している暇はない。

「良いから、すぐに離陸を中止するように言っただッ」

「無駄だよ、キンジ」

CAの背後から声を掛けられ、キンジが視線をそちらに向けると、逆刃刀を手に苦い顔をして立っている友哉がそこにいた。

「緋村、お前、どうして……」
「どうやら、目的は同じみたいだね」

そう言っつて、友哉はにっこり笑った。

ライナー埠頭からバイクを飛ばして羽田を目指した友哉だったが、途中で渋滞に掴まってしまい、予定よりも遅れてしまった。ANA 600便に飛び乗ったのはキンジが来るほんの1分前。キンジと同じように離陸中止を訴えたが聞き入れてはもらえなかった。

やがて、飛行機はゆっくりと動き出す。タクシングで誘導路から滑走路へと移動しているのだ。

こうなると、もう止めるのは難しいだろう。

流れは完全に武偵殺しの側にある。だが、キンジが来てくれた事で、ある程度アドバンテージは取り戻せたと思う。

「行こう、キンジ」

こうなった以上、次の手を打たなければならない。相手の思考を読み、相手の行動に先んじ、常に先手を打ち続ける事こそが飛天御剣流の神髄だ。だが、武偵殺しとの戦いではあまりにも後手後手に回りすぎている。

何とか主導権を取り戻さねば、このままズルズルと押し切られる可能性があった。

CAに案内され2人が向かったのはアリアのいる部屋だった。

飛行機と言っても、内装はまるで一流ホテルのように整備されており。アリアもまた個室を1人で使っているとの事だった。

友哉自身、これまで何度か飛行機に乗った経験があるが、このような豪華な飛行機など、無論、見た事すら無い。

武偵殺しの事件を追う上でついでに調べた事だが、アリアはイギリス王室から認められた、ある貴族の家柄であるとの事だった。成程、そう考えれば妥当な事とも思える。

そんな中に武偵校の制服を着た男子2人が歩いているのは、何だか場違いなような気もしたが、そんな事を言っていられない。

案内された部屋に入ると、既に見慣れたピンク色のツインテールが驚いた顔で振り返った。

「キンジ、友哉、アンタ達、何でここに!?!」

驚くのも無理はない。この飛行機はロンドンのヒースロー空港までノンストップで飛び続ける事になる。そんな所に知り合い2人がこのこやって来るなど予想外も良いところだろう。

「断りも無く部屋に押し掛けるなんて失礼よ!!」

「お前にそれを言う権利はないだろ」

噛みつくように叫ぶアリアに、キンジは冷静にそう返す。

これにはアリアも言い返せない。何しろ、キンジが彼女とのパートナー編成を承諾するまで彼の部屋に居座り続けたのだから。

「何で着いて来たのよ？」

「太陽は何で昇る？ 月はなぜ輝く？」

「うるさい！！」

意味不明なやり取りをしている2人を見ると、友哉は状況も忘れてほえましい気持ちになった。

「あの、ちょっとお2人さん。取り敢えず、そろそろ離陸するみたいだから、シートベルトしない？」

友哉の指摘通り、飛行機は直線で加速を始めている。離陸態勢に入っているのだ。

2人は取り敢えず言い争いを収めると、ソファアのようにになっている席についてシートベルトを締めた。

友哉もまた、席に座ってベルトを引っ張る。

さて、これで賽は投げられた。後戻りはできない。次の地上に降りる時は、事件を解決した後か、さもなければ、

この機体が墜落する時だった。

やがて徐々にスピードを上げたANA600便は、独特の浮遊感と共に大空へと舞い上がる。

機体が水平になり、安定軌道に入っても、アリアは不機嫌な表情を崩す事無く、一言も口をきこうとしない。

一方で友哉とキンジも黙って椅子に座っている。2人ともアプローチの方法は別だが、それぞれここに武偵殺しが現れる事を確信して乗り込んだのだ。ならば、後は待ちの一手である。

気まずい沈黙が狭い個室の中に流れ始めた時、

突然、窓の外が強烈に発光し、次いで轟音が鳴り響いた。

「キヤツ!?!」

アリアは首を竦め、悲鳴を上げる。

その想像していなかった様子を見て、キンジと友哉は思わず顔を見合わせた。

「アリア、もしかして、雷怖いの?」

「な、何言ってるのッ、馬鹿じゃないのッ、こ、怖い訳ないじゃない!?!」

そう言う割には、明らかに声が震えているし、視線も定まっていない。

次の瞬間、再び閃光と轟音が走った。光ってからのタイムラグがそうない事から考えて、今度は先程よりも近い。

「ひゃあッ!?!」

「またも悲鳴を上げるアリア。これはもう、完全に確定的だった。その様子が面白いのか、これまでの意趣返しでもするようにキンジがからかうように口を開く。」

「怖いんならベッドに潜って震えているよ」

「う、煩いー!!」

「チビったりしたら一大事だぞ」

「ば、ば、バカー!!」

その時、三度、雷が鳴り響いた。

アリアは最早、恥も外聞も無く飛びあがると、本当にベッドに飛び込んで震えだした。

「アリアー、替えのパンツ持つてるか？」

「ば、バカキンジ、後で風穴あけてやるから!!」

威勢良く言っているが、毛布を頭からかぶって震えながら言われなくても、怖くもなんともなかった。

「こらこら、苛めない苛めない」

友哉が苦笑しながらたしなめる。アリアに関わったせいでキンジが被った苦勞を知っている友哉としては彼の気持ちも判るのだが、これ以上は流石にかわいそうだった。

キンジもそれ以上やる気はないのか、肩をすくめてベッドの縁に腰掛けた。

「き、キンジ〜〜」

涙声で震えるアリアの姿には、いつもの勢いが全く感じられない。本当に、どこにでもいる普通の女の子にしか見えない。

「ほら、怯えんなって」

そう言ってアリアの手を握ってやるキンジ。何だかんだで優しい所があるのも、この少年の魅力なのだろうと友哉は考えていた。

その時だった。

ダンッ　　ダンッ

突然、弾けるような音が機内に鳴り響いた。

同時にアリアとキンジは顔を上げ、友哉は逆刃刀の柄に手を掛けた。

聞こえたのは2発だけだったが、それは間違いなく銃声だった。

3人の間に緊張が走ると同時に、機内放送が流れた。

「アテンションプリーズ、で、やがります。当機は、ただ今、ハイジャック、され、やがりました……」

このボーカロイドを使用した音声を友哉が聞くのは初めての事だが、それは間違いなく聞いていた武偵殺しの手口と同じだった。

「意外と、早く動いたね」

もう少し時間を置き、こちらの緊張が緩和されてから動くかと思っていたのだが、どうやら当てが外れたようだ。だが、これは好機だ。こちらも万全の状態で挑む事ができる。

「行こう、キンジ、アリア」

3人は互いの武器を構えて頷き合う。

今こそ、武偵殺しとの決着を付ける時だった。

2

移動の道すがら、キンジは自分の推理を語ってくれた。

武偵殺しは以前活動していた時、バイクジャックとカージャックを起こしている。だが、ここにもう一つ、世間では認知されていない事件が加わる。シージャックである。

そのシージャックが関連事件として認知されなかったのは、武偵殺しが爆弾を遠隔操作する際の固有の電波が感知されなかったからである。つまり、そのシージャックの際に、武偵殺しはジャックされた船に乗り合わせていたと言う事になる。

ここで、一度リセットが入る。乗り物が小さくなったのだ。言うまでも無くキンジのチャリジャックである。そして先日のバスジャックと来て、今回のハイジャックである。

シージャックの時、武偵殺しは直接対決によって武偵1人を仕留めているらしい。そして今回、武偵殺しはアリアを標的に定めたのだ。

そうしている内に、3人は指定された1階のバーに辿り着く。

入口から僅かに顔を出して覗き込むと、カウンター席に誰か座っているのが見えた。他に人影が見えない所を見ると、その人物が武偵殺しである可能性が高かった。

友哉は逆刃刀を抜き、アリアは2丁のガバメントを構え、キンジはベレッタを両手で保持する。

頷き合うと同時に、3人はバーへと突入。件の人物へそれぞれ武器を突きつけた。

「動くな!!!」

キンジの鋭い声。

だが、相手はカウンターに頬杖を突いたまま、優雅な仕草で振り返った。

その顔を見て、友哉とキンジは目を向いた。

「あなたは……」

それは、友哉達が乗り込んだ際に対応したCAだった。

CAはニヤリと笑みを浮かべて口を開いた。

「今回も、綺麗に引っ掛かってくれやがりましたねえ」

そう言つと同時に、自らの顎に手を掛け、ベリベリと顔面をはがす。同時に反対の手で着ているCA服を脱ぎ払った。

その瞬間、アリア、キンジ、友哉は同時に呻いた。

目の前に現われたのは、3人の知る人物だったのだ。

ゆったりとした金色のツーサイドアップヘアに、ヒラヒラの多い武偵校防弾制服。小柄な肢体と愛らしい笑顔。

クラスメイトの峰理子が、目の前に立っていた。

「ボン・ソア、キンジ、アリア、友哉」

余裕のある口調で理子が言う。

衝撃は計り知れない。まさか、理子が？ 彼女が武偵殺したとでも言うのか？

だが、そんな3人をあざ笑うかのように、理子は言う。

「才能って、結構遺伝するんだよね。武偵校にもお前達みたいに遺

伝型の天才が数多く存在する。その中でもお前は特別なんだよ、オルメス」

理子は真っ直ぐにアリアを見て言った。

「あんだ、いったい何者なのよ!？」

アリアの問いに、理子はニヤリと笑って答える。

自らが持つ、本当の名前を。

「理子・峰・リュパン4世。それが理子の本当の名前だよ。フランスの大怪盗アルセーヌ・リュパンは理子の曾お爺様って訳」

「なっ!？」

友哉は思わず絶句した。

アルセーヌ・リュパンと言えば探偵科の教科書にも載っている大怪盗。そんな大物が出てくるとは。

「でも、家のみんなは誰もその名前と呼んでくれない。お母様が付けてくれた『理子』って言うかわいいい名前をね。呼び方がおかしいんだよ」

理子の口調が、徐々に変わって行くのが判った。それまでは笑みの浮かべた余裕のある口調であったのに、徐々に荒く、叩きつけるような物へ。

「4世、4世、4世様、どいつもこいつも、使用人まで。ひっどいよね」

「それが何よ、『4世』の何が悪いってのよ!？」

声を荒げるように尋ねるアリアに、理子もまた叩きつけるように返した。

「悪いに決まってるんだろ。あたしは数字か!? 遺伝子か!? あたしは理子だ。数字じゃない。どいつもこいつもよオ!！」

口調が完全に変わっている。

そこにいるのは最早、クラスメイトでムードメーカーの峰理子ではなかった。

「まで、理子、武偵殺しは、本当にお前なのかッ!？」

「武偵殺し? あんな物はプロログを兼ねただだのお遊びだよ。本命はオルメス4世、お前だ。100年前、曾お爺様同士の対決は引き分けに終わった。お前を倒せばあたしは曾お爺様を超えられる。あたしはあたしになれるんだ!！」

喚くように言う理子に、友哉達は圧倒される思いだった。

彼女が何を言いたいのかは判らない。だが、その思いが狂気にも似た執着を孕んでいるのは判った。

「キンジ、お前もちゃんと役割を果たせよ。オルメスの一族にはパートナーが必要なんだ。わざわざ条件を合わせる為にお前とアリアをくっつけたんだからな」

「俺と、アリアを?」

「そっ」

驚くキンジの顔が面白いように、理子は再びいつもの軽い調子に戻って話す。

「キンジのチャリに爆弾しかけて、判りやすい電波出して、気付かせてあげたってわけ。でも、キンジがなかなか乗り気にならないから、バスジャックでくっつけてあげました」

「全部、お前の手の内だったってわけかよ」

「ん、そうでもないよ。バスジャックの後も二人がくっつききらなかったのは予想外だったし、それに、」

理子の視線が友哉へと向けられた。

「友哉、お前がここにいる事は完全に予想外だった。まったく、こんな事にならないように、足止めを頼んだってのに」

「そうか、それで相良の情報を僕に流したのか」

理子としては友哉が相良とぶつかり、負けるか、あるいは手傷を負って動けなくなるように仕向けたかったのだろう。最悪でも戦闘にかまけて時間を費やし、離陸に間に合わなければ、その時点で友哉を封じる事はできたのだ。

しかし彼女にとって予想外な事に、友哉は間に合ってしまった。

「投降して、理子。君だって、1対3でこのメンツに勝てると思っ
つてないでしょ」

友哉は最後通牒を突きつけるように言った。

武偵殺しとして今まで策謀を連ねて来た理子だが、その戦闘能力は未知数である。しかし武偵3人を相手に勝てるとは思っていない

だろう。

だが、理子は余裕の顔を崩そうとしない。

「さあ、それはどうだろうね」

そう言って理子は再びキンジを見る。

「ねえ、キンジ。勿論判つてると思うけど、シージャケットの時、キンジのお兄さんをやったのも、理子だよ」

「な、に、兄さんをッ」

キンジの感情が高ぶるのが、見ても判る。

挑発。この状況をひっくり返す為に、理子は明らかに心理戦を仕掛けて来た。

「ついでに言うとお、キンジのお兄さんは、今、理子の恋人なお
「いい加減にしろ!!」

ベレッタを持つ手に力を込めるキンジ。

「キンジ、ダメ!!」

「挑発よ、落ち着きなさい!!」

友哉とアリアが制止に入るが、激昂したキンジはそれすら跳ねのけて銃口を理子に向けた。

「これが、落ち着いていられるかよ!!」

だが、ベレッタの銃口が火を噴く事は無かった。

キンジが人差し指に力を込めようとした瞬間、N600便が急激にグラリと傾いた。

乱流にでも巻き込まれたのか、突然の事で対処が追いつかない。

「なっ!?!」

「うわあ!?!」

バランスを崩したキンジは、そのままよろけ、横に立っていた友哉とぶつかってしまった。

キンジの手からベレッタが離れ、床に転がってしまう。

もつれ合いながら、床に転がる友哉とキンジ。

その中で、驚異的なバランスを保ちながら、疾走する影がある。

アリアだ。

味方2人が動けないでいる中、アリアは1人、隙を突いて理子へと接近。2丁のガバメントでアルIIカタを仕掛けた。

対抗するように、理子もワルサーP99を取りだす。こちらも2丁拳銃の構えだ。

アルIIカタの場合、打撃力は銃の口径に依存し、手数は装弾数に依存する。

アリアのガバメントは8発装填。2丁で16発。対して理子のワルサーは1丁だけで16発。2丁で32発装填可能。この勝負、明らかにアリアが不利である。

しかも、2人は互いに撃ち、駆け、蹴り、ほぼ互角の戦いを演じている。

防弾制服の上から何発か命中しているが、互いに退く事はない。撃たれた次の瞬間には撃ち返し、相手に容赦なく打撃を与えている。

「すごい………」

友哉は思わず感嘆の声を漏らした。

友哉がアリアの戦いを見るのはこれが初めてであるが、2丁拳銃と2本の小太刀を主武装としたアリアは双剣双銃の異名を轟かせ、武偵ランクはSに格付けされている。

そのアリアと互角に渡り合う理子もまた、尋常な実力ではなかった。

だが、それも長くは続かない。先に話した通り、徒手での格闘戦と違って、拳銃戦には弾切れがある。そして、アリアの銃は理子の半分しか撃てない。当然、弾切れはアリアの方が早い。

アリアのガバメントのスライドが下がったまま固定される。マガジンの再装填を許す程、理子は甘くないだろう。

だが、そこにアリアの、否、アリア達の勝機があった。

自分の銃の弾丸が尽きるの見計らい、アリアは一気に距離を詰め、理子の両腕を自分の脇に挟み込んで動きを封じた。

「キンジ！！ 友哉！！」

アリアの合図と共に、2人は左右から駆ける。

キンジはバタフライナイフを開き、友哉は逆刃刀を返すと、それぞれの刃を理子の首筋に押し当てた。

「動くなッ」

「そこまでだよ、理子」

2本の刃を突きつけられ、理子は動きを止める。

その間にマガジンを交換したアリアも、再びガバメントを構えた。

これで、チエックメイトだ。

だが、それでも尚、理子は余裕の表情を崩さない。

友哉は逆刃刀を突きつけながら、訝るように眼を細める。

何か、まだ何か、理子は切り札を隠し持っている。直感がそう告げていた。

「ねえ、アリア、理子とアリアは色んな物が似ている。家系、キュートな姿。それに、二つ名。双剣双銃は、アリアだけじゃないんだよ」

そう呟くと同時に、理子の気配が変わった気がした。

「でも、アリアの双剣双銃は完璧じゃない。アリアは、まだこの力の事を知らない!!」

そう言った瞬間、驚くべき事が起こった。

突如、理子の長い髪がひとりでに動き出した。

ツースайдテールが自ら意思を持ったように動く。その先端には、それぞれ一本ずつナイフが括られている。

アリアもそれに気づき、とっさに回避しようとする。が、よけきれずに右のこめかみを斬られた。

「アリア!!」

鮮血の舞うアリアを見て、叫ぶキンジ。しかし、あまりの光景に、キンジも友哉も対応が一瞬遅れる。

次の瞬間、

逆に距離を詰めた理子が、アリアの胸にワルサーを押し当てた。

時が止まる一瞬。

ただ一人、理子だけが勝ち誇った笑みを浮かべ、引き金を引いた。

「アリアアアアアア!!」

友哉とキンジが見ている前で、密着状態から銃撃を食らったアリアがあおむけに倒れる。いかに防弾制服の上からとは言え、これは致命傷になりかねない。

超偵という存在がいる。それは超能力を駆使して捜査や戦闘を行う武偵の事だが、どうやら理子はその超偵であつたらしい。

倒れ込むアリアを、駆け寄ったキンジが抱き起こすが、アリアはぐったりとしたまま起き上がろうとしない。辛うじて銃だけは握っているが、その状態で意識を失っている。至近距離から銃撃を食らったのだ。骨が折れているかもしれない。内臓にダメージを負っている可能性もある。

後には、高笑いする理子の声だけがバーに響き渡る。

「アハ、アハハハハハ、曾お爺様、108年の歳月は子孫にこうも差を作っちゃうもんなんだね。こいつ、自分の力どころか、パートナーや仲間も碌に使えてないよ。勝てる、勝てるよ、理子は今日、理子になる！！ アハハハハハ！！」

状況はまたも逆転。ペースは完全に理子の物だった。考えてみれば、この飛行機、いや、ハイジャックと言う状況その物が理子の作ったフィールドと言えなくもない。その中で戦っているのだから、僅かなアドバンテージなど無きに等しい。

「キンジ、ここは僕が押さえる。君はアリアをッ」

この中で唯一、戦闘力が低下していないのは友哉だけだ。ならば、友哉が理子を押さえている隙にキンジにはアリアを護って一時戦線離脱してもらおうしかない。どちらにせよ、けが人を抱えたままでは

戦えない。アリアに応急措置を施す時間を稼がないとならない。

「すまん緋村、無理はするなよ!!」

アリアを抱えて背を向けるキンジ。

「逃がさないよ!!」

その背中に銃口を向ける理子。

だが、

「やらせないよ」

静かな声と共に、友哉は理子の前に立ちはだかった。

「クフ、今度は友哉があたしと遊んでくれるの？ 良いよ。ただしそんな半端なNTR狙い、理子の好みじゃないの。だから……」

理子の髪が逆立ち、同時に両腕のワルサーが持ち上げられる。

「邪魔するってんなら、容赦しないよ!!」

2つの銃口、2つの刃が同時に襲い掛かって来る。

その姿に、友哉は僅かに目を細めた。

なぜ、こんな事になったのか。

なぜ、普通のクラスメイトのままできてくれなかったのか。

なぜ、あの教室で笑って待っていてくれなかったのか。

あらゆる思いを胸に、友哉もまた駆けた。

「ハアアアアアアアアアアアア！」

横薙ぎに逆刃刀を振るう。

対して理子は右のナイフで友哉の剣を弾くと、左のナイフで逆に斬りつける。

「クツ!？」

とっさに後退して、横薙ぎを回避する友哉。

だが、距離を取った瞬間、理子がワルサーを放って来た。

「ツ!？」

横に跳びながら回避する。

アリアとの拳銃戦で大分消耗している筈だが、仮に同数撃つていたとしても、まだ理子の銃は左右合わせて16発は撃てる計算になる。

「ほらほら、どうしたの〜友哉。あんよがふら付いてるよ!〜!」

言いながら、2本のナイフを翳して斬り込んで来る。

これが意外に厄介だ。通常、人間の体の動きは関節可動域によって、動きと範囲が決められている。すなわち、曲げる、伸ばす、捻る、回すなどの決められた動きを決められた範囲しかできないのだ。それさえ把握していれば、相手の予備動作から次の動きが予測できる。

だが理子の攻撃手段は髪である。動きにも可動範囲にも制限が無い為先読みが難しい。まるで二匹の毒蛇を相手にしているかのようだった。

逆刃刀を振るって理子の攻撃をいなす友哉。

接近するとナイフが左右から迫り、距離を置けばワルサーが火を噴く。

刀1本しかない友哉にとっては、いささか不利である。

着地しながら、状況を素早く整理する。

手数では武器4つを操る理子の方が圧倒的に有利だ。迂闊に飛び込むのは危険である。

ならば、どうするか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

友哉はゆっくりと、刀を鞘に戻すと、腰を落として右手を柄に置いた。

相手が手数に置いて圧倒的に勝ると言うなら、こちらは理子の動き全てを凌駕する神速の抜刀術でもって、先の剣を取るしかない。

「クフフ、そう来たかユツチー」

そう言うつと、理子も威嚇するように銃とナイフを構える。完全に迎え撃つ態勢だ。

戦力差は1対4。友哉が理子を倒すには、彼女より先に動き、先に攻撃を仕掛ける必要がある。

「ねえ、理子。さっき、アリアと話してた事、アリアを倒せば、本当の理子になれるって話だけど……」

友哉の問いかけに、理子はニヤリと笑みを見せて口を開く。

「友哉、お前はあたしやアリアの事を調べていた。だから判っているだろう。あたしとアリアの血にまつわる因縁を」

「……………」

確かに、友哉は理子の正体を知った時点で、彼女がアリアに固執する理由に見当が着いていた。

今から約100年前、怪盗アルセーヌ・リュパンの犯行に手を焼いていた当時のフランス政府は、ドーバー海峡を越え、1人の名探偵をイギリスから招聘した。

彼こそが当時、そして現在においても「史上最高最強の名探偵」と名実ともに称される男、シャーロック・ホームズであった。

ホームズとリュパンは頭脳の限りを掛けて戦い、一度はホームズがリュパンを捕縛する事に成功するも、その後リュパンは隙を見て脱走。勝負は事実上引き分けに終わる。その後も幾度か両者は激突したが、ついに決着はつかないまま終わってしまった。

アリアの母である神崎かなえは、さるイギリス人貴族の男性と結婚しアリアを産んでいる。その男性こそが名探偵シャーロック・ホームズの孫に当たる人物である。つまりアリアの名前にあるHとはホームズを意味し、彼女こそがシャーロック・ホームズ4世と言う事になる。

「何で、アリアを倒す事が理子自身になれるのか、それは僕にも判らない。けど、これだけは言える」

友哉は真っ直ぐに理子を見据え、ハッキリとした口調で言い放つ。

「人は、誰かに認められて、初めて人になる。少なくとも、君の周りにいる人間は、みんな君を理子だと思い、理子と呼んでいる。キングも、アリアも、溜香も、僕も。それだけじゃいけないって言うの？」
「ッ」

問い掛けるような友哉の言葉に、理子は一瞬目を見開く。しかし、すぐに達観したようにフツと皮肉げな笑みを見せた。

「やっさしーなー、友哉は……」

そう言いながら、理子は俯く。金色の前髪がパサリと落ち、彼女の表情を読み取る事ができない。

「……………けどね、優しさなんてあったところで何にもならない……………優しさはあたしを救ってはくれなかったんだ!」

次の瞬間、理子は一気に距離を詰めに掛かる。髪の毛の届く距離にまで切り込み、手数が多さを最大限利用する事で四点同時攻撃を仕掛けるつもりなのだ。

同時に、友哉も床を蹴って疾走する。

互いの距離は殆ど無い。

コンマの間を待たずに、間合いはゼロを差す。

「ハアアアアアアアアアア!」

鞘走る逆刃刀。

同時に理子のワルサーが咆哮する。

銃口から飛び出した銃弾が、友哉の両耳を掠めるように飛んだ。

僅かに刀の軌道が鈍る。

だが、友哉の勢いは衰えない。

一閃が真一文字に理子へと迫る。

「クッ!？」

銃撃の僅かな隙に体勢を立て直した理子が、ナイフで友哉の剣を

受け止めようとする。

逆刃刀と2本のナイフ。

金属同士がぶつかり合う。

次の瞬間、

友哉の剣は理子のナイフを二本同時に弾き飛ばした。

「あつ!?!」

神速の抜刀術によって得られたエネルギーに耐えるには、理子の能力では足りなかったのだ。

刀を返す友哉。

直撃こそしなかったが、今の一撃で理子は体勢を崩している。

このまま理子を捕縛する。

そう思った瞬間、

ダァン

突然銃声が鳴り響き、友哉の足元に着弾した。

「そこまでに、してもらいましょうか、緋村君」

聞き覚えのある、落ち着き払った声が聞こえて来た。

振り返ると、そこには無表情の仮面を被った男が銃を片手に入
から入って来るところだった。

「……………由比、彰彦」

それは見間違いようも無く、大井コンテナ埠頭で出会った《仕立
屋》と名乗る男だった。

その姿を見て、理子は不満げに口を開く。

「おっそい」

「申し訳ありませんね。こちらも、それなりの準備があつたもので

「フンツ、どうだか。言つとくけど、アンタ達のせい、あたしの
計画は狂わされたんだ。その責任は取ってもらつよ」

「ええ、勿論。そのつもりでここに来ましたから」

そう言つと、彰彦は左手で刀を抜いて構えた。

「そんじゃ、あと宜しくね」

「待てッ」

予備のナイフを髪で抜きながらバーから出て行く理子を、友哉は
追おうとする。

しかし、その前に刀と銃を構えた彰彦が立ちはだかつた。

「理子さんの邪魔はさせません。君には私の相手をしていただきま
しょう、緋村君」

「クツ……………」

一刻も早く理子を追わねばならないと言っのに。

しかし、目の前の男もまた、侮って良い相手ではない。

焦燥と緊張が否応なく募る中、友哉は再び逆刃刀を構え直した。

第6話「武偵殺し、その仮面の下」

第7話「最強の脇役」

1

友哉は刀を正眼に構え、対峙する彰彦と向かい合う。

無表情の仮面はバーの明かりに照らされて無機質に光を放ち、より一層不気味な雰囲気を作り出していた。

対峙したのは大井埠頭での一度のみ。しかし、その一度だけで、彰彦は得体の知れない存在感を友哉に刻みつけていた。

理子によってハイジャックされたN600便の中で、こうして再び対峙しても、その不気味さは変わらない。

一方の彰彦は、右手にオーストリア製自動拳銃グロック19を構え、左手には日本刀を持って、友哉との間合いを図っている。

《仕立屋》を名乗る謎の敵。その实力は未だに分からない。だが、それだけに迂闊に踏む込む事が躊躇われた。

「どうしました？」

友哉が攻め手に迷っていると、彰彦の方から声をかけてきた。

「迷いがあるようですね。迷いは剣を鈍らせる要因にもなりますよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どこか諭すような口調で話す彰彦の言葉に、友哉は答えない。一種の心理戦である。彰彦は挑発めいた言葉を交える事によって、友哉のモチベーションを崩そうとしているのだ。

友哉は取り合わず、彰彦の武器に視線を集中させる。

彰彦の実力が未知数である以上、迂闊に先の剣を狙うのは却って自殺行為である。また、仮面によって表情を読み取れない為、視線から相手の狙いを推察する事も難しい。ならばアクションを起こす瞬間を見逃さず、相手の動きに自身を合わせる後の先を狙うしかない。

右手のグローブか、左手の刀か。

先に動くのはどちらだ。

緊張感を張り詰め、友哉は即応できるように両足に均等に力を込めた。

「私を、失望させないで下さいよッ」

次の瞬間、彰彦が動いた。

その右手が跳ね上がる。

グロツクの照準が、友哉の頭部に合わさった。

「ッ!！」

次の瞬間、友哉は体を低くして床を蹴る。

放たれる弾丸。

しかし、一瞬早く友哉が頭を下げた為、致死の弾丸は頭部を掠めて背後の壁に命中する。

床面を低空で疾走するように、友哉は彰彦へ接近した。

「ハアッ!！」

切り上げるように、下から刀を振るう友哉。

その一撃を、刀を下に返して防ぐ彰彦。

突進速度をそのまま斬り上げに変換した一撃を、彰彦は片腕で防いで見せたのだ。

「チッ!？」

舌打ちする友哉。

ほぼ同時に、彰彦はグロツクの銃口を、動きを止めた友哉へと向ける。

が、

「なっ!？」

銃口の先に、友哉の姿はない。

友哉は殆ど天井に近い高さまで飛び上がり、右手で逆刃刀を振り上げていた。

「飛天御剣流、龍槌閃!！」

急降下と同時に、勢いに任せて振りかぶった刀を振り下ろす友哉。

防御力の高い陣を、一撃の下に沈めた技を放つ。

流石にこれには敵わないと踏んだのか、彰彦は大きく後退。友哉の攻撃を回避した。

着地と同時に、友哉は顔を上げて視線を彰彦に向けた。

天井が低すぎる為、十分な高度が取れなかった。その為、龍槌閃は威力、速度共に不十分な物になってしまったのだ。

彰彦もただでは下がらない。バックステップで後退しつつ、立て続けに3発、グロツクの引き金を引いた。

「クッ!？」

飛んでくる銃弾。

全てをよけきる事は不可能。

1発目は友哉の右耳を掠める。

2発目、友哉は体を傾けて大きく回避。

そして3発目。これは体勢を崩した友哉に命中するコースにある。

だが、友哉は慌てなかった。

飛んでくる銃弾の射線に対し、自らの刃を誘導する。

ギインッ

甲高い音とともに、彰彦の放った弾丸は逆刃刀の刃に弾かれて明後日の方向に弾き返された。

飛んできた3発の弾丸の内、2発を回避、残り1発を刃で返すという離れ業をやった友哉。

だが、その驚異の反応速度を見ても、彰彦は怯まずに距離を詰めてきた。

「体勢が崩れましたよ、緋村君!!」
「ッ!?!」

とつさに体に力を入れ、回避行動に入ろうとする友哉。

しかし、遅い。

体重の乗った彰彦の蹴りが、友哉の小柄な体に突き刺さった。

「グツ!？」

大きく吹き飛ばされ、廊下まで転がる友哉。

すぐに膝をついて立ち上がるうとするが、そこへ彰彦が斬り込んできた。

「クツ!？」

突きに近い一撃を、友哉は逆刃刀を傾けながら受け、そのまま勢いを斜めに逸らす。

友哉と彰彦、その視線が一瞬間近で交錯する。

仮面越しに互いを射抜く視線。

自分よりも体重の大きな彰彦の突進をいなしたことで、友哉の体勢は大きく崩れて壁に背中を付ける。

その間に彰彦は、距離を置いて構え直した。

戦場はバーから狭い通路へと移っている。

友哉も立ち上がりながら、刀を持ち上げる。

この地形は、友哉にとって不利である。

彰彦は銃を持ち、遠距離から攻撃できるのに対し、友哉の武器は

刀一本のみ。おまけに通路が狭い為、機動力を活かして銃弾を回避する事も難しい。先程のように刀で銃弾を弾く手もあるが、あの防御は連射されると難しい。

その事は彰彦にも分かっている。故に、余裕の持った口調で言った。

「これで終わりですよ、緋村君」

その仮面の下では、既に彰彦は勝利を確信していた。

「いかに君でも、この距離で私の銃よりも速く斬りかかることなど不可能です」

両者の距離は6メートル。確かに、彰彦の銃撃を掻い潜って斬りかかるにはいささか距離がありすぎる。

だが、

「それは、どうでしょう」

友哉もまた、諦めていない口調で返す。その構えは、先ほどまでと違っていている。右手一本で持った逆刃刀を、弓を引くように構え、左手は水平に倒した刃の腹に当てて支えている。

「やってみないと判りませんよ」

そう告げる友哉を、彰彦は仮面の奥の瞳で見据える。

これまで彰彦は、多くの人間と戦ってきた。その中には、今の友

哉と同じ目をした人物は何人もいた。

どんな状況に陥っても、決してあきらめない、不屈の闘志を持った人間の目だ。

「……いいでしょう」

こうした目を持つ人間を、彰彦は決して嫌いではない。

だが、彰彦とて《仕立屋》として闇の世界にその名を知られている人物。ここで引く事は許されない。

「勝負ですッ」

叫ぶと同時に、彰彦の右腕が跳ね上がり、グロツクの銃口が向けられた。

ここは狭い通路。いかに友哉が素早く動けようと、左右への回避は絶対にできない。ならば、友哉が狙うのは高速接近で彰彦の照準を狂わせ、一気に懐に入り込んで一撃を加える以外にない。

それが分かっているなら、彰彦の勝利は動かない。彰彦の銃の腕なら、友哉が接近しきる前に仕留める自信があった。また、仮に接近を許したとしても、今度は日本刀による迎撃が友哉を待っている。それを逃れる事はまず不可能。まさに、彰彦にとって必勝の布陣であった。

放たれる弾丸。殆ど間を置かない速射により、一気に3発放たれる。

次の瞬間、友哉の姿が消えた。

否、超高速で動いたため、消えたように見えただけだ。

彰彦の視線は、友哉の動きを正確に見切っていた。

「下です!!」

3発の銃弾を潜りぬけて、彰彦に接近する友哉。

そこへ、彰彦が刀を振り下ろす。

刃は友哉の頭頂部を指す。

これで終わり。

そう思った瞬間、

友哉の動きが一瞬にして更に加速、振るった腕が霞む程の速さで斬り上げられた。

「飛天御剣流、龍翔閃!!」

とっさに、彰彦は友哉の攻撃を防ごうとして刀を構える。

攻撃のモーションから、すぐさま防御に切り替えるあたり、彰彦の技量の高さが伺える。

しかし、それが限界だった。

友哉の龍翔閃は、彰彦の刀をへし折って更に威力を失わない。

低空接近から切り替えられた、超高速の斬り上げ。それは、接近速度をそのまま打撃に変換され、振り上げた刃の腹は無防備に立ち尽くす彰彦の顎を強烈に打ち抜いた。

仰向けに宙を舞う彰彦。その仮面の奥で、信じられないという目をしていた。

状況は彰彦にとって有利に動いていたはずだ。それが、こうもあっさりと覆されるとは。

「……………や、やはり……………私の見立てに、間違いはなかった」

不思議な事に、彰彦は仮面の奥で満足げな笑みを浮かべていた。

「緋村君……………君は、実に興味深い存在です」

背中から床に倒れる彰彦。

勝敗は決した。

友哉は手錠を取り出すと、倒れている彰彦へと歩み寄る。

「由比彰彦、殺人未遂の現行犯で逮捕します」

その手を取ろうとした。

その時、

突然、N600便の機体が急激に傾いた。

「なっ!?!」

思わずよろける友哉。

その一瞬の隙に、彰彦は動いた。

スーツの内側に入れておいた閃光手榴弾を取り出すと、友哉の足元へと転がす。

一瞬にして、廊下が閃光に満たされる。

「うっ!?!」

思わず目をガードするが、白色の閃光は瞼の裏を焼き付けて友哉の視界を奪う。

ややあつて、視界が元に戻ると、そこには既に彰彦の姿はなかった。

「……………逃げたか」

友哉は苦い想いととも、刀を鞘に納める。

やはり一筋縄ではいかない。勝ったと思った瞬間にこれである。

だが、悔しがっても仕方がない。今はキンジ達の状況を確認するのが先決だった。

客室へと向かう途中、再び振動が機体を襲った。

先程よりも強い衝撃に、友哉は思わず肩を壁に叩きつけられたほどだった。

「何なんだ………」

しかも、今回は前に揺れた時とは違う。微かにだが、明らかに何かが壊れる音が聞こえた。

雷か何かが直撃して、機体が破損したのだろうか？ だとしたら拙いかもしれない。航空機というのは落雷対策をしっかりとしているものだが、万が一計器などに損傷があった場合、航法に支障が出る可能性もある。

その時、

「緋村！！！」

呼ばれて振り返ると、キンジが友哉を追いかけるように走っているのが見えた。

「キンジ、状況はどうなってるの?」

「理子には逃げられた。それにミサイル喰らって、エンジンを2基やられた」

キンジの言葉に、友哉は顔面が蒼白になった。先程の振動はそれだったのだ。

4基あるエンジンの内半分を失っても、こうして安定した飛行が可能な辺りは流石VIP専用のチャーター機と言うべきだが、状況は予断を許す物ではない。

「とにかく、コックピットへ行くぞ。今、アリアが操縦を担当しているはずだ。状況を確認し、機体を最寄りの空港に下ろすぞ」

「そうだね」

頷きながら、友哉はキンジが先程までと雰囲気が違う事に気付いていた。

危機的状況であるにもかかわらず、発揮する冷静な判断力と行動を整理する力。

キンジが時々見せるこの雰囲気こそ、彼が去年、強襲科でSランクを誇った証だ。正体は分からないが、こうなった時のキンジはあらゆる意味で頼りになる存在である。

2人がコックピットに入ると、アリアはその小さい体をパイロット席に乗せ、操縦桿にしがみついていた。

先程、理子にやられた時のぐったりした様子はない。どうやら応急手当は成功したようだ。

「遅い！！」

2人が入ってくる気配を察してアリアが叫ぶ。

「すまないね、アリア」

コパイロット席に座りながら、キンジは手早く状況をアリアに説明する。

理子は逃亡。更にミサイルの直撃により、エンジン2基が破損した事。

「さっきの衝撃はそれだったわけね」

アリアが舌打ちしながら呻く。今のところ、目に見える変化は訪れていないが、着弾のショックで機体がどこかいかれている可能性もある。どうにかして羽田空港まで戻る必要があった。幸いにしてここはまだ東京上空。戻るのにそう時間はかからない。

「アリア、飛行機を操縦した経験は？」

「小型機を何度かあるだけ。流星にこれだけ大きいと勝手が分からないわ。着陸させるのも無理ね」

必死に操縦桿を操るアリア。パイロットとサブパイロットは既に理子によって無力化されている。つまり、今はアリアだけが頼りという事だ。

普段よりも、アリアの声が上がっている。Sランク武偵として数々の凶悪犯を捕まえてきたアリアでも、この状況には恐怖を覚えずにはいられなかったのだろう。

そんなアリアの頭を、キンジは優しく撫でる。

「それで充分だよ、アリア」
「んなッ!？」

ウィンクまでして見せるキンジの態度に、アリアの顔は急激に赤く染まる。

不思議だ。

いつも友哉は思う。

普段は女嫌いを自称し、露骨に女子と接触する事を避ける傾向にあるキンジが、こうなった時はなぜか必要以上に女性に対して優しくなる。

一体、どっちのキンジが本当なのか。

そんな事を考えていると、アリアが焦ったように話題を変えてきた。

「そ、そんなことより友哉。あんた今まで何処行つてたのよ？」
「おろ、僕？」

話題を振られ、友哉は2人に説明する。理子以外の敵、《仕立屋

《 由比彰彦の事を。》

その話を聞いて、アリアは少し難しい顔をして考え込んだ。

「……………そう言えば聞いたことあるわ。イ・ウーには自ら計画を立てて犯行に及ぶんじゃないかと、他のメンバーを支援する事を目的に行動する人間がいるって。そいつのコードネームが、確か《仕立屋》だったはず」

「アリア、聞きたいんだが、そのイ・ウーって言うのはなんなんだろう？ 確か、理子も同じ事を言っていたが」

計器を操作しながら尋ねるキンジ。

だが、アリアは首を横に振って答える意思がない事を示した。

「世の中には、知らない方が良い事だってある。知れば、あんた達は後戻りできなくなるわ。だから、少なくとも今はまだ言えない」
「アリア……………」

友哉は少し非難するような目を向ける。既にここまで巻き込まれている状態である。それで情報を隠されるのは、正直今更という感が無くはなかった。

対してキンジは、落ち着いた口調で言った。

「分かった。けど、いつかは話してくれるんだろう。俺はその時を待つよ」

キンジのそのセリフに、またもアリアの顔が赤くなる。

そんなアリアをよそに、計器の操作を終えたキンジがインカムに向かって口を開いた。

「応答せよ、羽田コントロール。こちら羽田発ヒースロー行き、N600便」

現在、600便に搭乗している人間で、このエアバスを完璧に操縦できる人間はいない。そこで、地上から指示を受け、着陸シークエンスを行うのだ。その方がリスクは少ない。

ややあって、応答があった。

《こちら、羽田コントロール。聞こえている。状況を説明せよ》

「ハイジャック犯は逃走。パイロット負傷の為、現在、乗り合わせた武偵2名が操縦している。俺は遠山キンジ。もう1人は神崎・H・アリア」

《よくやった、遠山武偵。次の指示を待て》

そこで通信はいったん途切れた。

キンジは内ポケットから、端末を取り出し、片手でボタンをプッシュする。それは航空でも通話可能な衛星電話。乗客から借りてきた物である。

記憶にある番号を入力し通話ボタンを押した。

コール1回で、相手が出る。

《もしもしッ?》

「武藤、俺だ。キンジだ。変な番号からですまない。実は訳あって、

今、東京の上空から掛けている」

相手は車輛科の武藤剛気だ。キンジ達とはクラスメイトであり、先日のバスジャック事件では負傷した運転士に変わって見事な運転技術を披露し危機的状況を切り抜けた。普段はお調子者で、理子と並ぶ男子のムードメーカーだが、今はその声も緊張に満ちている。

《キンジ、やっぱお前だったか》

「武藤、時間が無いから状況を説明するぞ」

キンジは武藤のアドバイスを受けつつ、状況を整理していく。

すると、驚くべき事が分かった。

燃料が漏れている。ミサイルが命中した際に燃料弁も破損してしまったのだ。しかも、破壊されたエンジンは内側の2基である為、閉鎖する事も出来ない。

時間は持つて15分。その間にこの機体をどこかに降ろさないと、乗客もろとも墜落する事になる。

「どうすれば良い？」

《そつだな、まずは……………》

そこで、なぜかノイズが入り、通信が不自然な切り替わり方をした。

《こちらは、防衛省航空管理局だ》

その声に、キンジと友哉は不審な想いになる。衛星電話に割り込

みをかけての通信。まるでこちらを分断するような行動だ。

《羽田空港は現在、事故により閉鎖中で使用できない。誘導機が海上へ誘導、安全確実に君達を不時着させる》

通信相手がそう告げると同時に、コックピットの窓の外に1機の戦闘機が並走するのが見えた。

航空自衛隊の主力戦闘機F15Jイーグルだ。アメリカの旧マグダネルダグラス社が開発した機体を、日本の自衛隊が採用した物である。20ミリバルカン砲1門を固定装備し、マツハ2.5で飛行が可能。正式採用されて半世紀近くになるというのに、未だに被撃墜機が無いという伝説めいた事実を持っている。新鋭機が続々と登場している現状にあつてなお、世界最強の戦闘機と言つて過言でない機体である。

あれが誘導機なのだろう。

アリアが指示に従い、操縦桿を倒そうとした。

だが、その手をキンジが掴んだ。

「キンジ？」

「指示に従つちやだめだ、アリア。海の上に安全に降りれる場所なんてない。海上に出たら俺達は撃墜されるぞ」

政府はリスクと乗客の命を天秤にかけてリスクを取った。素人が600便を操縦して墜落する事を恐れたのだ。そこで海上に誘導して撃墜するつもりなのだ。並走するイーグルはその為の刺客と考えるべきだった。

その時、

《その通りだ、キンジー！！》

通信機から、再び武藤の声が響いた。おそらく通信科が回線を確認したのだ。

《よく聞け、お上の奴等。俺達は絶対に仲間を見捨てねえ。絶対にだ！！》

啖呵を切る武藤の声が、この上なく頼もしく感じる。

N600便が首都上空から出ないと悟ったのか、並走していたイグルが遠ざかっていく。彼らも人口密集地で撃墜する気はないのだろう。

とは言え、それでも稼いだ時間は僅か10分強だ。いずれにしても10分後には墜落か不時着の二者択一を選ばなくてはならない。

キンジは少し考えてから口を開いた。

「武藤、この機体を着陸させるとすれば、どれくらいの距離が必要だ？」

《そつだな、状況にもよるだろうが、だいたい2050メートルつてところだ》

「……………ギリギリだな」

キンジは考え込むように呟いた。

「キンジ、どうするつもり？」

「学園島は南北2000メートル、東西に500メートル。対角線に取れば2061メートルまで取れる」

アリアの問いかけに、キンジは答える。だが、その言葉には友哉も、アリアも驚愕した。

キンジは学園島の敷地を使って、この機体を不時着させると言っているのだ。

だが学園島の上には当然、武偵校関連施設が存在している。そこに突っ込む事は、もはや墜落と何ら変わらない。

だがキンジは何でもないと言いたげに続ける。

「安心しろ、降りるのは空き地島の方だ」

空き地島とは学園島の北に浮かぶ、ただっ広い更地の事だ。確かにあそこなら施設は何もない平面なので着陸自体は可能だろう。しかも、そこには施設は何もない。夜間に、しかもこの嵐の中で降りられる光源はないのだ。

「何とかするぞ」

落ち着き払ったキンジの声。そこには気負いも不安も感じられない。

友哉は思わず震えるのを感じた。

残り10分。状況は最悪。

その状況下で、これだけ落ち着いていられること自体が既に異常であると言えなくもない。

だが、そこから来る圧倒的な信頼感とカリスマ性。

これこそが遠山キンジなのだ。

叩きつけるように、武藤が叫ぶ声が聞こえた。車輛科であるからこそ、彼もキンジの案がいかに無茶であるか認識しているのだ。

「緋村、頼みがある」

キンジが操縦桿を握りながら言う。

「不時着を成功させるのは、できるだけ機体を軽くする必要がある。このままでは仮に接地に成功してもオーバーランする恐れがある。だから、少しでも機体を軽くするんだ」

「軽くって言うと、もしかして」

友哉はキンジが言わんとする事を察し、同時に渋い顔を作った。

「ああ、これから着陸に当たって、一度だけ東京湾上空をフライパスする。その時に貨物室にある荷物を投棄してくれ」

航空機は大きな荷物は、カウンターで預けられる。その荷物は全て纏めて、最下層の貨物室に格納されているはずだ。

確かに、捨てるならそれしかない。貨物室の荷物を投棄出来れば、かなりの重量軽減になるだろう。

だが、

「後から苦情が殺到しそうだね」

「命とどっちが大事か考えてもらうさ。頼めるか？」
「分かった」

友哉は頷くと、駆け足でコックピットを出て行く。

生存に向けて、最後の戦いが始まった。

3

強襲科2年の不知火亮は、自身の無力さを感じずにはいられなかった。

彼は武藤と同じくキンジ達のクラスメイトであり友人だ。友達を助けたいという思いは誰よりも強い。

現在、武偵校の教室を臨時の司令部とし、情報科、通信科の生徒が集まりバックアップ体制を築き上げている。

しかし、状況は必ずしも芳しくはない。

通信とネット回線は防衛省によって妨害され、直通通信が可能なのは、通信科2年の中空知美咲が開通した物のみ。ましてか現場は上空を飛行するエアバスの中。実質、状況分析以外に殆ど手出しできない状態だ。

武藤は先ほど、キンジとの通信を叩きつけるように打ちきり、教室から駆けだしていった。おそらく、彼なりの形でキンジ達の手助けをするつもりなのだろう。

事ここに至って、不知火にできるのは彼らの無事を祈る事のみである。

「……………少し、休んだ方が良いんじゃない？」

不知火は、彼の背後に立つ1年女子にそう声をかけた。

四乃森瑠香は、疲れたような表情でそこに立っていた。

ライナー埠頭での戦いの後、友哉の指示通り車輛科と救護科を呼んで陣を護送した直後、武偵病院でハイジャックの話聞き急いで駆け付けたのだ。

あの飛行機には、キンジが、アリアが、そして友哉が乗っている。

無力を感じているのは、瑠香も不知火と同じである。この場にあつては、彼女にできる事は何も無い。

「……………ここに、いさせてください」

「四乃森さん」

「邪魔はしません。お願いします」

瑠香の心情を察してくれたのだろう。不知火はそれ以上何も云わずに瑠香から離れる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・友哉君」

ぼつりと、大切な幼馴染の名前を呼ぶ。

『お願い、どうか、無事で・・・・・・・・・・・・・・・・』

友哉が貨物室に飛び込むと、一瞬にして冷気が全身を襲い、凍結するような感覚に襲われた。内部の温度は氷点下を下回っている。

比較的低空を飛んでいるとはいえ、今はまだ4月。しかも夜間である。上空は文字通り凍りつく寒さである。

友哉は指先が凍りつくような感触に襲われながらも、必死に作業盤に取り付く。急がないといけない。今や乗客全ての命は3人の武偵の肩にかかっていると言っても過言ではなかった。

コンテナはレール上に乗せられて固定しており、荷揚げや荷下ろしの際にはこのレールを稼働させて作業を行うのだ。

機材を操作しロックを解除、更にレールを稼働待機状態にする。

これでは、後部ハッチを開放すればいつでも投棄できる。

友哉はハッチ開閉パネルのある後部へと足を向けた。

そこで、足を止める。

目指すパネルの前に、1人の男が立っていた。

「由比、彰彦……」

「随分とやってくれましたね、緋村君」

気を抜けば気を失ってしまいそうな気温の中、武偵と仕立屋は再び対峙する。

だが、彰彦にはそれ以上交戦の意思はないのか、肩を落としたまま銃を抜く気配も無い。龍翔閃をともに食らったにも関わらず、そのダメージを感じさせないほど落ち着き払っている。

仮面の奥にあつて表情を読む事は出来ないが、その口調には非難よりも賞賛があるように見て取れた。

「計画は失敗。主犯である理子さんも逃亡。この稼業は長いですが、ここまでひどい負けは初めてですよ」

「……なら、投降してください。これ以上の戦いは無意味です」「さあ、それはどうでしょう?」

「ここは空の上ですよ。現在、不時着の準備中ですが、当然、不時着地点は武偵校の学生が包囲しています。逃げ道はありません」

言いながら、刀の柄に手をかける友哉。この距離なら彰彦が銃を撃つ前に斬り掛る自信がある。

だが、その様子にも彰彦は動く気配がない。

「武偵憲章七条『悲観論で備え、楽観論で行動せよ』でしたか。武偵でなくても、それは当てはまるのですよ」

そう言い放つと、ハッチ解放レバーを下ろした。

「クッ!？」

気圧低下に伴う強風が、友哉の体を叩く。

その一瞬の隙を突き、彰彦は虚空に身を躍らせた。

とつさに追いかけて捕まえようとするが、既に彰彦の体は東京湾上空に投げ出されている。

友哉はハッチの端に掴まりながら、強風に耐えてその姿を追う。

しかし、夜間の上に嵐である為、視界が全く効かない。

彰彦の体は、すぐに闇にまぎれて見えなくなってしまった。

自殺、をするような人間には見えない。という事は、何らかの脱出手段を持っていたと考えるべきだ。

それにしても、

「《仕立屋》由比彰彦、か」

自身で計画を考え実行するのではなく、他者という主演者の為に、作戦という名の衣装で着飾らせ、支援者という脇役を用意し、戦場という舞台を仕立てる。

まさに仕立屋。

これらを一人でやったとすれば、最強の脇役と言っても過言ではない存在だった。

「恐ろしい敵だ……」

ここで取り逃がした事は大きい。この事が、いずれ自分達にとって大きな災禍となって返ってくるかもしれない。

パネルを操作し、荷物の投棄を始める。

やがて、コンテナは暗い東京湾へ吸い込まれるように落下していった。

第7話「最強の脇役」

終わり

第8話「剣を振るう理由」

強襲科の自由履修を終えると、友哉は着替えて校舎の外へ出た。

包帯を巻いた右腕を、軽く振るって調子確かめる。

不時着した時にぶつけた右腕は、まだ違和感が残るものの骨折などはなく、あと数日もすれば動かすのに支障がなくなるだろう。

世間を騒がせたハイジャック事件は、時を追うごとに収束の兆しを見せ始めていた。

友哉が貨物の投棄をした後、キンジはANA600便を空き地島へと不時着させる事に成功した。

勿論、彼1人の功績ではない。

いかにキンジが見事な操縦を披露し、友哉とアリアがそれを支援しようとして、それだけでは夜間、嵐の中飛行機を着陸させる事は出来なかった。

しかしその問題は、何よりも頼りになる仲間達の手によって解決した。

キンジとの通信を打ち切った後、武藤は車輛科と装備科の仲間達

を招集し、大型車両と大型ライト多数を無断で持ちだし、空き地島を対角線に結ぶようにして2列並べ、即席の滑走路を作り上げた。着陸に成功したのは、彼等に依るところが大きい。

武偵憲章、その一条は「仲間を信じ、仲間を助けよ」とある。

それがいかに危険な状況にあつたとしても、武偵は決して仲間を見捨てない。

その仲間達の助けにより、乗員乗客はけが人を多数出しながらも、奇跡的に死者を出さず、ハイジャック事件を解決に導く事に成功したのだ。

友哉はふと立ち止まって、北の方向に向いた。

ここからは見えないが、レインボーブリッジを挟んだその方角には空き地島が浮いており、その上には解体を待っているANA600便の残骸が風力発電用の風車にぶつかった状態で放置されていた。

逃走した理子と彰彦に関しては、警視庁や武偵庁、海上保安庁が総力を上げて探索しているが、その死体はおるか手掛かりすら未だに見つかっていない。東京武偵校も諜報科、情報科、通信科を駆使して足取りを追っているが、その行方は杳として知れなかった。

だが、事件にかかわった関係者は、ある種の予感にも似た確信を抱いていた。

彼等は死んでいない。そして、いつか必ず再び、自分達の前に立ちだかる日が来るだろう、と。

ちなみに、予想していた事だが、やはりと言つべきか、貨物を勝手に投棄した事に関しては、後から苦情を言ってくる乗客も存在した。

曰く、なぜ勝手にそのような事をしたのか。実行する前に、持ち主の了解を得るべきだっただろうと。

勝手な話である。あの状況で他に手は無かったと友哉は確信している。まかり間違えば、キンジが言っていた通りオーバーランして海に落ちていた可能性もあるのだ。更に言えば、持ち主全員の了承を取っている時間も無かった。

とはいえ、欲深な人間とは命の危機にあるときには全財産を投げ出してでも助かるうとするくせに、いざ命が助かると自分の財産の方が大事になるのだから始末に負えない。

VIP専用機だっただけあり、投棄した乗客の持ち物の中には相当な値打ち品も含まれていたらしい。サルベージ業者が連日東京港に潜って貨物回収を行っているが、まだ全ての貨物を回収するには至っていないらしい。

中には武偵校と友哉達を訴えるとまで騒ぎ立てている者もいるとか。

と、言っても、そのような恥知らずな乗客はほんの一部だけであり、大半の乗客は命が助かった事に関して感謝の意を表してくれた。また、世論も死者を1人も出さなかった事で友哉達の行動を是とする空気が大半を占めている。情報科や通信科の分析では、程なく彼らの熱は終息せざるを得ないだろうと言っていた。

「友哉君ッ」

名前を呼ばれて前を見ると、瑠香が手を振って走ってくるところだった。

瑠香は友哉に走り寄ると、その横に並んで歩きだした。

「今日はもう終わり？」

「うん。後はもう帰ろうと思っているよ」

「そっか。じゃあさ、帰る前に、何か食べて行かない？」

そう言って、瑠香はニコニコと笑顔を向けてくる。

友哉が病院での治療と関係各省からの事情聴取を終えて寮に戻ると、部屋では瑠香が待っており、笑顔で出迎えてくれた。まるでそこに友哉が帰ってくるのが当然であると言わんばかりの行動である。

その時は彼女の気丈さに感心させられたものだったが、後になってクラスメイトの不知火に話を聞き、友哉は認識を改めた。

武偵校でANA600便の不時着成功と、乗員乗客全員の無事が確認されると、瑠香はその場に泣き崩れたという。

普段は元気に振る舞っているが、瑠香は決して強い娘ではない。自分の無事を知って緊張の糸が切れたのも無理からぬことであった。

その時の礼を、まだしていなかった事を今更ながら思いだした。

「そっだね、行こうか」

「お台場に新しいお店ができたんだ。そこ行こうよ」

そう言つと、瑠香は友哉の手を取って引つ張る。

その様子が何とも微笑ましく、友哉は口元に微笑を浮かべた。

その時だった。

ドゴツ、バキツ、等、何やら尋常ならざる音とともに、何人かの男子生徒が地面に転がった。

「おろ?」

「な、なに?」

見れば、友哉は地面に転がってる男子全員に見覚えがある。確か、強襲科の生徒だったはずだ。

殴り合いなど日常茶飯事、というよりも推奨されていると言っても過言ではない武偵校である。こついつた光景も見慣れた物であるのだが、

「ったくよ、ケンカ売んのは良いが、もうちつと腕上げてから来る事は出来ねえのかよ?」

いかにも面倒くさいと言いたげに、長身の男子生徒が頭を掻きながらノツソリと出てきた。

その姿に、友哉と瑠香は思わず目を見張った。

「あ、あんたッ」

「おろ、相良?」

名前を呼ばれ、男子生徒は振り返る。

長身瘦躯の体付きに、ボサボサの頭髪。その下にある目は以前よりも獣じみた光を放ってはいないが、それでも喧嘩好きで好戦的な色は隠そうともしていない。

間違いなく相良陣だ。

ただ一つ、今までと違うのは、彼が臙脂色の武偵校制服を着ている事だった。

「な、何やってるの？」

「ああ、こいつらがいきなり喧嘩売ってきやがったからよ。ちよいと返り討ちにしてやってたところだ」

「いや、そうじゃなくて、その格好」

言われて、ようやく思いだしたとばかりに「おお」と手を打ち、次いでニヤリと笑った。

「どうだ、似合ってるか？」

「ううん。全ツ然」

「んだと、こらッ!？」

「まあまあ、それで？」

溜香の言葉にキレそうになる陣をどつどつと押さえ、友哉が先を促す。

「ま、一言で言や、司法取引って奴だ。今回の件を不問にする代わりに、武偵校に編入しろってさ。で、強襲科ってところに入ったは

良いが、いきなりこれだよ」

陣はうんざりしたように言う。

なるほど、突然の編入生。血の気の多い強襲科の学生なら腕試しをせずにはいられないところだろう。陣としてもそんな歓迎の仕方は迷惑でしかないだろう。

「まったく、なんでこんな弱っちい奴等が武偵なんだ？ もうちよつと骨のある奴はいないのかね？」

「いや、そつちかいつ!？」

瑠香の突っ込みを軽く受け流しながら、陣は踵を返す。

「まあ、そう言う訳だ。これからよろしく頼むぜ」

「こちらこそよろしく、相良」

そう告げた友哉に対し、陣はピタツと足を止めた。

「そうそう、俺の事は陣で良いぜ。ダチはみんなそう呼んでるしよ」

その言葉に、友哉は一瞬キョトンとした顔を作るが、すぐに笑顔になる。

「ああ、分かった。よろしく、陣」

「そんじゃな、今度またゆっくり飯でも食いながら話そうぜ、友哉、あとついでに瑠香もな」

「何であたしまでッ って言うか、ついでって何よついでって!？」

両腕をぶんぶん振り回す瑠香の横で、友哉はニコリと笑った。

事件は解決した物の、何やら後味の悪い結果になった感が否めない。今回の騒動が、時間を経て再燃するか否かはさておいて、一つだけ確実に言える事がある。

この騒がしくも愉快的な日常は、まだまだ続くであろうと言つ事だ。

「友哉君？」

怪訝そうな顔で自分を見つめる瑠香の頭を、友哉は優しく撫でる。

「何でもないよ。さ、行こうか」

時代時代の苦難から人々を救うのが飛天御剣流の理念だ。

その理念を体現する為にどうするべきなのか、友哉はまだ見付ける事ができていない。

だが、

大切な仲間と新しい友人、そして妹同然の戦妹。

この大切な日常を護る為なら、自分は剣を振っても良いと思う。

今は差し当たり、それで充分だと思った。

第8話「剣を振るう理由」

終わり

第8話「剣を振るう理由」（後書き）

投稿を始めて、まだ半月も経っていないのに、多くの方々からアクセスいただき、本当に嬉しいです。これからもがんばって書いていきたいと思います。

武偵殺し編はこれで終了となります。思ったよりも長くなってしまいました。本当は6話くらいで終わらせるつもりだったので、なかなかうまくいきませんね。

次は、少し時間を置いてから魔剣編に入りたいと思いますので、応援、宜しくお願いいたします。

第9話「帰って来てしまった武装巫女」

1

武偵校には三大危険地帯と呼ばれる場所がある。

爆発物を満載した地下倉庫。常に弾丸が飛び交うリアル交戦域と化している強襲科。そして、最後の一つが教務課である。

一般的に教務課と言えば、教員達が詰めている場所であり職員室の事を差す。確かにある意味、学生にとって「危険地帯」である事は間違いないが、武偵校における教務課の意味は多少異なる。

何しろ教員は、ほぼ全員が現役の武偵であり、今でも前線に立つ事の出来る連中ばかりである。

例えば強襲科担当の蘭豹。彼女はかつて香港で無敵の武偵と恐れられ、その凶暴さゆえに各地の武偵校をクビになり転職を続けていたと言つ過去がある。着いたあだ名が「人間バンカーバスター」であるから、その脅威振りは推して知るべしと言つ物だ。

尋問科の綴梅子は、その尋問技術に置いて国内でも五指に入ると言われる存在だが、そのドS振りは内外に知れ渡っている。彼女は尋問中にとんでもない事をするという噂があるが、その内容に関しては誰も知らない。受けた事のある人間も、思い出したくないと言わんばかりに頑として口にしなかった。

一見すると無害そうに見える、探偵科の高天原ゆとりも、現役時代は凄腕の傭兵であったと言うから侮れない。

その一種魔窟とも言つべき武偵校教務課に、

緋村友哉せむらゆうざいは来ていた。

椅子に座らされたまま、緊張の為に全身が強張っているのが判る。

何やら、全方位から突き刺さるような殺気が溢れているのは、できれば気のせいだと断じてしまいたいが、残念な事に気のせいではない。

常在戦場をモットーにする武偵にとって、たとえ如何なる場にあつても気を抜く事は許されない。それがたとえ、味方のテリトリーの中であつても、だ。

とは言え、学生の身分でこれを完璧に実践できる人間は少ない。友哉ですら、未だに至っていない領域である。知り合いでできるとすれば、先頃転校してきたSランク武偵、神崎・H・アリアか、狙撃科の麒麟児レキくらいのものだろう。

そんな緊張の極致にある友哉を前にして、担任の高天原ゆとりはニコニコと微笑んで書類の入った封筒を差し出して来た。

「はい、じゃあ、緋村君、これをお願いしますね」
「あの、これは？」

なんの説明も無しに、書類だけ渡されても困る。

そもそも、午前中の一般教養科目を終えて昼に入ろうとしたところ、友哉はゆとりに呼びとめられて教務課まで連れて来られたのだ。

正直、ここに来るまでは何やら連行されているような気分になり、周囲からの視線も痛々しかったのだ。

それで、渡されたのが、今手元にある書類である。いきなり呼び付けられて、渡されたこの書類は一体何なのか？

「それは教務課直令の任務に関わる書類です。学校では見ないで、寮に帰ってから見てくださいね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ニツコリと微笑むゆとりを、友哉はため息交じりに眺める。

どうやら、この封筒の中身が碌な内容でない事だけは充分に理解できた。

見渡せば、殺風景な部屋の外観が広がっている。第四女子寮は学園島の中でも特に外れに位置する場所にあり、入居者も少ないが、

それは却って好都合だった。

ショートポニーに結ったセミロングの髪を靡かせて、武偵校の女子制服を着た少女は部屋の中に佇んでいる。

家具も何もない、無機質無く浮くを放つ空間。

一応、ベッドは隣の部屋に完備されているが、布団が無い為、寝るには甚だ不便と言わざるを得ない。

だが、別に気にするような事ではない。元々、そう長居する訳でもないのだから。

今回は潜入と言う任務上、ある程度体裁を整える必要がある為、入寮と言う措置を取ったが、本来なら部屋など、取り敢えず雨風を凌げるだけでも充分である。

不備は無い。既に転校の手続きは済ませた。登校は明日からになる。

ポケットを探り、手帳を取り出す。

内側に張られている写真の顔は相変わらずの無表情。「笑った方が可愛いよ」とは、よく知り合いの女子に言われている事だが、そもそも笑顔と言う物がどうすればできるのか判らないのだから、作りようが無かった。

と、その時、投げ出しておいた携帯電話のヴァイブレーションが、床と擦れあって耳障りな音を奏でた。

手に取って液晶を眺める。相手は依頼人からだった。

「……もしもし」

《私だ。どうやら、無事に潜り込めたようだな》

いつもの硬い口調は、間違いなく依頼人の少女からだった。

「問題ありません。準備は滞りなく完了しました」

《こちらも順調だ。つい先程、ターゲットの帰京も確認したところだ。明日、お前の転校を待って、行動を開始する》

今回の任務は、彼女の作戦を支援し、余計な存在を排除する事にある。

《連中も、私達の存在には気付いていないだろう。常に先手を打っていけば、状況を優位に進められる筈だ》

頼んだぞ。

そう言つと、相手は電話を切った。

携帯電話を再び床の上に投げ出すと、何をするでもなく床に座ってぼーっと壁を眺める。

遠くの東京港から聞こえる汽笛の音。それだけが、静寂を取り戻した部屋で唯一のBGMだった。

第三男子寮の自室に戻ると、友哉は鞆を床に下ろし、体をソファに投げ出した。

中性的と他人からは呼ばれ、人によつては少女と間違われる事も多い顔は、今、疲れ切った表情を見せていた。

原因は言つまでも無く、魔窟で強いられた精神的苦痛にあつた。

魔窟に教務課。全く持つて言い得て妙と言わざるを得ない。好んで近付きたいと思う人間がいない事からも、同義語と呼んで差支えは無いだろう。

いつそのまま、ソファに身を委ねて眠つてしまいたい。一瞬そう考えた友哉の脳裏には、それが何とも魅力的な提案に思えた。

とは言え、だらけている訳にもいかない。

後ろの一房だけ伸ばし紐で縛った赤茶色の髪を掻き上げると、友哉はだらけさせていた上半身を起こし、鞆の中に突っ込んでおいた封筒を手を取った。

一般の学校に宿題が出るように、武偵校でも教務課から任務と言つ形で宿題が出される事がある。今回もその類だった。

封筒の中から書類を取り出し、一読する。

そこに書かれていた内容に、友哉は僅かに目を細めた。

内容は、とある手配犯に関する物だった。

《デュランダール》

その名前は、ある種の屋気楼にも似た不明確さを持って存在していた。

正体は不明。存在は不確か。

その犯行目的とは、超能力を有する武偵、すなわち超偵の誘拐にあるとされている。実際、デュランダールが関わったとされる事件において、多くの武偵が失踪しているのは事実だった。

だが、上記から判るように、デュランダールは非常に不確かな存在である。

デュランダールの正体は誰も知らない。姿を見た者もない。それゆえ、一種の都市伝説の類として捉えられており、その存在を疑問視する声も大きい。

友哉は書類をめくりながら、読み進めていく。

書類は二部あり、片方は諜報科から提出されたレポートと、もう片方は超能力捜査研究所が提出した予言に関する資料だった。

諜報科の報告書にはガセが多い事で有名である。諜報科が行う諜報活動とはそもそも、自身の五感で見聞きした物を持ち帰り報告する事にある。媒体を相手にする情報科や通信科と異なり、その報告書には多分に主観が交じり不確かとなってしまう事も多いのだ。また、彼等の特性ゆえか、巧緻よりも拙速を重んじる傾向にある。せつかく掴んだ情報が既に時期遅れだった、では何の意味も無い。ならば、多少不確かであっても、情報の鮮度を優先してしまうのは否めなかった。

一方で超能力捜査研究科の方はと言えば、こちらは諜報科とは別の意味で不確かである事が多い。何しろ超能力。一般人には殆ど認知できない分野である。勿論、先日のハイジャック時に相對した峰・理子・リユパン4世の例を見る通り、超能力者と言う物は確かに存在している。しかし、だからと言って、それを一般人に信じる言うのは、少々無理があると言わざるを得ない。特に今回の予言とやらが仮にそれが真実であったとしても、それを確かめる術は、少なくとも友哉には無い訳である。

つまり、この依頼自体が不確かかつ、現実味の薄い代物であると言う事である。

だが、これが教務課から回された任務である以上、動かない訳にはいかないのも事実である。

この報告書によれば、デュランダルは既に武偵校近辺に潜伏している可能性は高く、その行動開始が近いとの事。そして今回、デュランダルが狙うターゲットは、

「星伽白雪」

報告書にある名前を、友哉は声に出して読んだ。

星伽白雪。友哉の友人である遠山キンジの幼馴染であり、友哉とも多少縁がある少女である。

偏差値75オーバーの才媛であり、現武偵校生徒会長を務め、バレー部、茶道部、華道部の部長を務めている。

そして超能力捜査研究科のエース。

正に、デュランダルが狙うとしたら、これほどの逸材はあるまい。

「星伽さんは確か、そろそろ強化合宿から帰って来る筈だったね……」

つまり、時期は一致している。そう考えれば、デュランダルの存在は決して眉唾ではなくなる可能性が出て来る。

友哉は読み終えた資料をテーブルに投げ出し、ソファーに身を預けた。

姿無き超偵誘拐犯。デュランダル

それが次の敵となる。

鋼鉄をも切り裂く剣を持つと言われるデュランダル。しかし、奴と戦うためには、まずはデュランダル本人を戦場と言う名の舞台に引きずり出す必要がある。

ちょうどその時、扉が開く音がして、パタパタという足音が聞こ

えて来た。

「や、ごめんね、友哉君。諜報科の課題が長引いちゃった。すぐ夕飯作るから」

「そう慌てなくても良いよ。時間はまだあるしね」

入って来た四乃森^{しのもりるか}瑠香に、友哉はそう言って笑い掛ける。

友哉の戦妹であり、幼馴染でもある瑠香は、こうして夕方になると友哉の部屋にやってきて食事を作る毎日を送っていた。

彼女には感謝の言葉も無い。本来なら学校が終われば、後は自分の時間として有意義に使うべき所を、こうしてわざわざ男子寮まで来てくれるのだから。

この年下の幼馴染が友哉に好意を抱いており、こうして毎日のように足繁く通っているのもその証左なのである。もっとも、肝心の友哉は鈍感過ぎて、その事実には全く気付いていない事が、少女にとってもどかしい限りなのであるが。

ちなみに、この状況を見た周囲の人間からは「通い幼妻」等と呼ばれている事を、当の2人は全く気付いていなかった。

夕飯は瑠香に任せておけば問題無い。そう思い、もう一度資料に手を伸ばしかけた時だった。

「あっ」

キッチンの方で、瑠香が声を上げた。見れば、冷蔵庫のふたを開けて、苦い顔をしているのが見えた。

「どっしたの？」

「料理の材料、買ったくの忘れちゃった」

そうだったのか。と、友哉は頭を掻きながら考えた。

最近では食事に関しては、殆ど瑠香に任せ気味であった為、買い置き食材に関して、友哉は全く気を払っていなかった。

「しまったな……」

瑠香の後ろから覗き込みながら、友哉は頭を掻いた。これは完全に友哉の落ち度だ。いくら瑠香の料理がおいしいからと言って、彼一人にまかせっきりになっていた感は否めない。

今から食材を買いに行くという手もあるが、流石に買って帰ってきて、それから料理するとなると手間もかかってしまう。

「しょうがない。今日はコンビニで弁当でも買って来て食べよう」

「うう、しょうが無いか」

友哉の食事を作れなかった事がよほど悔しいのだろう。不承不承と言った感じに頷きながら、瑠香はエプロンを外す。

「ま、たまには良いと思うよ」

そう言って友哉が励ました時だった。

ドゴオオオオオンッ

「おろつ!?!」
「キヤアツ!?!」

突然の轟音と震動に、思わず2人は声を上げた。

敵襲かつ!?!?

思わず二人がそう思ったのも無理からぬことである。その衝撃は第三男子寮全体を震わせるほどだったのだ。

だが、やがて壁越しに隣の部屋から尋常ならざる物音が聞こえてきた。

隣は友哉の友人である遠山キンジの部屋である。どうやら現場は、キンジの部屋からであるらしい。

2人は顔を見合わせると、恐る恐ると言った感じに隣の部屋を覗いてみた。

そこには、

修羅の巷が広がっていた。

「天誅ウウウウウ!?!」

日本刀を振り翳した1人の巫女さんが、大上段から斬りおろしている所だった。

そしてその刃の向かう先には、

ピンク色のツインテールをした少女、神崎・H・アリアがいた。

「な、何なのよ、アンタは!?!」

巫女さんの一撃を回避しながら、アリアが焦ったように叫ぶ。

そこで、振り向いた巫女さんの顔が友哉達の視界に入った。

「ほ、星伽、さん」

「あわわわ」

友哉は額に手をやり、瑠香はその友哉の背に隠れるようにして震えている。

流れるような黒い髪に、純正の日本人形を思わせる整った顔立ち。

武偵校現職生徒会長にしてキンジの幼馴染、星伽白雪が鬼の形相で刀を振り回していた。

一方で標的になっているアリアも、その素早い身のこなしを利用して白雪の攻撃から逃げ回っている。

この状況から、二人は大体の事を察した。

白雪はキンジに対し、並々ならぬ好意を抱いている。二人は幼馴染であるから、過去に様々な事があったのであろう。だが、問題なのは白雪のキンジに対するそれは、ある種常軌を逸したレベルであると言つ事。

過去、好意の有無にかかわらずキンジに近づこうとした女子は、

ほぼ例外なくこの白雪にボコボコにされてきたというのだから恐ろしい限りである。

そんな白雪が、恐山からの強化合宿にから戻った。そこでキンジの部屋にいるアリアを発見した。と、くれば後は想像に難くない。

(アリア+白雪・キンジ) × i n キンジの部屋

という計算式がいかなる惨状を現出するか、その答えが、今日の前で繰り広げられていた。

既に家具と言う家具は叩き壊され、壁は全て切り裂かれている。家主であるキンジの安否も判らない状態だ。

「このっ、いい加減にしなさい!!」

アリアもついに武器を抜いた。

2丁のガバメントを白雪に向けて発砲する。

放たれた弾丸が、白雪に命中するか。そう思われた瞬間、

白雪は飛んで来た2発の弾丸を刀で弾き飛ばした。

これには友哉も啞然とする。

アリアの弾丸は2発ほぼ同時に放たれた。それを白雪は一瞬にしてはじいて見せたのだ。仮にこの2発が多少のタイムラグを付けて放たれたのなら、友哉にも同じ芸当ができない事も無いが、流石に同時に2発の弾丸を叩き落とすのは難しい。

「あんだ、それ、超偵……………」

弾かれたアリアも、目を丸くしている。

これこそが星伽白雪の力、その片鱗である。普段の白雪はかなりの運動音痴として知られているが、こうなった時の彼女は強襲科の学生をも上回る戦闘力を発揮する。

「緋村君、瑠香ちゃん、この女を後から刺して!!」

「友哉、瑠香、あたしを援護しなさい!!」

2人からの援護要請に、友哉と瑠香は互いに顔を合わせたまま立ち尽くすしかない。

「どうする?」

「どうしよっか?」

正直、今すぐ何も見なかった事にして回れ右をしたい気持ちでいっぱいだったが、流石にお隣さんでこんな騒ぎが起きている中でそれはできなかつた。

そうしている内に、局面は動く。

アリアのガバメントはついに弾切れを起こし、スライドが後退したまま固定された。

その瞬間を逃さず、白雪が斬り込んで来る。

「覚悟オオオオオ!!」

「クツ、させるかア!!」

叫んだ瞬間、アリアは振り下ろされた刃を両手掌で挟み込んで受け止めた。

真剣白刃取り。

「す、すごい……」

瑠香が思わず感嘆の声を漏らした。

友哉の実家の道場では、白刃取りを応用した技を教えているので、別段珍しくはないのだが、実戦で成功させている所を見たのは初めてである。

だが、まだ終わっていない。

「く、く~~~~」

「こ、この、バカ女~~~~」

白雪の方がアリアより頭身が高い為、上からのしかかるような形で刃を押しつけて来る。

対してアリアも必死に抵抗しているが、徐々に体が沈み始めた。

次の瞬間、アリアは白雪に足払いを掛け、同時に握力が緩んだ所で刀をもぎ取り弾き飛ばした。

だが、まだ終わっていない。

武器を失った白雪だが、すぐに袖下から鎖鎌を取り出して分銅を投げつけた。

対してアリアも背中から二本の小太刀を抜いて防ぐ。

アリアの小太刀に鎖を巻き付けたまま、白雪はジリジリと彼女の体を引きつけて来る。

「この、泥棒猫、キンちゃんの前からいなくなれエエエ!!」

「いい加減にしなさい。そんなんじゃないって言ってるでしょ!!」

互いの距離が詰まり、再び斬り結ぶ二人。

両者一步も譲らないまま、混戦模様はその後10分近くに渡って繰り広げられた。

「な・・・何て・・・しぶとい・・・泥棒・・・猫」

「あ、あんたこそ・・・とつとつ・・・くたばり・・・なさい・・・」

アリアと白雪は、互いの背中に寄りかかりながら、荒い息をついている。

結局勝負は、両者決定打を奪えないまま、互いの体力が尽きるまで行われた。

その結果がこれである。

「何とまあ………」

部屋の惨状を目の当たりにして、友哉は言葉が出なかった。

家具と言う家具は破壊し尽くされ瓦礫の山と化している。ここがつい先ほどまで人間のクラス場所が人の暮らす部屋であったと言うのは想像する事すらできなくなっていた。

その時、部屋の窓がガラツと開かれた。

「お前等、気は済んだか？」

入って来たのは部屋の主である遠山キンジだった。どうやら、二人が戦っている間、外に避難していたようだ。賢明な判断である。誰だって好き好んで戦場にいたいとは思わないだろう。

「キンちゃん様!!」

白雪が妙な言い回しと共に飛び上がると、ガバツとキンジの前で正座し、深々と頭を下げた。

「申し訳ありません、キンちゃん様。私に勇気が無かったばかりに、アリアなんかとっ」

「それ以上勇敢になられても困るわよ!!」

立ち上がって横合いから抗議するアリア。

対して白雪も、負けじと振り返って言い返す。

「キンちゃん様と恋仲になったからって、良い気にならないで、この毒婦!!」

毒婦とはまた、古い言い回しである。今時こんな言葉を使う人間など白雪くらいのもんじゃないだろうか。

だが、言われてアリアは顔を真っ赤にする

「ば、馬鹿言うんじゃないわよ。恋愛なんか下らないッ　あたしは恋愛なんかに興味ないし、する気も無い!!」

「じゃあ、キンちゃんとはどういう関係なの!？」

尚も追及の手を緩めない白雪。ここでアリアが、ただの仕事仲間だ、とでも答えれば事は全て丸く収まるのだが、

「ど、奴隷、そう、キンジはあたしの奴隷なんだから!!」

「おろ……………」

「あちゃー」

友哉と瑠香は、揃って額に手をやった。よりによって、選んだ言葉がそれかい。

一方の白雪はと言えば、何を想像したのか、こちらも顔を真っ赤にしている。

「そ、そんな、奴隷だなんて。そんなイケナイ遊びまでキンちゃんと一緒にするなんてッ」

「な、ななな、何バカな事言ってるのよ。違うわよ!!」

「違わない!!　そりゃ、私だって、その逆なら想像した事もある

けど」

きつと、今の白雪の頭の中では、キンジの手によって裸に剥かれ、言葉では言い表せないような縛られ方をした自分が想像されている事だろう。

見かねたキンジが、白雪の横に立った。

「白雪、俺とアリアは武偵同士、一時的にパートナーを組んでいるだけだ」

「ほ、本当？」

「本当だ。俺の言う事が信じられないのか？」

キンジの真剣な眼差しが白雪を見据える。たちまち白雪の雰囲気から険が取れるのが判る。キンジに好意を持つ白雪を黙らせるのに、これほど効果のある物は無かった。

「そんな事無い。信じるよ。信じてます」

白雪は頬を赤く染めながら、恥ずかしそつにキンジからそむけた。

良かった。これでようやく騒ぎも収まるだろう。

一同が胸をなでおろす。

だが、白雪の問いかけは、まだ続いていた。

「じゃ、じゃあ、キンちゃんとアリアは、そ、そつ言う事は、して
いないのね？」

「そつ言う事？」

「そ、その、キス……とか」

パ~~~~プ~~~~

どこかで、豆腐屋のラツパが鳴り響いた。

って言うか、いたのか豆腐屋、学園島に。

と言う突っ込みを入れる事も無く、キンジとアリアは顔を赤くして視線を逸らしている。

その反応が如実に真実を語っている。

『したのかっ』

『いつの間に?』

心の中で友哉と瑠香が同時に突っ込みを入れた。

「……………し……た……の……ね」

地獄から這い上がって来るような声とともに、白雪が座った目をする。

振り出しに戻る。戦火が再び繰り返されるのか。

そう思った時、運命の女神が立ち上がった。

「た、確かに、そう言う事はしたけど、だ、大丈夫だったの!!」

アリアが赤い顔のまま言う。

「後で判った事なんだけど、こ………」

「こ?」 キンジ

「こ?」 友哉

「こ?」 瑠香

アリアは胸を張り、自信満々に言い放った。

「子供は、できてなかったから!!」

パ~~~~~プ~~~~~

また、豆腐屋のラツパが聞こえて来た。

「はづつ!?!?」

白雪が卒倒して、その場に崩れ落ちる。

「し、白雪!? って言うかアリア、何で子供なんだよ!?!」

白雪を抱き起こしながら抗議するキンジに、アリアはガオーツとばかりに食ってかかる。

「こ、この無責任男。あたしは、あれからけっこう悩んだんだからね!!--」

「何に悩んだんだよ!?!」

「だ、だって、キスしたら子供ができるって、昔お父様が言ったんだもん!!--」

どうやらホームズ家では、相当いい加減な性教育を娘に施していたらしい。

「き、キスくらいで子供ができる訳ねえだろ!!--」

「じゃあ、どうやったらできるのか教えなさいよ!!--」

「お、教えらえっか、バカ!!--」

「どうせ知らないんでしょ!!--」

「知ってるけど、教えられっか!!--」

言い争う二人を背に、友哉と瑠香はキンジの部屋を後にした。これ以上は巻き込まれるのも馬鹿馬鹿しいと思ったからだ。

「.....瑠香」

「何?」

「今日の晩御飯は、湯豆腐とかが良いんじゃないかな」

「そだね、お手軽だし、美味しいし」

よし、これで晩御飯は決まった。これはとても素晴らしい事だと思う。

尚も続く喧騒を背中に、二人は友哉の部屋へと戻って行った。

第9話「帰って来てしまった武装巫女」

終わり

第10話「時期外れの転校生」

1

第一次お隣大戦（命名：瑠香）から一夜明け、友哉とキンジは揃って登校していた。

当事者であるキンジは体のあちこちに軽傷を負っていたが、取り敢えず動けない程ではなかったらしい。

友哉はといえば、取り敢えずこれからの事を考えなくてはいけないので、キンジ達の事はばかりに気を向けている訳にもいかなかった。

デュランダルがもし本当に実在すると言うならば、多くの犯行を行って、未だに誰の目にも止まっていけないと言うのはおかしな話である。

本当に存在しない幻なのか。それとも、常識はずれなほど巧妙に行動しているのか。

デュランダルを戦場に引きずり出すとしたら、友哉1人の手には余るかもしれない。諜報科と、できれば探偵科、それに情報科の人間に協力してもらいたいところだ。

諜報科は戦妹である瑠香がいるから何とかなるとして、問題は探偵科と情報科の方だ。何人が知り合いはいるが、調査依頼を頼めるほど親しい友人となると、キンジか、あるいは先頃武偵殺しとして剣を交えた峰理子くらいのもだった。その理子は学園を去り、キンジはあまり武偵活動に積極的ではないときは、頼める友人は他に思いつかなかった。情報科に至っては、友人と呼べる人間はほとんどいない状態である。

『仕方が無い。この件は後でまた考えるとしようかな』

そう心の中で呟くと同時に、チャイムが鳴り担任のゆとりが入って来た。

「おはようございます、皆さん。今日は皆さんに、新しいお友達を紹介しますね」

そう言ってゆとりは、廊下の方に視線をやる。

次の瞬間、教室の中は感嘆の声に包まれた。

小柄な少女である。

背はレキ程度。かなりほっそりした印象がある。セミロング程度の長さの黒髪を、頭の後ろでショートポニーに結び上げている。前髪の下から見える大きな瞳は、まるで何の感情も映していないかの

ように冷たい光を宿していた。

全体的に小ささを感じる少女である。

ゆとりに自己紹介を促され、コクリと頷くと前へ出た。

「瀬田茉莉、です」

少女特有の高さが混じっているが、それを無理やり低く抑えたような声。ふとすれば聞きそびれてしまうと思うほど小さな声である。

茉莉はそれ以上しゃべろうとせず、真っ直ぐに前を向いたまま黙っている。

「あの、それだけ、かな？」

困ったように促すゆとりの言葉を受けて、更に口を開く茉莉。

「よろしく、お願いします」

更に一言だけ。

曰く言い難い空気が流れ込む。

「そ、それじゃあみんな、仲良くしてあげてね」

間が持たないと思ったのか、ゆとりは早々に自己紹介を打ち切りに掛った。

「じゃあ、席は、緋村君の隣に」

「はい」

友哉の隣の席は空いた状態になっている。

茉莉は無言のまま頷くと、トコトコと友哉の隣に歩いて来て腰を下ろした。

「よろしく」

「こちらこそ、よろしくね」

茉莉の着席を確認してから、ゆとりがHRの連絡事項を始めた。

「皆さん、もうすぐアドシールドが始まります。アドシールドは各国から様々な人達がこの学校に集まりますので、皆さんも武偵校の生徒として恥ずかしくないように行動してくださいね」

アドシールドとは武偵の国際競技会だ。射撃や格闘など様々な分野の代表が、その技術を競い合う事になる。言ってみれば武偵オリンピックとも言つべき物である。

各国から様々な人物がこの学園島に集まり、見物客も相当な物となる。気を隠すには森の中とはよく言った物で、仮にデュランダルが活動するなら、最適な空間となる。

その時、

「おい、緋村、お前、アドシールドで何か競技出るのか？」

車輛科の武藤剛気が話しかけて来た。ガツシリした体つきをしており、ふとすれば体育会系の爽やか男子に見えなくもない。ちなみ

に決して悪い奴ではないのだが、性格がガサツである為女子にもてないという悲しい一面があったりする。

「出ないけど、どうしたの？」

幸か不幸か、友哉はどの競技からもお呼びが掛っていない。よってアドシールド当日は暇を持って余す事になりそうだったのだが、

「ならよ、俺達と一緒にバンドやらないか？」

バンドとは恐らく、閉会式でチアと一緒に行くバンドの事だろう。それを武藤はやると言っているのだ。そう言えば、瑠香がチアガールをやると言っていた気がする。ついこの間、本番で着る衣装を、友哉の部屋で着て見せてくれたのだが、なかなか似合っていた。

「『俺達』って？」

「俺と、キンジと不知火。お前を合わせると4人だよ」

既に友哉が頭数に入っているらしい。

「僕も、競技には補欠で登録されているけど、多分出番はないだろうからね」

そう言って来たのは、強襲科の不知火亮である。こちらは端正な顔立ちと優しい性格から女子からの人気も高い。実力も射撃、ナイフ、格闘全てにおいて総合力が高く、信頼性の高いオールラウンダーと言える。

「まあ、どうせ当日はやる事無いと思ってたところだし。良いよ」「よっしゃ、これで頭数は揃ったぜ。あとでやっぱやめるなんて言

「つたら轢いてやるからな」
「いや、言わないよ」

苦笑しながら手を振る友哉。

やがてHRも終わり、一時限目の授業が始まる。武偵校では午前中に一般教養の授業を行う。今日は英語の授業からだ。

「それじゃあ、授業を始めます。あ、緋村君、瀬田さんは教科書がまだ来ていないので、緋村君、見せてあげてね」

「あ、はい」

そう言うと、友哉は茉莉と机をくつつけた。

「すみません」

「いいよ、気にしないで。お隣同士、仲良くしないとね」

そう言うと、授業のページを開いた。

そんな友哉の顔を、茉莉はジッと眺めて来る。

「ん、どうかした？」

「……いえ、別に」

そう言うと、茉莉は前を向いて自分のノートを開いた。

そんな茉莉の様子を眺め、不思議な娘だな、と思いながらも、友哉も自分のノートを開いて授業に集中した。

相良陣は2年A組の教室に入ると、その異様な空間と化した場所に、思わず二の足を踏んだ。

「うおっ、何だこりゃ？」

友人である緋村友哉に呼び出されてやってきたのだが、その友人の机周辺は黒山の人だかりができていた。

一体何が起きたのか、恐る恐ると言った感じに近づこうとすると、横から声を掛けられた。

「よう、相良、お前何やってんだ？」

別のクラスの人間がいるのだから、嫌でも目立ってしまう。知り合いの怪訝そうな声に振り返る。

「おいおい遠山、何なんだこれ？」

「転校生だよ。で、さっきからそいつを囲んで質問攻めってわけだ。まったく、騒がしい限りだよ」

うんざりした調子で言うキンジ。陣とキンジは友哉を介して知り合いとなったが、妙にウマの合う所があったので、こうして会話する程度の仲にはなっていた。

「ふうん、それで、友哉はどうした？ 俺はあいつに呼ばれたんだ

が、」「
「緋村なら、あの中だよ」

キンジは黒だかりの方を指差す。

考えてみれば、友哉の席もあのあたりだった気がする。

「こりゃ、今は無理かね」

「ああ、やめといた方が良い」

仕方が無い。友哉の用事もすぐに聞かなければいけないと言う訳でもないだろうし。

何より、あの押しくら饅頭状態の場所に好んで入って行きたくなかった。

「そんじやな、遠山。友哉にはよろしく言っといてくれ」

「ああ、判った」

そう言つと、陣は自分の教室へと帰って行った。

午前中は大変な騒ぎであった。

転校生と言う存在に並々ならぬ興味を持つのは武偵校も一般校も変わりはない。

一時限目の授業を終えると、早速A組の生徒は茉莉の机を完全包囲し、質問の集中砲火を浴びせた。

問題なのは机をくつつけていた関係で、友哉の席もその包囲網の中に組み込まれてしまった事だ。

それが二、三時限目にも続いたのだから溜まったものではない。

そして質問と言うのが、また武偵高らしさが爆発していた。

「どこの科に所属しているの？」

「武器はなに使ってたの？」

「今までどんな仕事した事ある？」

「死んだ事ある？」

等々、物騒な質問のオンパレード。て言うか、最後のは明らかにおかしいだろ。

そんな訳で昼休み。

飛天御剣流の極意に従い先手を打った友哉は、包囲網が形成されるよりも早く教室を脱出し食堂に来ていた。

「まったく、疲れる事この上ないね」

ぼやくように言いながら券売機の方へと向かう。

今日は瑠香の弁当も無い為、食堂で何か食べようと思った。

その時だった。

「こちらが食堂ですか」

聞き覚えのある、それでいて新鮮さを感じる声が背後から聞こえ、思わず振り返る。

そこには件の転校生、瀬田茉莉が立っていた。

「えっと、どうしたの？」

「昼休みに入って緋村君が出て行くのが見えたので、恐らく食堂に行くものかと思いついてきました」

淡々と言う茉莉。どうやら、教室から後を付けて来たらしい。

「よく、みんなに捕まらなかったね」

「造作もありません」

事も無げに茉莉は言う。

とは言え、ここで突っ立っているのは非常に迷惑である。現に2人の背後に立つ男子生徒が苛立たしげに舌を打つ音が聞こえた。

「じゃ、取り敢えず、何か買って食べよう」

「はい」

友哉は照り焼きチキン定食を頼み、茉莉はきつねうどんの食券を

買うと、カウンターで料理を受け取り席に着いた。

向かい合って席に座ると、茉莉は無言のまま割り箸を持って食べ始める。しっかりと箸を持って食べる茉莉だが、華奢な外見のせい、小動物が食事をしているように見えて何ともほほえましい。

「・・・何ですか？」

そんな友哉の様子を不審に思ったのだろう。茉莉が顔を上げて見詰めて来る。

「いや、何でもないよ」

そう言って友哉も食事に箸を付けようとした。

すると、

「あれ、友哉君」

背後から声を掛けられて、振り返ると、瑠香が何人かの友人を連れて立っていた。どうやら、彼女も食堂に食事しに来たらしい。手にはチャーシュー麺を乗せたお盆を持っている。

「友哉君も来てたんだ。って言うか、あれ、その娘・・・」

「ああ、彼女は転校生で、」

「やっぱり、昨日引越してきた人!!!」

瑠香の意外な反応に、友哉は驚いて2人の顔を見た。

「あれ、2人、知り合い？」

「私が入寮した部屋の隣は、四乃森さんの部屋です」

うどんを啜りながら答える瑠香の顔を、友哉は意外そうに見つめる。妙なところで縁は繋がる物である。

「そっか、友哉君のクラスに転校したんだね。これからよろしくね」
「宜しくお願ひします」

友達に断って、瑠香は茉莉の隣に座る。

『あれ……』

そこで友哉はある事に気が付き、意外そうな面持ちで瑠香を見た。

瑠香は先輩である茉莉に対してタメ口を聞いている。意外に思いかもしれないが、瑠香は礼儀には気を使う方だ。これは実家が旅館を営んでいる関係からなのだが、初めは年下だと思っていたアリアにも今は敬語で接しているくらいだ。上級生で瑠香がタメ口を聞くのはせいぜい友哉くらいの物だ。

その瑠香が茉莉にはタメ口で接している。それが友哉には意外だった。

「茉莉ちゃん、学科は何？」

「探偵科です。四乃森さんは諜報科ですか？」

「うん、そうだよ」

女の子同士、会話は弾んでいる様子だ。

そこでふと、友哉はある事を思いついて口を開いた。

「二人とも、ちょっと僕に協力してくれないかな」

そう言った友哉に、2人はキョトンとした表情を作った。

丸橋讓治まるはし じょうじは街を歩いていれば非常に目立つ男である。

何しろがたいが大きい。180センチ以上ある身長に、ガツシリした体付き。その筋肉質の体はまるで戦車のような印象を受ける。

顔つきもいかつく、まるでお伽噺に出て来る鬼のような風貌をしていた。

指定されたホテルの部屋に入ると、相手も気配を察したのか、奥の方から声が聞こえて来た。

「やあ丸橋君、待っていましたよ。さあ、入ってください」

誘われるままに奥に行くと、ベッドに横たわって上半身だけ起こした、仮面の男が讓治に手を振っていた。

男の名は由比彰彦ゆい しょうひこ。裏の世界では仕立屋というコードネームで知られ、他者の作戦を支援して報酬を得る事を生業としている人間である。

先頃、武偵殺し事件に介入して世間を騒がせた事は記憶に新しい。

「具合はどうだ？」

「まあ、ぼちぼちと言ったところですよ」

そう答える彰彦の声には、まだ張りが戻っていない。どうやらまだ本調子ではないようだ。

「お前らしくも無いな」

「まあ、風邪は拗らせると厄介ですからね。治るには、もう少しかかりそうですよ」

彰彦はハイジャックしたN600便から逃走するのに、スーツの下に格納できるパラシュートを用いた。

ハイジャック機の中で友哉に語った通り、彰彦はどんな作戦であっても常に万端の準備を整えて行動するようにしている。万が一の時の逃走手段も例外ではない。これは彼が臆病ゆえではない。そう言った備えをする事は彼にとってある種の信念であり、それを怠った者は必ず失敗すると信じていた。

とは言え、パラシュートで降下したのは4月の東京湾。それも折からの嵐である。連絡を入れた譲治が救出に来るまで4時間近くも海面を漂っていたせいで、すっかり風邪をひいてしまった。

「いや、みっともない姿をお見せして申し訳ありませんね」

「構わん、それより、仕事の話だ」

譲治が彰彦の仲間として行動し始めてから大分経つが、出会った頃からこのように素っ気ない性格であった。こればかりは変える気が無いらしい。

「デュランダル女史から連絡がありました。本日より行動を開始するとの事です。彼女の今回の目的は、この娘」

そう言っつて彰彦は一枚の写真を差し出す。そこには、日本人形のような清楚さを漂わせる一人の少女が立っていた。

「巫女か」

「はい。名前は星伽白雪。武偵校では期待のステルス、すなわち超能力者だそうです」

譲治はもう一度、写真の中の白雪に目をやる。見るからに華奢な体付き。とても荒事に向いているようには見えないが、相手が超能力者であるなら、外見で判断する事はできない。

「判った。それで、おれはどうすれば良い？」

「デュランダル女史への支援役として、既にあの娘を潜り込ませています。それとは別にもう一手打ちます。間もなくアドシールドが始まり学園島は結構な賑わいを見せる事になるでしょう。あなたはそれに乗じて学園島に潜り込み、彼女の行動開始に合わせて、陽動作戦をお願いします」

「俺に潜入任務か、向かんと思うが？」

何しろこの容貌である。どこにいても目立ってしまう。武偵校なら絶対に諜報科と探偵科には入れない人物である。

その言葉に、彰彦は仮面の奥で笑みを見せた。

「なに、心配はいりません。時間はそう長くありませんし、それにアドシールドの見物に来た客だと言えば誰も疑ったりしませんよ」

それに、と彰彦は続ける。

「あの娘は、あくまで私達にとって協力者に過ぎません。私がこの状態である以上、誰か1人、確実性の高い手駒を送り込んでおきたいのですよ」

「それが俺か」

「ええ、お願いしますよ」

そう言って彰彦は再びベッドに横になった。

譲治は写真を胸ポケットに仕舞い込んで立ち上がるうとした。

「ああ、そつだ」

そこで彰彦が呼びとめる。

「作戦に当たって、彼には充分注意してください」
「彼？」

彰彦は横になったまま言った。

「緋村友哉君です」

その名前は譲治も聞いていた。彰彦がその少年に敗北した事も。

「それ程か？」

「剣先にはまだ迷いが見られました。それに、まだまだ発展途上な面も見られます。しかしそれでも尚、私と互角以上に戦った相手です。油断はできません」

そう告げる彰彦の瞳は、仮面の奥で鋭く光っているのが判る。

この男がそう言うのだから、誇張や偽りはない。長い付き合いで、譲治にはそれが判っていた。

「判った。憶えておこう」

「お願いします」

そう言うと、彰彦は布団をかぶり直す。

それを見て、譲治は部屋を後にした。

3

「イテテテ」

キンジは自分の頭を押さえながら、しかめっ面をしている。

話を聞くところによると、どうやらアリアがまた何かを始めたらしい。その巻き添えと言う形で付き合わされてしまったらしい。

「大丈夫？」

友哉が心配そうに尋ねると、何でもないと云う風に手を振って来る。

既に時刻は下校時間。二人の周りにも同じように鞆を下げて歩いている武偵校生徒が何人かいる。

結局、今日は陣に会う事ができなかった。デュランダルを焙りだすには、まず情報の面から当たらなくてはならない。

情報科に知り合いがない友哉だが、人海戦術を駆使すれば情報科と同じ行動ができる筈。その点で行けば陣は元不良グループのリーダーと言っただけあり、お台場周辺に顔が効くのだ。

デュランダルがどのような手段で超偵をさらうにせよ、実行の段階では必ず直接姿を現す筈だ。それには学園島に侵入する必要がある。

学園島は東京湾に浮かぶ人工島だ。侵入経路は2つ。レインボーブリッジを通るか、海から密かに上陸するか、である。

陣に情報収集してもらえれば、陸路は潰す事ができ、友哉は残る海路に意識を集中すれば良い事になる。

相手の選択肢を潰す。こうした情報戦では、それが基本的な戦術の一つとなる。

その時、二本のピンク色の線が視界の中によぎった。

と、思った瞬間、目の前に躍り出た人物がキンジめがけて木刀を振り下ろした。

ガンッ

小気味良い音と共に、木刀はキンジの脳天を直撃した。

「イッテエ!?!」

「おろッ?」

頭を抱えるキンジに、驚く友哉。

その目の前で通り魔、神崎・H・アリアが木刀を振り下ろした状態で立っていた。

「もう、一度くらい成功させなさいよね、真剣白刃取り」

困ったように言うアリア。一体、これがどんな練習なのか、友哉にはさっぱり判らなかった。

「お、お前なあ~~~~」

恨みがましい目でアリアを見るキンジ。

その時だった。

《あ~~~~2年B組の・・・星伽白雪、この放送聞いてたら~~~~言うか、聞いてんでしょ。すぐ教務課まで来なさい。以上~~~~》

ものすごく気だるげな声が校内放送から聞こえて来た。

「今のは、綴先生？」

尋問科の綴梅子は白雪の担任でもある。

しかし（キンジ関連以外では）品行方正かつ成績抜群の白雪が教務課に呼び出しとは穏やかではない。

一体何があったのか。

そう思った時、アリアがまるで勝機を掴んだと言わんばかりに、身を乗り出して来た。

「これはチャンスだわ」

「あ？」

「おろ？」

突然何を言い出すのか。意味の判らない友哉とキンジは互いに顔を見合わせる。

「これは、あの凶暴女を遠ざける良い機会よ」

そう言うと、元祖凶暴女たる神崎・H・アリア嬢は二人に向き直り、

「キンジ、友哉、今から一緒に教務課に潜入するわよ」

それはそれは、素敵に遠慮したい提案をなさったのだった。

通風口のダクトの中を匍匐前進しながら、アリアはこうなった経緯を語った。

それによると、アリアは白雪の手によると思われる嫌がらせを受けていたらしい。

アリア曰く、廊下を歩いていると視線を感じたり、渡り廊下から水をぶっかけられたり、下駄箱に「泥棒猫」と書かれた手紙（猫のイラスト付き）が入っていたり、と。

確かに。キンジはもとより、白雪の性格の片鱗を知っている友哉にも、彼女ならそれくらいやりそうだと言う思いはあった。

だが、最後の一つは洒落にならなかった。

何でも、アリアの使っている更衣室のロッカーにピアノ線が張られていたとか。背の低いアリアはロッカーに潜り込まないと物を取れない。それを見越してのトラップだったのだろうが、下手をすればアリアの首が切断されていた可能性もある。

そうこうしている内に、綴の部屋の通風口まで辿り着いた。中から話し声が聞こえて来る所を見ると、既に白雪は来ているらしかった。

三人はそれぞれ、覗き込むようにして通風口から顔を出してみた。

「星伽、あんた最近急に成績落としてるわよね。何かあったの？」

髪をベリーショートにした細身の女性、2年B組担任の綴梅子が、煙草を吹かしながら、目の前に座った白雪と話している。

「単刀直入に聞くけど、あんた、あいつにコンタクトされてんじゃないの？」

「デュランダル、ですか？」

その話が出た瞬間、友哉と、そしてアリアはピクリと反応した。

友哉としては、ここで白雪自身から何らかの情報をえられれば、事件捜査に少し前進が見られる所である。

だが、現実はそのうまいかなかった。

「いえ、そんな事はありません。それに、デュランダルが実在するなら、私なんかよりもっと大物を狙うでしょうし」

「星伽、もっと自分に自信持とうよ。あんたはうちの秘蔵っ子なんだよ」

「そんな……」

「何度も言ってるけど、いい加減ボディガードくらい付けなつて。諜報科のレポートじゃデュランダルがアンタを狙っている可能性が高いってレポートが出てるし、超能力捜査研究科でも似たような予言出てるんでしょ？」

それは友哉も呼んだレポートの内容だった。当然、同じ物を教師陣も目にしている筈である。

どうやら今回、綴が白雪を呼び出した本当の理由は、成績云々よ

りもデュランダル絡みの事が大きいらしい。

しかし綴の再三の説得にも、白雪はなかなか首を縦に振ろうとしない。

「でも、私はキンチャ、幼馴染の子のお世話をしたくて、ボディガードを付けると、その子のお世話ができなくなっちゃう……」

「アドシアードの期間中だけでも良いからさ。どう？」

綴がそう言った時、それまで黙って聞いていたアリアが、何を思ったのか通風口のカバーをパンチ一発でこじ開けた。

「そのボディガード、あたしがやるわ！！」

そう言い放つと、スカートが盛大に捲れ上がるのも構わず通風口から飛び降りて見事着地を決める。

と、それを見ていたキンジがバランスを崩し、着地を決めたアリアの上に頭から落下した。

「ギャツ！？」

「ムギユ！？」

二人折り重なって煎餅みたいになるキンジとアリア。

「ちょ、ちよっとキンジ、どこに頭押し付けてんのよ！？」

顔を真っ赤にして騒ぐ二人。

こうなったら一人隠れている訳にもいけないので、友哉も通風口から飛び降りた。

「ん、これ、どういう事？」

綴は突然現れた三人組を睨み、ツカツカと歩み寄って来ると、アリアのツインテールを片方掴み上げた。

「何だ、誰かと思ったたら、この間のハイジャックトリオじゃん」

「イツタ、痛いわよ、離して！！」

「この娘が神崎・H・アリアちゃん。武器はガバメントの二丁と小太刀の二刀流。付いた渾名が『双剣双銃』。欧州で活躍したSランク武偵ね。で、弱点は確か、およ、」

「わーわーわー！！」

何かを言い掛けた綴の言葉を、アリアは強引に遮った。

「そ、それは弱点じゃないわ。浮き輪があれば大丈夫だもん！！」

アリア、自爆。

どうやらアリアはカナヅチであるらしい。まあ、雷の事も含めて、人間何かしら弱点があった方が可愛げも出ると言っ物である。

綴は次にキンジに目を向けた。

「で、こっちは遠山キンジ君」

「あー、俺は来たくなかったんですが、こいつが勝手に……」

「

そう言ってアリアを差しつつ、無駄な抵抗をするキンジ。

しかし綴は構わず続ける。

「性格は根暗で非社交的。しかしある種のカリスマ性を備えている。武器はベレッタM92の違法改造型。三点バーストとフルオートが可能な、通称キンジモデルだっけ？」

その言葉が出た瞬間、キンジはあからさまに顔を青くして目線を逸らした。

「い、いや、それはハイジャックの時に無くしました。今はれっきとした合法の物を、」

「装備科に改造の予約入れてるだろ？」

ギクツと言うキンジの心臓の音が聞こえたような気がした。

綴は続いて、友哉に視線を向けた。

「そんでもって、そっちが緋村友哉君。飛天御剣流とか言う剣術流派の使い手で、武器は峰と刃が逆になった日本刀、通称『逆刃刀』だっけ？ アンタ、銃くらい持ちなさいって教務課から何度も言われてんでしょ」「

「いや、まあ、前向きに検討してます」

「不正隠しの言い訳する政治家か、アンタは」

呆れたように言いながら、綴は椅子に座りなおした。

「で、ボディガードするってのはどついう事？」

「言った通りよ」

アリアが立ちあがって言う。

「あたしが白雪の護衛をやるわ。二十四時間体制で、もちろん無償で良いわ」

「へえ」

綴は面白い物でも見たと言うふうに関心しながら、白雪に視線を向けた。

「星伽、何か知らないけど、Sランク武偵が口八で護衛してくれるらしいよ。どうする?」

「嫌です」

「一も二も無く、拒否する白雪。」

「アリアと二十四時間一緒だなんて、けがらわしい!!」

いや、けがらわしいって。

呆れる一同を余所に、スカートの下からガバメントを抜いたアリアが、その銃口をキンジの側頭部に突きつけた。

「あたしに護衛させないと、こいつを撃つわよ」

「おいおいっ」

「おろ………」

なぜにそうなるのっ!?

心の中で激しく突っ込みを入れる友哉とキンジ。

だが、白雪には効果があったようだ。

「ど、どうしてもって言うなら、条件がありますッ」

そう言つとギュッと目をつぶり、右手を真っ直ぐ伸ばしてキンジを差した。

「き、キンちゃんも、私の護衛して。24時間体制で。私も、キンちゃんと一緒に暮らすう!!」

その瞬間、教務課が凍りついたのは言うまでも無い事だった。

第10話「時期外れの転校生」

終わり

第11話「迫撃の槍兵」

1

午前中にキンジの部屋での作業を終えた友哉は、私服に着替え、手には竹刀袋に入れた逆刃刀だけを持ってお台場へと繰り出していた。

白雪の護衛をキンジとアリアが行う事に決まり、白雪は当面、キンジの部屋に住む事になった。その引越しの手伝いをしていたのだ。

だがよく考えてみれば、友哉としては、これは非常にありがたい事だ。

デュランダルに狙われている可能性が最も高い人間が白雪であるなら、こちらもその護衛に人員を割かねばならない。となると必然的に、本命であるデュランダル捜査の方の人員を減らさざるを得なくなる。

その白雪の護衛をキンジとアリアが担当してくれる。しかも護衛期間中、白雪はキンジの部屋で寝泊まりすると言う。そうなると友

哉も間接的に護衛に参加する事ができると言う訳である。

これで心おきなく、友哉は魔剣狩りに傾注できる訳である。

その一環である策を実行すべく、友哉はお台場に来ていた。

指定されたうどん屋に入ると、友哉はカウンター席に腰を下ろした。

注文をして暫くすると、すぐ隣に座る人間があった。

「よう、悪いな、呼びだしちまって」

「いや、良いよ、元々は僕が受けた依頼に付き合ってもらってるんだからね」

隣に座った陣に、そう言って笑い掛ける。

お台場の実家がある陣は、寮には入らず毎日バス通学をしている。その為、学外で会うならこうしてお台場で会うのが最適なのである。

「親父、俺は月見な。あと、天麩羅も付けてくれよ」

陣も注文して、友哉は向き直る。

「それで、話つてのは？」

「うん、これは教務課から回って来た依頼なんだけど」

友哉はそう言うと、依頼内容について説明する。

話を聞くにつれ、陣もその顔を険しくする。

「ふうん、そいつは何でまた、超能力者ばかり狙ってるんだ？」
「それは、僕に聞かれても……」

そう言っ て友哉は苦笑する。

実際、デュランダルは存在自体が不確かな存在だ。そこに動機を探れと言うのは更に困難な話である。

「だがな、俺ア、どうにもあのステルスって奴がイマイチ理解できねえんだよな」

「陣は確か、星伽さんと同じクラスだったよな」

「まあな、もつとも、まだあんま話した事ねえがよ」

無理もない。陣はまだ転校してきたばかり。一方の白雪も恐山から帰って来たばかり。そんな二人に接点があったとは思えない。

やがて、二人の注文した品が運ばれて来た為、揃って割り箸を取って食べ始める。

その食事も半分ほど進んだ所で、陣の方から口を開いた。

「で、俺は何をすればいいんだ？」

「うん、君はこの近辺に顔が効くんだよな。その情報網を駆使してできるだけ情報を集めて。特に人の出入りについて重点的にやってほしい。いつもとは違う人間、あるいは違う物の出入り、そういう事があったら僕の方に報告してほしい。できる？」

「任せろ。それくらい召集を掛ければ一発だ」

そう言っ て頼もしく請け負う。

陣は食べるのも早いのか、彼の前には既に空のお碗があるだけだった。

「宜しく頼むよ」

「あいよ、任せとけ。そんじゃな」

そう言うのと、陣は背中越しに手を振りながら店から出て行った。

これでこちらの策は、また一つ形を成した。デュランダルが如何に不確定な存在とは言え、まさか人知を越えた生命体と言う訳ではないだろう。ならば人間である以上、必ずそこに動いた形跡が残る筈。それを追い掛け、そして追い詰める。

いわば、デュランダル包囲網。それが、友哉の立てた作戦だった。姿無き相手を追い詰めるなら、こちらにも相応の備えが必要だった。

「おっと、もうこんな時間か」

友哉は腕時計を見て呟いた。この後、瑠香と茉莉と一緒に買い物に行く約束をしているのだ。

「御馳走様、美味しかったです」

財布を取り出して立ち上がる。

すると、

「あいよ、さっきの兄ちゃんの分も含めて、2550円な」

「…………おろ？」

思わず絶句した。

陣はどうやら、金を払わずに店を出たらしい。そう言えば、前にもこんな事があった気がする。

もしかして陣は喰い逃げの常習犯だったりするのだろうか？

因みに、武偵のルールの一つとして、「武偵三倍刑」と言う物がある。武偵が罪を犯したら、通常の三倍に相当する刑罰が科せられると言う物である。当然、喰い逃げの罪も三倍になる。

できたばかりの友人をそんな事にはしたくない。

と言う訳で、友哉は泣く泣く陣の分も勘定を払うのだった。

2

予想外の出費によってかなり軽くなった財布を片手に、待ち合わせの場所まで行くと、既に二人の少女は来ていた。

「友哉君、おつそおおい!!」

瑠香が両手を振り回しながら叫んでいる。

今日は彼女も私服だ。紺色の長袖Tシャツの上からベストを羽織り、舌は短パン、素足は大胆に出している。彼女のショートヘアと相まって活動的な格好だ。

一方の茉莉は、こちらは見慣れた制服姿だ。臙脂色の防弾制服を着こみ、普段通りのショートポニーが頭の後ろで結ばれている。

今日、この二人と買い物に出たのには訳があった。

友哉は今回の作戦において、二人の協力を得ようと考えたのだ。茉莉は探偵科、瑠香は諜報科、索敵、調査には最適である。

陣が陸路を封鎖し、友哉、茉莉、瑠香の3人で海路、及び学園島内部のカバーを行う。これでデュランダル包囲網の完成となる。

しかし、それに対する報酬と言うのが、『茉莉の私服を買いに行く』事になるとは思わなかった。

寮で彼女の隣に住んでいる瑠香の話によれば、茉莉は私服と呼べるものは全く持っていないとか。それを察した瑠香が買い物に誘ったのだ。

もつとも、それ以外にも成功報酬はきっちり払わないといけないだろうと友哉は思っているが。

とは言え、本当に私服を持っていないとは。茉莉は一体今までど

んな場所で暮らしていたのか。

「それで、どこに行くの？」

「うん、まずは、」

そう言いながら、瑠香は携帯のGPSを確認している。

そんな中で、茉莉は一人、何をするでもなくブーツと立ち尽くしている

「瀬田さんは、何か欲しい服とかあるの？」

「何でも良いです」

何ともやる気に欠ける返事を返され、友哉は苦笑するしかなかった。

「まずはこっちからだよ、行こう」

二人を先導するように、瑠香は歩きだす。それに従うように、友哉と茉莉も歩きだした。

路地の壁に背を預けたその人物は、楽しげに会話しながら歩いていく三人の男女を見詰めている。

向こうはこちらの存在には気付いていない。そのまますぐ目の前を通り過ぎて行く。

「あれが……そうか」

低い声は、喧騒の中へと消えて行く。

男の鋭い眼光は尚も少年達の背中を見据えている。

「さて、本当に言うほどの実力があるのかどうか」

己の内から高ぶる者があるのが判る。

先祖から受け継いだ武人としての血が疼いてくるようだった。

瑠香が連れて行った店は、10代女子に人気のあるファッションモールで、瑠香の友人等もよく利用しているそうだった。

冬が終わり春になった事で、それまで厚着中心だった服も、大分生地が薄くなっているのが見ていて判った。

しかし、ここは女性用のモールな訳で、

見た目はともかく、生物学的に男である友哉が来るには少々難儀な場所である事は間違いない。

が、

「やだ、あの娘可愛い」

「誰か待ってるのかな？」

「どこの娘だろう？」

何やら勘違いした視線を感じるのは気のせいだと思いたいところだ。

「やれやれ、困ったね」

友哉は溜息をつきながら、1人ベンチに座っている。

ここはモールの中にあるランジェリーショップ。どうせなら下着から買いたいと言う事で、瑠香はノリノリで茉莉の背中を押して店の中へと入って行った。

当然、友哉はそこで締め出される。勿論、友哉とて、好んでこんな場所へ突撃したがる勇者ではない。

と言う訳で、友哉はランジェリーショップの前のベンチで待たされているのだが、

これが居心地悪い事悪い事。

ただでさえ女の子の買い物に付き合つのは面倒だと言うのに、それが下着売り場とあっては尚更である。

二人が入って、かれこれ三十分以上になる。いい加減、周囲の人間の目も痛くなって来たところだ。

いっそのこと、どこか別の場所で日までも潰そうかと思いたいと

ころだが、今日の会計は自分が持つと言ってしまった為、それも出来なかった。

その時、

「お待たせしました」

感情の起伏が薄い声とともに、目の前に人影が立つのが判った。

見れば、変わらず武偵校制服を着た茉莉がそこに立っていた。

「やゝ、お待たせ、友哉君。なかなか決まらなくてさ」

遅れて出て来た瑠香が、鞆に財布を仕舞っている。

「それで、料金は？」

「あ、それはあたしが払って、後で纏めて友哉君に請求するから」

何やらそれはそれで、後が怖いような気がしてならないのだが、それで良いと言ってしまった手前、今更後には引けなかった。

「フフフ、それにしても、なかなか良い物が買えたよ。ねゝ、茉莉ちゃん」

最早、瑠香の中では茉莉の呼び方は固定されてしまっているらしい。まあ、仲がいいのは悪い事じゃないが。

「んゝ、でもやっぱり、あっちの方でも良かったような気がするんだけどな」

などと言いつつ、瑠香の手はあろうことが茉莉のスカートを後から捲り上げていた。

「お、おろっ!?!」

角度的に友哉からは見えないが、完全にアウトなめくれ方であった。

「し、四乃森さん!?!」

慌てた調子で茉莉は、自分のスカートを押さえる。

その顔が、ほんのり赤く染まっている。

『へえ、こんな顔もするんだ』

意外な一面を見たような気がして、友哉は少し驚いた。転校してからこつち、どうにも感情の薄い娘のような印象しか無かったが、こうして見ると、転校したばかりで緊張していたせいもあるのかもしれない。

そんな茉莉の目が友哉に向けられる。

「……見ましたか、緋村君？」

「い、いや、見てない」

慌てて眼を逸らす友哉。

「だめだよ、茉莉ちゃん。友哉君がこの手の顔をしてる時は、大抵嘘ついてる時だから」

「いや、何いきなり人の癖をでつち上げてるのッ？」

「大丈夫、あたし尋問科に友達いるから、今から呼んで吊るし上げ、じゃなくて問い詰めよう」

「いや、今本音が出たよね。ツて言うか、スカートめくったの瑠香でしょ。何で僕が責められてるわけ？」

その友哉の言葉に、瑠香が「しまった、ばれたか」という顔をした。

「瑠香……」

「あはは、じゃあ、あたしちょっと、飲み物でも買ってくるね」

そう言うと瑠香は、諜報科としての逃げ足の速さを遺憾なく発揮して足早に去って行った。

「まったく……」

「楽しい娘ですね」

茉莉が元の無表情に戻って言った。

「ああ言う娘が近くにいるなら、きっと毎日楽しいのでしょうね」

「ああ、おかげさまで、退屈しない毎日を送っているよ」

そう言うと友哉は茉莉を促して、ベンチの傍らへと座らせる。

茉莉が腰を下ろした瞬間、ふわっとした良い匂いが友哉の鼻腔に舞い込んで来た。

瑠香やアリアとも違う、どこか自然に吹く風を感じさせる、そんな匂いだった。

「瑠香はどうやら、君の事を気に入っているみたいだ。できれば、これからも仲良くしてくれるとありがたいんだけど」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

友哉の言葉に対し、茉莉は返事を返そうとしない。ただ、自分の足元を見詰めたままジツとしている。

「瀬田さん？」

「・・・・・・・・すみません」

やがて、彼女の口から出たのは謝罪の言葉だった。

「おろ？」

「私には、どうしてもやらなくてはならない事があるんです。それを成すまでは、自分自身の事を考える訳には行きません」

そう告げる茉莉の瞳は、何か硬い決意を宿しているようで、一種の拒絶にも似た雰囲気醸し出していた。

この華奢な少女が、何かその身に余る重荷を背負っているのではないか。友哉にはそう思えてならなかった。

「・・・・・・・・判った」

ややあって、友哉は言った。

「君がそう言うんだったら、無理強いはできないね」

「すみません」

「でもね、」

謝る茉莉に、友哉は更に続ける。

「困った時は、いつでも言っつて。僕や瑠香はいつでも君の助けになるよ」

その言葉に、茉莉は意外そうな面持ちになる。まるで、友哉の言葉の意味が判らないと言った感じである。

「なぜ、そのような事を言っつんですか？」

「おろ？」

「私とあなたは、ついこの間知り合っつたばかりです。それなのに、なぜ……」

知り合っつたばかりの自分に、ここまでしてくれる友哉や瑠香の存在が、茉莉には不思議でならない様子だっつた。

対して、友哉はニツコリと笑っつて見せる。

「武偵憲章一条『仲間を信じ、仲間を助けよ』だよ。仲間が困っつているなら、僕達はたとえどんな状態であっつても助けに行く。それに、

「それに？」

「実際、そんな物が無くても、友達が困っつているなら、助けたいっつて思っつのが普通でしょ」

「友達……」

まるで新しい外国語でも聞いたかのように、茉莉は友哉の言葉を反芻する。

「僕達は、もう友達、でしょ？」

そう告げる友哉に、茉莉は少し視線を逸らす。

友哉の位置から、その表情を覗く事はできなかったが、どうにも照れているのを隠している仕草に見えない事も無かった。

ちょうどその時、向こうから瑠香が走って来るのが見えた。手に抱えているのは買って来た飲み物だろう。

「あの娘も、きっと君の事をそう言う風に思っているんじゃないかな」

そう言うと、走って来た瑠香からペットボトル入りのお茶を受け取る。

「友達……か……」

そんな彼等に気付かれないように、瑠香はそっと口に出して呟いた。

結局その後、瑠香のエスコートに従い、数件のファッションショップを梯子し、茉莉に合った服を何点か見繕う事ができた。

最後の店を出た時には日は完全に傾き、夜の帳が下りようとしている所だった。

友哉は両手に紙袋を持ち、少し疲れた調子で歩いている。

瑠香の買い物好きは今に始まった事じゃないが、今日は何やらいつも以上に気合が入っていた気がする。

疲れていると言えば、茉莉もまた同様だった。

何しろ、今までファッションと言う物に殊更無頓着だった少女である。それが今日一日瑠香に振り回され、散々着せ替え人形にされたのだ。これで疲れない訳が無い。

「いや、でも良かったよ、茉莉ちゃんの可愛い服いっぱい買えてこれで、当分は私服に困らないね」

一人、全く疲れていない瑠香が、満足げにそう言う。彼女としては目いっぱい茉莉で堪能して、さぞご満悦な事なのだろう。

「そだ、茉莉ちゃん。お部屋に帰ったら、今日買った服、全部着てみようよ」

「ま、まだやるんですか……」

流石の茉莉も、疲れ切った様子でそう言った。

そんな少女達の様子に、友哉は苦笑した。

その時、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

友哉は足を止める。

その鋭い視線が、自分達の進む先、薄暗くなりかけた路地の向こうに佇む人影に気づいたのだ。

「友哉君？」

友哉の変化に気付いた瑠香と茉莉も、揃って足を止める。

そんな3人の耳に、ゆっくりと近づいて来る足音が聞こえて来た。

闇の中からにじみ出るようにして現われたのは、まるで巖のようなお男であった。

ガツシリした肉付きの巨体は、まるで立ちふさがる壁のようだ。顔は覆面をしている為見る事ができない。そして、その手には巨大な槍を携えていた。

次の瞬間、覆面男は槍を掲げ斬り込んで来た。

「ッ!？」

とっさに紙袋を投げ捨てると、友哉は茉莉と瑠香を両手に抱えて横に跳び退いた。

着地しながら、竹刀袋を縛っている紐に手をやる友哉。

その視線は、謎の襲撃者に油断なく注がれる。

「あなたは誰ですか？ なぜ僕達を襲うんです？」

問いかけに対し、覆面男はゆっくりと振り返りながら、腕を伸ばす。

指示された指の先には、地面に座り込んでいる茉莉の姿があった。

「その娘、こちらに渡してもらおうか？」

「え？」

突然名指しされ、茉莉は戸惑った様子で男を見上げる。

なぜ、自分を欲するのか判っていない様子だ。

そんな二人の間に、友哉が割って入った。

「事情は判りませんが、こんな暴力で友達を連れて行くのは許しません」

そう言うと袋を解き、逆刃刀の柄に手をやった。

対して覆面男は無言のまま、槍の穂先を友哉に向けた。

次の瞬間、男が猛然と槍を繰り出して来た。

対して友哉も、穂先を払うべく刀を繰り出す。

しかし、

「ッ!？」

覆面男の槍は所謂十字槍であり、穂先の両脇に更に二本の刃が枝のように飛び出ているタイプだった。

その枝に、逆刃刀を引っ掛けて来た。

「クッ!？」

とつさに後退する事で拘束から逃れようとする。

だが、間合いの広い槍使い相手に、後退するのは自殺行為に近い。

「ぬんッ!!!」

そのまま地面を踏み込むような勢いで、更に突きを繰り出す覆面男。

だが、次の瞬間、友哉は高速で覆面男の横に回り込み、フルスイングの要領で逆刃刀を覆面男の胴めがけて振るう。

その一撃が入るかと思われた瞬間、

「甘いッ」

地を割るような声と共に、覆面男は槍を旋回させ柄で薙ぎ払いを

掛けた。

一般に槍とは刺突武器だと思われがちだが、その長柄の遠心力を利用した大威力による、打撃、斬撃もまた槍の重要な攻撃要素と言える。

「クツ!？」

とつさに攻撃を諦め、刀で受ける友哉。

だが、覆面男の膂力は凄まじく、友哉はそのまま持ち上げるように大きく吹き飛ばされた。

「友哉君!！」

吹き飛ばされる友哉を見て悲鳴を上げる瑠香。その視線の先で、友哉は空中で宙返りし、辛うじて地面に着地する事に成功していた。

「四乃森さん、援護をッ」

「う、うん」

そう言うと、二人は銃を取り出して構えた。

瑠香は先日のハイジャック事件の後、買い直したイングラムM10サブマシンガンを構える。

一方の茉莉の手にはベルギー製自動拳銃ブローニング・ハイパワーIDAが構えられた。高い信頼性と実用性から、50カ国以上の軍や警察で正式採用されているベストセラー銃である。

少女達が引き金を引き、放たれる弾丸。

対して男は身じろぎすらせずに、全身で弾丸を受け止める。

「グッ」

命中弾は多数。

男の口からは僅かに声が漏れる。が、それだけだ。

だが、覆面男は身じろぎすらしていない。恐らく、防弾服を着こんでいるのだろつが、弾丸の着弾を受けてダメージを受けていないあたり、かなり体を鍛えている事が窺えた。

「そんな……」

銃が効かないとなると、少女達にできる事は無くなってしまふ。

一方、友哉は腕を振って痺れを解消しながら立ち上がる。

覆面男は見かけによらず、槍の扱いにはかなり習熟していると見た。た。

流派は恐らく、宝蔵院流槍術。

奈良興福寺の僧、宝蔵院覚禅房胤栄が創設した十文字槍を使用した流派であり、彼の剣豪、宮本武蔵が決闘を挑んだ事でも有名な流派である。

槍と相對する時は、その内懐に飛び込めば有利とされるのがセオ

リーであるが、この宝蔵院流にはそのセオリーが効かない。「突けば槍 薙げば薙刀 引けば鎌 何につけても逃れざらまし」と詩で詠まれている通り、極めれば死角が一切存在しないのだ。

感覚の戻った右手で刀を持ち、友哉は刀を片手平正眼に近い形で構える。

対して覆面男も、槍を友哉に向け直した。

対峙する一瞬。

仕掛けたのは覆面男の方だった。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

雄叫びと共に、鋭い刺突が友哉に襲い掛かる。

対して友哉は向かって来る槍の穂先を真っ直ぐに見据え、

命中の直前、大きく体を右に逸らした。

だが、まだだ。

覆面男は臂力を使って槍を引き戻し、枝で友哉を切り裂こうとする。

しかし、

次の瞬間、友哉は回避の勢いを殺さずに体を一回転させると、回転の勢いを刃に乗せてそのまま覆面男に繰り出した。

「飛天御剣流、龍巻閃！」

とぐるを巻いた龍が、その牙で獲物に食らいつくが如く、友哉の剣は無防備に晒された男の背中を強打した。

「グオツ!？」

神速の一撃に、男は思わず背中をのけぞらせる。

いかに隙が無い攻撃ができるとしても、槍のような重量武器はどうしても攻撃に移るまでにタイムラグが生じる。その一瞬の隙を友哉は突いたのだ。

友哉の一撃を受けて、男はよろめくように膝をつく。

対して友哉は距離を取りながら慎重に刀を構えた。

今の一撃でダメージは入ったようだが、それでも油断できる状況ではなかった。

そんな友哉を前にして、覆面男はゆっくりと立ち上がるとそのまま踵を返す。

「何を」

「今日の所は退こう」

突然の行動に戸惑う友哉に、覆面男は低い声で告げた。

「だが、近いうちにまた再戦する機会が来よう。その時まで息災で

な

そう言つと、男は来た時と同様に闇の中へ滲み込むように去って行った。

友哉もまた、戦闘は終わったと判断して刀を鞘に収める。

そこへ、瑠香と茉莉が駆け寄つて来た。

「友哉君、大丈夫？」

「怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫だよ。それより、」

友哉は茉莉に向き直つた。

「あの男は、瀬田さんを連れて行くつもりとしていたみたいだけど、何か心当たりはある？」

「いえ、それが、全く……」

そう言つと、茉莉は顔を伏せる。彼女も、なぜ自分が狙われたのか判らない様子だった。

「そつか……」

友哉もそれ以上は追及せずにいる。

デュランダルへの対応だけでも充分忙しいと言つのに、ここにきて更に別の案件が浮上してきた事になる。

だが、武偵憲章一条「仲間を信じ、仲間を助けよ」

友哉は先程茉莉に語った通り、自分の力の及ぶ限り、皆を助けるという決意に揺らぎはなかった。

覆面の取ると、丸橋譲治は大きく息をついた。

最後に友哉が放った一撃は会心と言って良く、背骨が折れると思えるほどの衝撃に襲われた。

一応、衝撃を吸収する特殊素材を使った防弾服を着てはいたが、その服を貫く程の衝撃であった。

「噂に違わぬ、と言ったところか」

そう言つと、壁に手をついて痛みに耐える。

ちょうどその時、ポケットに入れておいた携帯電話が着信を告げる。

相手は彰彦だった。

《私です。首尾はいかがですか？》

「問題無い。お前に言われた通りにやったぞ」

今日の戦闘は彰彦の指示による物だった。買い物に出る友哉達を帰りに待ち伏せて襲撃すると言うのが内容であった。

《上出来です。これで緋村君は、彼女の事を疑いもしないでしょう》
そう言うと、電話の奥で彰彦が笑みを浮かべているのが判った。

デュランダルとそれを支援する者達は、着実に距離を狭めて来ている。

その事に、まだ友哉達は気付いていなかった。

第11話「迫撃の槍兵」

終わり

第12話「闇夜に咲く花」

1

アドシアードが近付くにつれて、学園島は徐々に賑わいを見せ始めていた。

何しろ世界各国から人が集まる一大イベントである。国籍、人種に関わらず、総面積100万?の学園島は人に埋め尽くされる事になる。

まさにデュランダルが活動するなら、最適な環境と言う事になる。

友哉は自室のソファーに座り、山積みされた書類と格闘していた。

陣が不良時代の仲間から集めたお台場周辺、更に芝浦、品川の情報。瑠香と茉莉が集めてくれた学園島内部の情報が今、テーブルの上に積み上げられている。

しかし、予想していた事だが芳しい成果は上げていない。

この中に有益な情報は、ほんの一撮みだろう。

だが、これで良いのだ。

友哉の作戦、「デュランダル包囲網」の本質は、敵の選択肢を潰す事にある。

こうして、こちらが監視している事をデュランダルが感知すれば、それだけこちらを警戒して動かざるを得ない。つまり、その動きは鈍らざるを得ないと言う訳だ。

その為、陣にはなるべく派手に、人目に付くようにやるよう指示を出している。デュランダルに、こちらの動きをわざと察知させるためだ。

『これで、デュランダルが、どう動くか』

デュランダルは犯行を行う前段階として、必ず何らかの脅迫メーを被害者に送っているらしい。そちらの方はアリア達に頼んでそれとなく気に掛けて貰っているが、今のところ目立つ動きは無いらしい。

と、

「友哉君ッ」

「おろ！」

突然名前を呼ばれ、友哉は考え事を中断して顔を上げると、制服

の上からエプロンを着込んだ瑠香が困ったような表情で立っていた。

「もう、いつまでこうしているつもり？ 早くしないと遅刻するよ」
「ああ、ごめん」

時刻は間もなく7時半を回ろうとしている。最近では事件調査も行っている為、以前より登校時間が遅くなってきているが、通学にバスを使わない友哉としては、そろそろ出発したい所である。

「瀬田さんも悪いね、付き合わせちゃって」

「いえ、構いません」

茉莉は相変わらず起伏の少ない言葉で、友哉にそう返した。

今までは瑠香が食事の準備をしに来てくれるのが当たり前だったが、最近ではそれに茉莉も加わるようになった。瑠香と茉莉は仲が良いし、寮の部屋も隣同士である事から、この流れは自然な物であった。

茉莉と言えば、結局この間の覆面男の事は、改めて考え直してみても、茉莉には全く心当たりがないらしい。一体なんだったのか、真相は不明であるが、あの男の口ぶりからして、近いうちにまた現れる可能性はある。十分に注意する必要があった

「あつと、そうだ。今日は出発前に隣に寄って行くからね」
「隣・・・ああ」

一瞬考えてから、瑠香は察したように頷いた。

キンジが風邪をひいて、今朝から寝込んでいるらしい。

昨夜勃発した第二次お隣大戦（命名：瑠香）の結果、巻き添えを食らったキンジは、窓から東京湾に突き落とされたらしい。その結果、見事に風邪をひいたとの事だった。

これは以前、キンジから聞いた事なのだが、彼は体質的に薬の類が効きにくいらしい。これは薬物に対する攻撃に耐性がある半面、回復薬も効きにくい事を意味していた。

そんな訳で、風邪をひいてしまったキンジは大人しく寝ている以外にない訳である。

勝手知ったる隣の部屋に入ると、3人は寝室へと進む。部屋の構造は友哉の部屋と同じである為、特に迷う事も無い。

向かって2台ある2段ベッドの内、向かって左側の下段がキンジのスペースである。

「おはよう、キンジ。具合はどう？」

「お、おう、緋村、それに四乃森と瀬田も来てくれたのか」

弱々しく目を開けるキンジ。どうやら、起きているのもつらいらしい。

「先生には、キンジが今日休むってのは伝えとくよ。あと、何か欲しい物とかあるんだったら、放課後買ってくるよ？」

「いや、飯は白雪が作って行ってくれたが、どうにも食欲がない。

それに、薬が欲しいんだが、この辺じゃ売ってないからな」

「薬たっだら、あたし買ってきますよ？」

瑠香の言葉に、キンジは力なく首を横に振る。

「いや、俺が飲む薬は特濃葛根湯っていうんだが、この辺じゃアメ横まで行かないと売ってないんだよ」

それは、確かに面倒くさい話だ。アメ横は上野と御徒町の中間ぐらいに位置し、どちらの駅からも少し離れている。放課後に行くには少々手間が掛りそうだった。

「そう言う訳だから、あまり気にしないでくれ」

「判った、じゃあ、せめてプリントの配布とかあったら取っておくよ」

「おう、頼む」

これ以上はキンジの負担になりかねないので、3人は早々に部屋を辞し、登校の途に付いた。

とは言え、ここに来て友哉には不安材料が浮上しつつあった。それは、アリアと護衛対象である白雪の仲が悪すぎる事だった。

何しろ、二人ともあの性格である。反りが合わないのは初めから予想できたことだった。

今回の一件もその延長にある。何とかしないと、これが致命的な失策にも繋がりがねなかった。

「それじゃあね、友哉君、茉莉ちゃん!!」

手を振りながら走って行く瑠香を見送ると、友哉と茉莉も二年生の教室の方へと足を向けた。

「そう言えば、」

並んで歩きながら友哉は、横を歩く茉莉に話しかけた。

「何でしょう?」

茉莉は友哉より少し背が低い為、向かい合って話すと彼女が見上げるような形になる。

「あの後、買った服は着てみたりの?」

つい先日、お台場に瑠香と3人で買い物に出かけ、茉莉の私服をあれこれ買いこんで来たのだ。

生憎と言うべきか、友哉はその服を着た茉莉をまだ見ていないのだが、瑠香曰く「ファッションショーのモデルさんみたい」と言う事だったので、ぜひ見てみたいと思っているのだが。

対して茉莉は、少し視線を逸らして前を見た。

「その、四乃森さんが、よく私の部屋に来るので、それで……」
「……ああ」

「恥ずかしそうに口ごもる茉莉の様子に、友哉は大体の事情を察した。

恐らく瑠香の手によって、ほぼ毎晩のように着せ替え人形にされているのだろう。買って来た服だけではすぐにレパトリーが無くなって飽きるかもしれないが、瑠香と茉莉は背も体型も似ているので、瑠香が自分の服を貸しているのかもしれない。

「はは、それは災難だね」

と、言いつつ、一言付け加える。

「今度、僕にも見せてくれないかな？」
「恥ずかしいから嫌です」

にべもなく断られ、苦笑するしかなかった。

その時、

「おい、緋村」

名前を呼ばれ振り返ると、友人の武藤剛気が片手を上げてこちらに歩いて来るのが見えた。

「武藤、どうしたの？」

「さつき、相良の奴がお前の事探してたぞ。何でも、屋上の方に来てくれってよ」

「判った、ありがとう。それじゃあ瀬田さん、悪いんだけど」

「はい、また後で」

そう言っつて茉莉と別れると、友哉は屋上へと足を向けた。

屋上へ上がると、すぐに見慣れたぼさぼさ頭が見えたので、手を振って合図をする。

陣がわざわざ呼び出したと言う事は、何か進展があったのかもしれない。

そう期待していたのだが、どうにも陣の顔は浮かない様子だった。

「どうかしたの？」

「いや、な」

少し言いにくそうに、陣は話し始めた。

何でも、友哉に頼まれた情報収集を始めてから、昔の仲間に変化が起こり始めたとの事だった。

「始めはちょっとした事だったんだがよ、どうも最近では立て続けなんだよ」

陣の昔の仲間達が、何者かによって闇討ちされていると言っただ。徐々にその人数は増え続け、ついには病院送りになった者も複数いるとか。

「ちよつとやそつとの事でビビるような連中じゃねえのは俺が保証するがよ。だが、流石に今回はやべえ感じた。何しろ、誰も襲った奴の姿を見てねえって言うんだからな」

屋上のフェンスに身を預けながら、陣は少し沈んだ声で言う。彼としても、昔の友人が傷付けられるのは面白くない事だろう。

だが、友哉はある一点、今の陣の話に気になる事があった。

「陣、誰も、襲撃者の姿を見てないって言ったよね」

「ああ、何でも殆どが不意打ちだったらしいからな」

デュランダルは「姿無き」誘拐犯である。そして、今回の襲撃者の姿を「誰も見ていない」。この二つの共通点が、友哉の中で歯車を組み合わせる。

「良い感じだね」

「何がだよ？」

不機嫌そうに言う陣に、友哉はニッコリ笑って見せる。

「今まで僕達は、デュランダルと言う存在が、いるのかどうかさえ判らなかつた。でも、こつちのアクションに対して、明確なリアクションが返された。これは、敵を覆っていたベールが着実に剥がされている事を意味している」

友哉は確信を持って断言した。

「デュランダルは確かにいる。そして、間違いなく僕達の近くまで来ている筈だよ」

魔剣狩りに関する確かな手ごたえを、友哉は今、確かに感じていた。

教室に入ると、茉莉は自分の席へと足を向ける。

何人かのクラスメイトと挨拶を交わしてから、自分の席へと座る。

隣の席は未だ空席。それはそうだ、つい先ほど、友哉は相良陣に呼ばれて別行動をとっているのだから。

相良と言えば、彼がこの武偵校に入っている事も茉莉にとって予想外だった。

相良とは前の仕事の時に一緒になっている。今、顔を合わせる訳にはいかなかった。幸いにして、今のところばれた形跡はない。

まったく、いくら不調とは言え、これだけ重大な情報を見逃すとは。下手をすれば作戦が崩壊しかねない失態である。

自分の上役に心の中で文句を言いつつ、思考は別の方向へと切り替える。

『それにしても……』

茉莉は未だ空いたままの、隣の席を見やる。

緋村友哉。

不思議な空気を持った少年だと思う。

出会ってから、まだそれほど時間が経っていないと言いつのに、なぜか話していて落ち着く気がする。

その答えが何なのか茉莉には判らない。

『僕達は、もう、友達でしょ』

そう告げた時の優しげな眼差しが、いつまでも脳裏から張り付いて離れない。

友哉の事を考えるだけで、胸に針が刺さったような痛みを感じる。

『でも……』

湧き上がりかけた感情を、茉莉は強引に打ち切る。

『私はいずれ、彼等を裏切らなきゃいけない』

それは既に、確定された未来であり、やがて来る予定調和でもある。

その時、友哉がどんな顔をするか、瑠香がどんな思いになるか、それを想像できない訳ではない。

だが、

『それでも私には、成さなければならない事がある』

例え、全てを斬り捨てたとしても、手にしたい物がある。

胸の奥に秘めた悲壮な決意の元、茉莉は自分の運命を受け入れる。

全ては、己が望みの為に。

3

それから数日は、特に動きも無いままに推移した。

友哉は不知火から借りたI podに耳を傾けながら、階段を上っている。

曲名は「フリー・ショット・ザ・フラッシュ」。アドシアードの閉会式で友哉達がバンドを組んで歌う曲である。因みに友哉のポジシ

ヨンはボーカルを任された。当日までにちゃんと覚えないと、武藤に轢かれそうなので頑張つて憶えているところである。

あの後、幸いにしてキンジの風邪は一日で回復し、翌日には学校に出てきていた。

何でも、白雪がわざわざ件の特濃葛根湯を買って来てくれたらしい。全く持つて、白雪のキンジに対する献身ぶりは大した物と言わざるを得ない。

だが、一難去つてまた一難と言つべきか、新たな問題に頭を悩まさなければならなかった。

キンジとアリアが仲違い、アリアが白雪の護衛任務から外れてしまったのだ。

性急と言わざるを得ない。せめてアドシールドが終わるまでは護衛を継続してほしかったのに。特にデュランダルの影が見え始めている現状にあつては尚更だった。

だが、取り合えずはキンジだけは護衛として残っている。加えてアリアが残して行った策もまだ生きていた。

その策を確認する為、友哉は狙撃科棟に足を運んでいた。

屋上の扉を開くと、四方を海にして東京湾を一望する事ができる。

因みに今夜、東京ウォルターランドで花火大会が催される事になっている。瑠香にはさんざん連れて行ってくれとせがまれたが、流石に任務中にそれはできない。その代わり、今夜、友哉の部屋で茉

莉も誘って三人で遠くの花火を眺めながらちよつとした宴会をやる事になっていた。

目当ての人物は壁に背を預けて体育座りをしていた。

「レキ」

名前を呼ぶと、緑掛かったショートヘアの少女、レキは振り返った。

白雪を護衛するに当たって、二人では手に余ると考えたあり派が、予めレキにも声を掛け、手の空いている時に遠距離から監視するよう依頼していたのだ。その依頼は、アリアが外れた今でも有効である。

「様子はどう？」

「異常ありません。先程、護衛対象の白雪さんはキンジさんと一緒に生徒会室に入ったのを確認しています」

2キロ以上の狙撃能力を持つレキにとって、校内を監視する事くらいは造作も無い話である。武偵殺しが起こしたバスジャック事件の時も、その能力を活かして活躍している。

もし友哉の包囲網やキンジの護衛が突破された時、彼女が白雪を護る最後の砦となる。

「そっか。はい、差し入れ」

そう言うと、友哉はカロリーメイトのチーズ味を一箱差し出す。レキはいつも、これを常食しているのだ。味気ない食事と言えばそ

うだが、忍耐力が要求されるスナイパーと言う兵種に置いて、食事
も短時間で済ませる必要がある。そう言う意味で、このカロリーメ
イトは最適なのだろう。

レキは少しの間、友哉の顔とカロリーメイトの箱を見比べたあと、
黙って受け取った。

その様子に、友哉は苦笑する。

この娘も、茉莉とはまた違う意味で感情の起伏が乏しい。いや、
感情が見られないと言う意味では茉莉以上かもしれない。これが先
天的な物なのか、あるいは後天的な物なのかは判らないが、本人同
士が一緒にいる所を一度見てみたいと思った。

いや、やっぱりだめだ。どう考えても間が持たない事は目に見え
ている。

「それじゃ、引き続き宜しく頼むよ」

そう告げる友哉にレキは、今度は返事を返さず、ただコクリと首
を縦に振った。

夜になり、友哉は部屋の片づけを終えると、予め買って来て置い
た食べ物や飲み物を机の上に並べた。

ここ数日、部屋を占領していたデュランダル関連の書類の山も今

は無い。

全て片づけて、今は綺麗に掃除もしてある。

朴念仁を地で行く友哉でも、正式に客を招く時にはこれくらいの気遣いはする。

買っておいいた菓子とジュース、紙コップを並べ終えた所で玄関のチャイムが鳴った。

ややあつて、パタパタと二人分の足音が聞こえて来た。

「やつほー、友哉君こんばんは」

瑠香は手にした風呂敷包みを掲げながら入って来た。どうやら何か作って来たらしい。

「今日は作って来なくて良いつて言ったのに」

「良いから良いから、あつても困らないでしょ」

確かに、瑠香の食事は美味しい。あればそれだけで嬉しいのは確かだ。

今日は瑠香も防弾制服ではなく、長袖のTシャツに短パン、膝上の二ソックスと言う恰好をしている。

「おろ、瀬田さんは？」

「いや、それがね」

瑠香は意味ありげな視線を、廊下の方に流す。

すると、廊下の影から顔を半分だけ出した茉莉の姿がある。

「瀬田さん？」

「ッ」

すると何を思ったのか、茉莉は首を引っ込めてしまった。

そんな茉莉の様子に焦れたように、瑠香が歩み寄って手を引っ張る。

「ほぐら、何やってんの茉莉ちゃん」

「やっ、し、四乃森さんッ」

とつさに足を踏ん張ろうとするが、抵抗空しく茉莉はリビングに引きずり出された。

その瞬間、友哉は思わず息を呑んだ。

茉莉もまた、私服姿でそこにいた。

うすい青色の半袖Yシャツに、首には薄手のパーカーの袖を結んで引っ掛けている。舌は黒字に緑のチェックが入ったミニスカート。幅の太いベルトで止めているが、丈が武偵校の制服並みに短く、今にも下着が見えてしまいそうだった。

「あ、あの、あんまり見ないでください」

「あ、ああ、ごめん」

恥ずかしそうに体を小さくする茉莉と、慌てて眼を逸らす友哉。

そんな二人を、瑠香は楽しそうに眺めると、茉莉の方を持って前へ押し出す。

「ほら、だから言ったでしょ、友哉君はこう言うのが好きだって」

「は、はい……」

「い、いや、別に僕は……」

言いながら、友哉はもう一度視線を上げて茉莉を見る。

「か、可愛いよ」

一言、そう告げるのがやっとだった。

「あ、ありがとうございます」

対して茉莉も、それだけ言うと黙りこんでしまった。

その時、

ヒュウウウウウウ

ドオオオン

遠雷のような音が鳴り響き、遠くの夜空に大輪の花が咲き誇った。

「あ、始まりました」

「おっと、じゃあ、ベランダ行こうか」

「そうだね、あ、電気消すよ」

瑠香が電気を消すと、各々手に飲み物を持ちベランダへと出る。

灯が落ちた闇の中で、巨大な花火が打ちあがり、咲いては散って行く。

距離があり、間に遮蔽物もある為、角度的に見えない場合もあるが、それでも大きく打ちあがった物はベランダからでも見る事ができた。

三人は、暫くの間、お互いの顔を一瞬だけ照らし出してくれる遠くの彩炎に、浮かされたように見入っていた。

マナーモードにした携帯電話がメールの着信を知らせ、茉莉はスカートのポケットから取り出して液晶を見る。

『全ては整った。決行は近い。次の指示を待て』

茉莉は黙したまま、携帯電話を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7348z/>

緋弾のアリア ~ 飛天の継承者 ~

2012年1月14日13時45分発行